

---

# 帝国物語 ~白百合のマリア~

緋鯉ナオキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝国物語 ～白百合のマリア～

### 【Zコード】

Z6623H

### 【作者名】

緋鯉ナオキ

### 【あらすじ】

『旧世界』が滅び、『新世界』となつた時代。エコード、マルスオフといった怪物達が世界を蹂躪し、人々の生活を脅かしていた。それらに対応するため国々は合併を繰り返し、大帝、魔帝、剣帝、賢帝、武帝という5大帝国連合を結成。エコード達と明けることのない戦争を繰り返していた。そんな中、『ハンター』ソネットはある少女を護衛する依頼を受ける。『十の獣』と呼ばれるS級犯罪者とエコードに少女は狙われていた。息子のダンテ、帝国軍のカンタロウ、キクと共に、『女神』と呼ばれる少女ノゾミを護衛しつつ日

的でへと旅立つこととなる……。

これはある親子の物語。

## 帝国物語の始まり

高度な機械が動き、センチネルと呼ばれるロボットが働く世界。最先端の科学と文化が人々の生活に浸透し、文明は発展していた。しかし、その世界は突然終わりを迎えた。

空を赤い花びらが覆いつくし、人々は怪物へと変貌していく。後に『紅姫現象』といわれたこのウイルスは、13人の少年と1人の女を除いてすべての人類は絶滅させた。人外の者が蠢く世界に残された13人の少年と1人の女は、新世界を造るべくそれぞれに名をつけ、神と名乗った。

神々が死に絶え、力のみの存在となつた世界。旧世界と比べ、そこでは魔法と剣が発展し、妖精や獣人といった異種族との交流があり、人々は機械よりも自然と共に共生することを選んだ。その世界で人類の悩みの種となつていたのはエコーズ、マルスオフといった怪物達だった。特に知能の高いエコーズには1国の王ですら手を焼き、彼らに滅ぼされる国が後をたたなかつた。そこで国々は合併を繰り返し、5大帝国を造りあげ、エコーズ達に対抗していった。また、人間達の中には、13人の神の力を扱え、身体能力が向上する『赤眼化』と呼ばれる高位魔術を発動できる者も出てきた。

エコーズ達と人間達の戦いはまだ続いている。

## 『赤い眼』での用語集

### ハンター（なんでも屋）

帝軍や国軍といった資格を持たない賞金稼ぎ。規約に制約されず、自由に賞金を稼げるが、定期給与や福利厚生といったサポートを受けられないのが難点。この世界での大半の賞金稼ぎはハンターのことを指す。主に仕事はギルドやレテランスからもらい、まれにだがマルスオフやエコーズと戦うこともある。

### 帝國軍第四類（死帝）

5つある帝國の中で大帝が管轄する軍隊。通称『死帝』と呼ばれている。最も危険度の高いマルスオフレッド認定やエコーズ、国際指名手配犯であるA級、S級犯罪者と戦う戦闘のエキスペートである。少數精銳の遊撃部隊で1～5人で行動している。元は賞金稼ぎだった者が多い。國家資格の証である右手の甲に『大帝國の国章』をもち、『赤眼化』と同時にうかびあがるシステムになっている。定員は50名でそれぞがランクづけされている。採用試験の条件が『赤眼化』であるため全員が高位魔術を扱える。ランク20位から上は大帝國永住権を持っている。

### 神の血脉（絶滅種）

13神の1人、『2番目の息子』ファーストが及ぼす影響により生まれた者。出生した時から『赤い眼』と『烙印』を持ち、使用不可とされる魔術、『ファースト』の力が使える。そのためか人々から恐怖され、恐怖の対象もしくは狂信の対象となっていた。しかし、

ファストが『力のみの存在』となつたため『神の血脉』を持つ者は普通の人間と戻つていった。現在はその存在を確認されていない。

### マルスオフ（遺伝子破壊された怪物）

13神の1人、『5番目の息子』マルスにより生み出された怪物達。人々から怪物達の総称としてそう呼ばれている。『赤い瞳』を持ち、姿は怪物と呼ぶにふさわしく醜い。大地を通りて『神脈』を嫌い、森の奥や沼地など人が滅多に通らない場所に巣をつくっている。帝国はマルスオフをブルー、イエロー、レッド、ダークと区分しており、マルスオフレッド認定は数が少なくかつ賞金額が高い。

### エコーズ（旧世界の帰還を喰く者）

神々の失敗作。旧世界の人間。『1番目の息子』ロードの戯れにより生み出された者。様々な呼称がある。マルスオフと比べて言語能力があり常に「かえりたい」と喰くためエコーズと呼ばれた。数の多いマルスオフとコンタクト・リンクし、集団で襲つてくるのでこの世界では脅威的な存在として扱われている。大体1体のみで行動している。姿は人型から獣型まで様々である。特に言語能力が特に高く、帝国に攻め込んだ24体のエコーズのことを『24エコーズ』と呼ぶ。

### ハウリング・コール

エコーズの特殊能力の1つ。近くにいるマルスオフを呼び出すことができる。すべてのエコーズにこの能力が備わっている。強力なエコーズになると、空間からマルスオフをワープさせ、呼び出すことができる。

## コンタクト・リンク

エコーズの特殊能力の一つ。相手の意識を支配し、操ることができる。主にエコーズはマルスオフに行つ。他にも、『副人格』として相手の意識に潜り込む時にも使われる。単純な意識をもつ者には簡単だが、複雑な意識をもつ人間には難解となる。

## パーフェクト・コンタクト

『主人格』と『副人格』が完全に統合すること。『主人格』が優勢となつて『副人格』の力を吸収すること。

## S級犯罪者（罪名犯罪者）

人の名を持たぬ者。犯罪等級の中では最高であり最悪の犯罪者達。彼らは人の名で呼ばれる事はなく、『獣の名』で呼ばれるようなる。自らマルスオフと合成し、その力を得た者が多い。彼らのことをマルスイブと呼ぶ。

## 赤眼化（神との同化）

13人の神と同じ『赤い眼』と『神の印』をしているためそう呼ばれるようになった。生体研究のマクベスによると、空中に浮遊しているウイルス『紅姫』を無害にする抗体反応が高まって、通常の人間が神の力を得たと言われている。実際黒い瞳を持つ者も、『赤眼化』することによって赤い瞳へと変化してしまう。『ロードの印』と呼ばれる印が右目から下半身に伝わり、『赤眼化』は完了する。この状態になつた人間は身体能力が向上し、『13神の力』も一桁詠唱で扱えるようになるため高位魔術師なみの実力をもつ。欠点は持続時間が短く、無理な『赤眼化』を続けば身体の細胞破壊（人

体の白化現象）が進行してしまつ。赤眼化できる人間の数は少なく、帝国諸国は強力なマルスオフやエコーズと唯一戦闘できる希少な人材として優遇している。

### 13神の力（第一級高度魔力）

13人の神の魔力を扱うこと。力はバリエーションがあり、術者によつて個々の特徴が出る。通常の術者は長い詠唱を唱えなければならぬが、『赤眼化』したものは『神の名 + 一桁詠唱』で術を発動できるため一桁詠唱と呼ばれている。攻守ともに強力な魔術を発動できる。その力は魔術の基礎となつてゐる。また、エコーズやマルスオフ対策として有効とされている。

『魔剣術』 < 『四天』 < 『特殊な術』 と術が難解になつていき、『魔剣術』が最もよく使用される。

### 13人の神（力のみの存在）

新世界を構築した神々。『ロード』が世界を造り、旧世界から生き残つた女性『望』が子を宿し、『ファースト』が人々に『紅姫』に対抗できる抗体を与え、『ザクロ』が知恵を分け与えたと言われている。他の神は主に怪物達から『望』の護衛をしていた。

### 外なる神

旧13神に代わる、新たなる神の総称。

### エリニコス（3人の女神）

巨大な宗教団体。いつ発祥したかは不明。3人の女神、『メメント（生への侵犯）』、『リブラ（魂の葬送）』、『クノックス（閉じた

時間）』を信仰している。各帝国諸国と繋がりがあり、また各国から信者が集まっている。『永世中立国』『ノルニール』の教皇『アシエル』が統括している。表ざたは慈善事業にいそしみ、多くのボランティアが働いているが、様々な派閥が存在し、裏では売春、薬物、非合法な行為など問題も多い。

### 六枚の翼

エリニユスから派生した宗教団体。『女神は1人であり六枚の翼を持ち世界にはばたく』という主張をしている。

### 烙印の瞳

エリニユスから派生した宗教団体。『赤い瞳に烙印を持つ女神こそが世界に福音をもたらす』という主張をしている。

### 漆黒の服

エリニユスから派生した宗教団体。『闇よりも黒き服を着た女神が世界を食い尽くす』という主張をしている。

### ノルニール

帝国諸国によって認められた『永世中立国』。各国の金融機関を保有し、強力な軍隊を保有している。『戦争禁止区域』として指定されている。

### ロストナンバー（神が失った数字）

神が刻む数字。神が失った数字を持つ者。賢帝直属の軍隊であり、

大帝の帝国軍第四類と対抗するためにつくられた部隊。死帝と同じくマルスオフやエコーズ、武装犯罪者が戦闘の中心。ナンバー？（1）～M（1000）まであるが、教授達の過酷な試験により生き残っているのはわずか18人で、ナンバーもバラバラである。ややこしいのでナンバーを統一しようという命令が賢帝王から出されたが、体に刻み込まれたナンバーを変換する技術がまだ開発されておらず、そのままとなっている。主に賢帝に攻めてくるのは機械体のセンチネルが多いため、物質~~が~~還を得意としている。その能力は赤眼化と同等である。

## ギルド

各国の有力な商人が集まつて造られた組織。ハンターの仕事の斡旋もギルドが行っている。

ハンターの仕事だけではなく、様々な仕事を紹介してくれる。徹底的にネットワークを発展させていったので情報が集まりやすい。そのため帝国諸国との関係も深い。

ハンターの職能資格等級も作られており、ギルド独自の信頼性がある。1st～3st（上位クラス）、4st～6st（中堅クラス）、7st～10st（下位クラス）と区分されている。

## レテランス

帝国諸国の軍が出資して造られた組織。主に特殊軍隊の仕事斡旋を担当している。

登録料、手数料無料のため、ギルドでは受け入れられない仕事、登録料を払えない町村などが仕事を持つてくる。それゆえか、高度で難関な仕事が多い。唯一法令違反の仕事だけは受け付け拒否されている。門は広いためハンターにも仕事を斡旋してくれるが、手続きが複雑でめんどくさいため、その敷居の高さからあまり来ない。

ただ、報酬額はよく、ハンターの一部の上位者は積極的に利用している。

### 紅姫（赤い花びらのウイルス）

新世界に浮遊する殺人ウイルス。旧世界ではこのウイルスにより人類は絶滅した。新世界の人間には抗体があるため、もはや無害のウイルスとなっている。

### 紅姫現象（滅びの予兆）

赤い花びらが世界の空を覆うこと。この現象が起こるのは、世界が崩壊する前兆だと言われている。実際旧世界ではこの現象がおき、人類は絶滅した。

神々のその後

新世界になり、平穏が続く中、13人の神々の内部で、ある争いが起つた。唯一の女性である望を巡つて戦いが起きてしまつたのだ。ロコ、クラウン、ランゲ、コンステイン、インバルン、エンブネスはザク口に敗れ、そのザク口もファーストに敗れた。しかし、ファーストをザク口から庇つた望はその命を落としてしまう。それがきっかけとなり、均衡を保つていた神々の力のバランスが崩れ、それが勝手な行動をし始めた。

自らの遺伝子を残せない事に絶望したマルスとグリードは、世界をもう一度滅ぼそうと生物の品種改良に手を出し、マルスオフという最悪の怪物を造りだした。

レパートードとレトリックは望の細胞から新たなる母体を造り、新人類なるものをこの世界に誕生させようとしていた。

ファーストは再び望に会うべく世界の改変を企んだ。

しかし、これらの野望は新世界の人間によつて阻止され、唯一残つたロードは新たなる母とともにこの世界から消えてしまった。

そして新世界に神はいなくなつた。

『特殊な術を使う』

『13番目の息子』 レパートード

【魔法】幻影、幻術

【特徴】老人のような姿をしていたらしい。

『12番目の息子』ローリー

【魔法】物質を操る

【特徴】遊び好きで、戦略家だつたらしい。

『11番目の息子』クラウン

【魔法】模倣

【特徴】本当の姿は13人の中でも見た者はいない。

『四天と呼ばれる魔術』

『10番目の息子』ランゲ

【魔法】水

【特徴】背に水色の翼がはえていた。おしゃべりだつたらしい。

『9番目の息子』コンステイン

【魔法】監視

【特徴】背に灰色の翼がはえていた。無口。

『8番目の息子』グリード

【魔法】生命

【特徴】背に黒い翼がはえていた。マルスと組み世界を滅ぼそうとしたことがある。

『7番目の息子』インバルン

【魔法】炎

【特徴】背に赤い翼がはえていた。活動的だつたらしい。

『剣に魔力を宿らせる魔術』

『6番目の息子』エンプネス

【魔法】重力

【特徴】巨人だつたらしい。

『5番田の息子』マルス

【魔法】風

【特徴】マルスオフを生み出した張本人。

『4番田の息子』ザクロ

【魔法】無

【特徴】神々を殺害した張本人。

『3番田の息子』レトリック

【魔法】氷

【特徴】妖精の王のように美しかつたらしい。

『2番田の息子』ファースト

【魔法】?

【特徴】世界を再び改変しようとしていたらしい。金色の日をもち、13神の中では最強の強さと魔力を誇つた。

『神と呼ばれた者』

『1番田の息子』ロード

【魔法】?

【特徴】新世界を造つた造物神。

## メインキャラクターの紹介

『ハンター』：一般的な賞金稼ぎ。

『ソネット・マクベル』

【性別】女

【年齢】18歳

【職種】ハンター（7st・Cクラス）

【特徴】野性的な茶髪のウルフカットでグラマーな体型をしている。目が細いためか、実年齢より老けて見られる。細身の外見をしているが力は強く、ヴィーキング・ソードという大剣を背に背負う。赤い宝石のイヤリングを大切にしている。ある事件がきっかけとなり、ダンテの母親となる。

【性格】前向きで過去は振り返らない性格。息子であるダンテを溺愛している。

『ダンテ・マクベル』

【性別】男

【年齢】13歳

【職種】ハンター

【特徴】銀の髪と目が特徴的な少年。ロングソードを背に背負っている。その美しい姿から年齢を問わず、女性の目を惹きつける。

【性格】妙に大人っぽい態度をするが、本質は子供なので人懐っこく素直。

『帝国軍』…大帝国の精銳部隊

『キク・マーガレット』

【性別】女

【年齢】20歳

【赤眼化の印】テファ・大帝国紋章『オピオン』

【職種】帝国軍第四類所属（死帝ランク11位）

【特徴】美しいロングの金髪を持ち、目も碧眼。大帝国支給の剣と特注のプレートアーマーをしているが、鎧を着るのが嫌で上半身しかつけておらず、下半身は特注のショーツをはいでいる。基本下着はつけない派。背は同年齢の女性と比べて低く、典型的な幼児体型。

【性格】楽天的で子供っぽいく、悪戯好き。ただ戦闘になるなりアリストで正義感が強い所がある。暇さえあれば櫛で髪をといている。

『カンタロウ』

【性別】男

【年齢】21歳

【赤眼化の印】テト・大帝国紋章『オピオン』

【職種】帝国軍第四類（死帝ランク23位）

【特徴】細身の長身で、長髪の黒髪を後ろでまとめている。和風の着物を着ており、『雷切丸』という刀を持つ。口に何かを咥えるのが癖。茄子が絶対に食べられない。

【性格】慎重で気配り屋。「うわな」という口癖がある。相棒のキクに気苦労が絶えない。

『神の血脉』：13神の一人、ファーストの影響によつて生まれた者のこと。

『ノゾミ』

【性別】女

【年齢】12歳

【特徴】『神の血脉』である『赤い瞳』と『烙印』を持つ。体格は華奢で、黒髪をバレッタでとめハーフアップにしている。リネンで造られた鎧の下に、子供用のスカートの修道服を着ており、サイズが合つていないので気にしていない。名前を区切る癖がある。

【性格】年齢のわりには感情が少なく無表情。歌を歌うのが好きで、動物に懐かれる。孤独好き。

## プロローグ

『お前の望みを聞いてやるつ  
れるのだから』

### 『プロローグ・ある少女の処刑』

鐘が鳴っていた。

その鐘は結婚式やパレードとは違い、異様な重さを町に響かせていた。太陽は沈み、空は赤い色に染まっている。夕刻だというのに町通りは人が集まっていた。山に囲まれ、小さな町で人口は少ない。その8割が外に出て、直線上に並んでいるのだ。皆深刻そうな表情をしており、笑っている者は一人もいなかつた。

小さな子供は何が起こっているのか理解できず、ただ親の膝や手を離さない。多少大きい子供は理解しているのか親と子を守るように前へと出ている。町の大人達はこれから起ることを予想しているのか皆固い表情で通りの道を眺めていた。

黒い鳥が町の屋根へとやつてきた。夜行性の虫もそのいくつもある足を這わせ、家の壁へと張り付き動きを止めた。町の外で野犬の遠吠えが聞こえる。この静寂の中、小さな嗚咽でさえ皆の耳に行き渡つた。

町通りの遠方から、今日行われる『死刑』の対象が見えた。

重い牛や馬などの大型の動物の死体を乗せる荷台に『罪人』は乗せられていた。町をグルリと一周してきたのだ。まるで見物人達を楽しませる希少動物のような扱いだった。町の人々は『罪人』を睨むばかりで何もしない。声をかければ喉がつぶれる、触れば手が腐ると信じられているからだ。子供達もその『罪人』に怯えて何もできなかつた。

一頭の瘦せた馬に引かれたその荷台の右隣には、神父が聖書を持ち歩いていた。左隣には死刑人が布のマスクをつけ一緒に歩いている。2人は無表情のまま罪人と共に死刑台へと向かつていた。

罪人は両手を後ろで縛られていた。土台の荷台は堅く、バランスは悪い。服は汚れた布の服を着せられており、肌が露出するほど引き裂かれている。顔を俯けたまま罪人は荷台の上に座り、何も答えずただ死刑を執行されるのを待つっていた。

罪人はまだ若い女だつた。

茶色の前髪で目は隠され、腕からは男性のような筋肉の筋が走る。体格は小さいが、肩幅はしつかりとしており、一見すれば誰もが男と判断しちゃう。だが、服の布地から出る、胸の膨らみは誤魔化すことができない。まだ年端もいかない少女なのである。

この少女が何をしたのか町の大人達は皆知つていた。まだ理解の乏しい子供ですら何か悪い事をしたのだという感覚はあつた。罪人の少女が通りを進むたびに黒い鳥が血のついた口を大きく開き「ギヤー！ ギヤー！」と騒いだ。まるで罪人に罪の深さを教えるかのよつに。

夕方の火の光が、罪人の少女を照らした。

光を遮っていた町のシンボルである時計塔の影から抜け出たのだろう。少女は突然の光に驚き、現実をシャットアウトさせていた両

目をつい開いてしまつた。見たこともない真っ白い鳩が少女の目の前を通り過ぎた。舞うように落ちる白い羽の向こうで、少女はあるものに注目した。乾いた唇が微かに動いた。幼さ特有の大きな目が爛々と輝いていた。

少女が眺めていたもの　それは教会の天窓の外に設置されていた男の神の像だった。光の屈折により、その像は銀色に輝いていた。その神の像を見た少女の瞳から、一筋の涙がこぼれ落ちた。そして涙は止まることなく、少女の太ももを濡らし続けた。その姿に処刑人の男は気づいていたが、幼き命が終わることに同情したのだろう。何も言わず、処刑台がある方向に視線をなおした。

今まさに　処刑が始まろうとしている。

## 1・1 砂漠の町 カスバル（前書き）

### 《第一章での登場人物》

ソネット…女性でありながら子持ちのハンター。赤眼化できる事で有名。

ダンテ…ソネットを母に持つ少年。銀髪。

カンタロウ…帝軍所属。和風の着物を着ている黒髪の男。

キク…帝軍所属。金髪の髪をした背の低い女。

ノゾミ…塔に閉じ込められている少女。赤い両目に烙印が刻まれている。

ヤン…大将に雇われた傭兵。狐目の男

『運命が言いました お前の人生はすでに決定されていると』

## 『第一章：赤い瞳の少女』

### 砂漠の町、カスバル

オアシスを中心に栄えたこの町では、砂漠を渡る旅人や商人、昔から町に住んでいる古き人々で構成されている。不思議と砂漠のオアシスには『神脈』の影響が濃く、簡単な円形魔法陣でマルスオフ等の人を襲う魔物は防がれていた。バザールは常に開かれ、いわくつきの物やお値打ちの物までピンからキリまで売られている。

発展してからもう数十年はたっているためか、商人御用達の『ギルド』支部が建てられていた。ギルドとは交易商人から構成されており、各帝国幹部の天下り先としても有名である。大商人から普通の商人まで身分や地位があり、その発言権はわりと大きい。ギルドの名前から取つた『ギル』という通貨単位が帝国標準となるのは時間の問題であった。

他にも砂漠のマルスオフからの護衛を引き受ける傭兵団や砂漠の船であるスナ鳥の貸し出し、乾燥物の食料品や生命の水の売り出しなど活気あふれる商品のやりとりが行われていた。金のない旅人は露天商からの調達と値下げ戦線に奮闘し、金のある旅人はすぐにギルドへと向かい良質な商品を手に入れるという流れも昔から変わつ

ていなかつた。

ギルドの建物は石と泥と木でできあがつており、階数は3階である。ギルドの紋章が3階部分の屋根近くにつけられ、強度の関係上2階しかない町ではよく目立ち、旅人の方角を示す道しるべにもなつていた。1階は品物の売買を担当している。2階は主に相談や依頼を受け付ける場として利用されていた。

2階の扉が開き、細かな黄色い砂が建物の中へと進入した。男の手によつてすぐに扉は閉められたが、砂は玄関内の溝にしつかりと埋まつてしまつた。

傘のような大きな帽子をつけた男は、まっすぐ受付へと向かう。通い慣れているのか迷いがない。男は受付の前に立つと、砂漠のドレスを着た受付の女に話しかけた。

「 よう。 依頼があるんだが」

印象としては、きさくな感じの男である。年齢は30代後半。中肉中背の体格だ。商売人特有の精力的な顔つきをしている。

受付の看板には『依頼受付』と書かれてある。受付の女はまだ若く仕事に勤務して3年目ぐらいといった所だろうか。仕事に慣れた自然な笑顔で男を迎えた。

「 はい。 どのようなご用件でしょうか？」

「 人の護衛を頼みたい。ハンターを紹介してくれ」

よくある依頼だ。砂漠には砂蟻や巨大サソリや蟻地獄など、人を襲うマルスオフが存在している。地理のわからない旅人であれば、砂漠の案内人としても利用できる。そういう仕事をするのが通称『 なんでも屋』ハンターである。賞金稼ぎとも呼ばれている。

「 砂蟻からですか？ それならオススメのハンターを……」

「いや違うんだ。性別は女。男は絶対駄目だ。クラスは357ぐら  
いがいい。あと『赤眼化』できることが必須だ」

『357』とはギルドが認定するハンターの肩書きである。1~1  
057まで細かく職能資格等級がある。357とは『Aクラス』の  
ハンターのことだ。このクラスであれば、かなりの魔物を倒す実力  
があると証明されている。事実、『赤眼化』という高位魔術を発動  
できる条件をそなえている者が多い。

細かい条件に、受付の女は少し顔をしかめた。

「……少々お待ちください」

女は席を立つと後ろの上司に相談しに行つた。そしてすぐに帰つ  
てきた。

「申し訳ありませんが、手持ちのハンターにお客様の条件に当ては  
まる者はおりません。追加料金をいただきますが、呼び出しどう  
形になります」

「いつまで待てばいい」

「1ヶ月ぐらいですね」

「そっ、それじゃあ駄目だ。せめて3日!」

よっぽど慌てているのか男は前のめりになり、指を三本、女に突  
き出した。

「……3日は難しいですね」

「金はいくらでも払う!だから3日で人をよこしてくれ

「それならレーテランスに行かれては……」

各帝国が出資する『レーテランス』に行けば確かに条件に当てはま

る可能性は高い。レテランスとは、ギルドと同じく国が人材斡旋を行っている機関だ。収入源は税金なので無料で村単位の依頼を引き受けてくれるかわりに、個人の依頼ではギルド以上にお金を要求される。しかも近くにレテランスはない。男は首を大きく横に振った。

「それは駄目だ。あんな手続きの面倒なとこ、さらに時間がかかる  
「……少々お待ちください」

再び受付の女は後ろの上司に相談しに行つた。それからしばらくして、今度は女ではなく、女の上司が男の所にやってきた。暑そうに手には手拭いを持つていて。その太い体では無理もない。

「すみませんがお客様。人数は何人で？」

「2、3人でいい。いや……1人だ。もう1人でもいい」

「性別は女。『赤眼化』可能な人材であればちょうど1人いますね。まだ1階で待機しているはずです」

「1人か」と男は呟いた。

「クラスは？」

ギルドの登録カードを凝視し、ハンターの能力をチェックする。  
「うーん」と眉の間を曇らせた。

「7s7tです。ランクは『Cクラス』ですね」

7s7tはギルドの仕事はそれなりにこなしているが、昇格試験に落ちているハンターのことだ。7s9s7tのハンターを『Cクラス』と呼ぶ。実力、信頼性に欠けるが安く雇えるメリットがある。だが、当たり外れが大きいのも事実。この場合は慎重な面談と口頭による

実績で選ぶしかない。

「じクラスのハンターか……。有名なのか？ そのハンターは？」  
「ある意味有名です」

『有名』という単語に男はすぐに反応した。もしかすると顕在化されないハンターなのかもしれない。これは掘り出しものである。

「ほう。それはいい。すぐ呼んでくれ。面会したい」  
「はいただいま。ちなみにお密様のお名前は？」  
「ハイドロだ。ハイドロ・スンズ」  
「ああ、常連の。いつもありがとうございます」

名前を聞いてようやく男が人材派遣を商売にしているお密だとわかつた。

客席に案内され、ハイドロは木の椅子に座り待つことにした。椅子には安物の布が敷かれてある。ハイドロはゆっくりと腰をかけ、紹介されるハンターにどう交渉しようか腕を組んだ。

「お待たせしました。こちらソネット・マクベルさんです」

受付の女の上司である職員が直接ハンターを連れてきた。暇なもんだとハイドロは思ったが、ハンターの方にすぐ目がいき、息を飲んだ。

女のハンターで、まだ若い。真っ直ぐな鼻筋に、毎のよつな赤く引き締まった唇。眉はキリッとしていて整つており美しい。髪は茶髪でえり足とトップにあまり差のないウルフカット。目は細く大人びていて、緊張しているのか大きく可愛らしげに瞬きする。耳のイヤリングの宝石の光なのか頬は赤みを帯びている。

体は細身でもやはりハンターであり、二の腕の筋肉は筋が走り、

肩幅は広い。足腰も強いのか、背中に背負っている大剣の重さをものともしていない。しかし、レザーアーマーからチラつく胸の谷間はハイドロの視線を釘付けにする。その谷の深さは、かなりふくよかであることを妄想させた。

「よろしくお願ひします！」

元気よくハイドロに挨拶し、頭を深々と下げた。若々しく張りのある声だ。ハンターの割には人を威圧する重量感もない。謙虚で愛らしさが増す。なぜ食堂の従業員でないのか不思議なぐらいだ。

（おお……ハンターにしてはいい女じや……つん！？）

ソネットの隣で何かが動いた。異常に目立つ銀髪と銀色の瞳をもつた男の子だ。年齢は13歳になつたばかりで、成長途中のあどけない容姿をしている。体のサイズに合つたレザーアーマーを着、その顔形はソネットと同じことなく似ている。背中には長い剣を背負っている。男の子はハイドロの視線に気がつくと、頭を下げた。

「あの……あなたの隣にいる那个子は……」

ハイドロは男の子を指さした。

「血魔の息子です！」

間髪いれずソネットは答えた。

（なつ、なんだと！？）

予想外だった。子供を連れているハンターなど聞いたことがなか

つたからだ。

「『おじさん』。ダンテ・マクベルです。よろしくお願ひします」

ダンテはきちんと挨拶した。

「だから言いましたでしょ？『ソネット親子』とここましてね。子連れハンターといふことで有りです」

職員は脂つゝ汗を何度も布で拭いた。

「子連れ……あの、失礼ですが年はおいくつですか？」

子供を持つにはソネットはあまりにも若すぎる。肌、艶、田元…  
…30間近の女とはどうしても思えない。まだ20代前半なら納得  
できる。

「年齢は18歳です！」

「くつ…?」「えつ?」とハイドロと職員が目を丸くした。もう一度職員がギルドの登録カードを確認する。登録カードには何度も合わせても、『28歳』としか書かれていない。ダンテの年齢は『13歳』と記載されている。つまり、もしソネットの年齢が『18歳』であれば5歳しか違わないことになる。これでは『親子』ではなく『姉弟』である。

ソネットは2人の反応にキョトンとした。なぜなら『18歳』といつのがソネットの実年齢だからだ。登録カードには虚偽記載しているのである。

「えつ？ えつ？」

(母ちゃん…… 28だよ)

「あつ……おほほほ。28歳でしたわ。10歳もサバ読んじゃつた。  
『めん遊ばせ』

下手な誤魔化し方だったが、2人は何故か安堵した。まさか5歳  
しか違わない親子がこの世に存在することは思えない。色々な事が起  
こる世界だが、常識はまだ根付いているのだ。それに、ギルドの肩  
書きを持つて『いる』ということは、簡易DNAによる親子鑑定をされ  
ているはずである。でなければ身分の曖昧な世界で、資格を持つこ  
となど不可能だ。

「炊事洗濯なんでもやります！ どうかよろしくお願ひします！」

ソネットはまた深々と頭を下げた。

砂漠　　雨が降らず、昼間と夜の気温が極端で、それは最も過酷な場所の1つである。雲がないため地表は焦げつき、降水量は0に等しい。長年のあいだに岩が風化し、小さな粒となつた砂は旅人の足を奪う。それだけならまだしも、毒をもつサソリや蛇、突然変異した人をも飲み込む蟻地獄に巨大化した砂蟻などマルスオフも砂影に隠れ、獲物を狙つていた。

乾いた砂がカラカラと風に転がり、動物の乾燥した骨が砂の中に埋まつてゐる。動いているサソリを口に咥えると巣へと持ち帰る小動物の姿も見える。空ではハヤブサが死を迎える獲物がいないか探していた。　そんな名もない砂漠は今とてつもない緊張感にさらされていた。

広大な砂漠の真ん中に塔が3本建つてゐる。

旧世界からあるその塔は屋上が尖つておらず平面四角になつており、階数は30階、高さは約100メートルである。しかし、10階は砂に埋まつてしまい、掘り出すことは不可能だった。今でも割れたガラスから砂が入り、遺物とされた塔内の物を埋めていっている。本来は砂漠に住む動物の住処だつたのだが、半年前から人間の手によつておいだされていた。

塔の周りには頭にかぶる布に、茶色いマントという砂漠のドレスを着た人間達が囮つてゐた。手には銃や剣を持ち、指定の持ち場で見張りを続けている。砂よけと紫外線対策を兼ねたゴーグルが太陽の反射で光る。

「……さすがエリーヌスの直属の部隊。隙がないわな」

男が塔から数キロ離れた岩山の上から呴いた。頭からかぶつた茶色い布は、カメレオンのような保護色の役割をしている。手には軍

からの支給品である双眼鏡を持っていた。傍にある多肉植物も男を隠す役割をしていた。

見張りが動いた。交代なのだろう、やつてきた1人が見張りの定位置に立つた。

「なるほど、この時間に交代ね」

素早く頭の中に時間をインプットする。

「食事の時間だぞ、カンタロウ君」

「わかった。キク」

カンタロウと名前を呼ばれ、男は見つからないよう体を後退させた。ズリズリと布が音を鳴らす。無事塔の兵達に見つからず、仲間の元へと戻れた。

そこではカンタロウの仲間である女が乾燥肉をくわえていた。手元には貴重な水袋もある。布を外すとカンタロウは砂をはらつた。カンタロウの格好は特殊纖維で編まれたボトルネットの黒いシャツと黒の革ズボン、その上にやわらかな印象の柳紋りの着物を身につけている。黒艶のある長髪を後ろでまとめ、前髪を少し分け額を出していた。澄んだ黒い瞳にピクリとも動かない眉はとても物静かである。腰の刀を定位置に戻し、ポキポキと首の骨を鳴らした。指先を切り取ったカツタウト・グラブが刀の鞘巻きに触れる。年齢は21歳、帝国軍第四類に所属し、キクと組んでまだ1年目の若手だ。

「あー。肩こる。まつ、仕事だからしゃーないわな  
「い」苦労。動きはどうだ?」

唯一の仲間、キク・マーガレットは笑顔でカンタロウを迎え入れた。宝石のように輝く金色の髪、水晶のように透き通った碧眼、小

さく笑うコソヒトのような赤い唇、どれをとってもモデル並の女性である。年齢は20歳とカンタロウより1つ年下。まだ現役の大帝大學生だ。どうして帝国軍第四類に所属しているのか不可解で仕方がない。その姿は男性だけではなく、女性までも虜にし、帝国の皇子に愛の告白をされたという実績まである。

女性にあまり興味を示さないカンタロウでさえ、キクの魅力に捕らわれることがある。キクは人懐っこく、よくカンタロウの体に自然と触れてくる。それが単なる「ミコニケーション」であり、愛を印象づけようとする行動でないことをカンタロウはよく知っている。なるほど魔性の女とはこのことかと、カンタロウはいつも思う。

帝国軍支給の鎧は胸、胴、肘、膝など簡易な急所のみつけられ、下半身はショーツである。そのほうが身軽で動きやすいらしい。動きに重点をおいたブーツをはき、剣身の根元が広い特注の剣を腰につける。

キクの緩んだ表情から白い歯がこぼれた。

「相変わらずだ。あまりスキがないわな。それにしてもアイツ等あんな塔で何やつてんだ？」

カンタロウはキクの前に座り、渡された乾燥肉を頬張った。筋が固く、噛み切りにくいものの塩がしつかりきいていて味がある。

「しかしいい加減この肉にも飽きるわな。飯が食べたい」「飯がないならパンを食え」

「はいはい。それよりも情報は間違いないのか？」

キクは両手を広げた。

「間違いないっしょ？ だつてあのミンデル君が言つてんだよ？」「ミンデル君つて言つた。せめてミンデル皇子をつけたほうがいい

ぞ。ウチの国の皇子様なんだから」「

ミンデル皇子とは、大帝国第5皇子であり、年は近いが立場は2人より上になる。別名『女たらしの鬼畜皇子』でその名の通り、無類の女好き。容姿も悪くないので自らの意思で皇子の元へ向かう女達の中、キクはまったく興味がないのか動きもしなかつた。その反動からなのか、ミンデル皇子自らキクに惚れ込んでおり、相方であるカンタロウに嫉妬するという奇妙な三角関係ができあがっていた。

「いいじゃんいいじゃん。そんな細かい事」「

ケラケラと手を振つてかわされた。

「……まつ、そうだな」

カンタロウもキクに同調した。それぐらい2人の中でミンデル皇子の存在は軽かつた。

「しかし、もし情報が正しいとしたらあの『S級犯罪者』がここに来るつてことだろ?」

「そんなことよりカンタロウ君。いつも思うんだけど侍なら語尾に『～でござる』ってつけたほうがいいと思つぞ」

「どうでもいいわな。それ」

即カンタロウはキクに突つ込んだ。

「まあいいけどさ。その『S級犯罪者』が来る理由でしょ?」「

「犯罪等級最高の犯罪者が何のためにこんな砂漠の塔に来るんだ?」

乾燥肉をカンタロウはたいらげる。

「さあね。それを探るのも私達、帝国軍の役目じゃないかな？　捕まえてもし『十の獣』の人だったら　大帝国の裏切り者の居場所を吐かせればいいし、その場にソイツがいればボコって連れて帰るしね」

キクは「うー」と肉を噛み切らうと歯を食いしばる。

「あの塔に何があるんだろうな」

「亡靈でも住んでんじゃない？」とキクの言葉に耳を傾けながら、カンタロウは塔の屋上を見上げていた。

砂漠を3羽のスナ鳥が歩いていた。スナ鳥はこの砂漠に生息している生き物で、旅人用の乗り物として主に利用されている。人に飼われているスナ鳥は餌を与えれば誰にでも懐く性質があるので飼いやすい。

スナ鳥の目は小さく、クチバシが大きく、2本足と3本の指で地上を歩き、もちろん手はない。羽は退化しているが、羽ばたけば5メートルは空を飛ぶことができる。欠点は鳥臭さがどんな調理方法をためしてみても抜けないので、食料用としては使えないということだ。

スナ鳥達の背中に3人の男女が乗っていた。ソネットと息子のダンテ、あとはギルドに人材を探しに来た男ハイドロである。結局ソネットを雇つたようだ。

「暑すぎるわ！」

ゴーグルを外し、ソネットは汗をふり絞った。体の日除け専用の布を手でつかみ、バサバサと動かす。そのたびにレザーアーマーから胸元が見え、ハイドロの視線を誘つた。

「もうだね。まあもうすぐ涼しくから我慢しようよ」

ダンテはソネットより大人びた口調だ。銀髪がこの灼熱の太陽でさらに輝きを増す。銀色の目が母を諭すように細くなる。動物の扱いに慣れた手綱さばきは、旅の長さを物語る。

（変わった子供だ……）

ソネットには邪な意味で惹かれるが、この銀髪の少年にもハイドロは興味を抱いていた。銀髪はあまり見かけない。この世界は、妖精や獣人など多種多民族が存在するので注目するほどでもないが、珍しさが際立つていて。顔も町の子供よりも相当マシだ。悪い虫がハイドロの腹をチクチク刺す。

「ちょっと 何見てるのよ？」

ギクリと飛び上がった。ハンターの女は大概気性が荒い。形の良い胸をガン見していたのがバレたかとハイドロは思った。目を細め、ソネットはハイドロを睨みつけていた。

「ちっ、違う！ 別に君の胸を見ていたわけではない！ これは男の本能というか、無意識で見てしまったというか……」

慌てて弁解する。

「何言つてゐるの？ 私の息子を見てたでしょー。」  
「へつ？ まつ、まあ。銀髪は珍しいからな……」

「やつぱりあなたも息子を狙つてゐるのね！」とソネットがスナ鳥を操つてハイドロにものすごい剣幕で迫つてきた。驚いたハイドロのスナ鳥は「クエーー！」と飛び上ると、反対方向に逃げ出した。「ちょ、ちょつと待て！」とハイドロは手綱を操つたが、恐怖という自然の本能が人間の操作を無視した。

ソネットは息子のダンテに對して常軌を逸した愛情を抱いているのだ。ダンテの容姿は他の子供と比べると格段に上位に位置する。その副作用として男娼を専門とする悪い大人に今でも狙われ続けている。その素直な性格からかダンテ自身も騙されやすい。それゆえにソネットはダンテの事に關しては過敏状態なのである。

「母さん……」

ダンテは呆然と反対方向へダッシュしていく2人を眺めていた。

塔の内部は暑さでサウナ状態だつた。団扇であおぐ風はぬるく、温度は30度を軽く超えている。そんな中、立派な黒髪をはやし、夏用の軍服を着たグラム大将が、文句一つ言わず、ブスリとクッシヨンの椅子に座つていた。塔内を徘徊している兵士を統一する役目をもつており、エリニユスの派閥の1つ『烙印の瞳』に所属している人物である。

グラムの体格は軍人らしくガツチリしている。男性ホルモンが濃

く髪の毛は全滅し、頭皮は太陽に焼けて黒光りしていた。頭部で残っているのは立派な黒髭ぐらいだ。50歳を超えていたためシワが深い。イライラして眉間にシワを寄せるとさらに深くなる。

部屋の中は殺伐としていた。白く固い床や壁は通気性が異常に悪い材質でできている。割れた窓ガラスからは、熱風が入ってきてしまつ。部下がグラムに遠慮して最低限の家具はあるが、とうてい心地いいものではない。だが、外で働く部下に愚痴ることもできない。唯一グラムが愚痴れる相手といえば、眼球がないのではないかと思うぐらい目の細い、狐目の中年、ヤングぐらいだ。

ヤンはグラムの部下の服装とは全く違う武装工作服を着こなし、皮手袋に防弾チョッキを身につけている。グラムに雇われた若い傭兵である。ヘッドバンドで髪を逆立て、先は針のよつにどがつている。釣り上がった口元は笑うと頬にまで切り込んできた。

「 よつやくじともお別れだな」

「まつたくですね」とグラムの傍にいるヤンが同調した。ヤンは汗1つかいでいない。涼しげな顔で椅子に座っている。立場的にはグラムの方が上である。しかし、この男は魔法、剣ともにかなりの実力者であるためここにいるのだ。

「うん?」

グラムの耳にまたあの歌声が聞こえてきた。透き通つた美しい歌だ。下手なオペラ歌手よりよっぽどいまい。この砂漠に来て唯一の慰めといえばこの歌だろう。

「女神よ。我等に救いを『えたまえ』

手を合わせると机の前で祈った。「いやほんといい歌声だ」と

ヤンは言った。

「ねえ大将」

「なんだ」

祈つているグラムは眉一つ動かさない。

「たまには外に出してやつたらどうです？」

「それはできない相談だ。アレはか弱く見えても危険である。胸の痛むことだが外に出すわけにはいかん」

はつきり言い切つた。

「ストレスで自害しちゃうんじゃないの？ 保護してからもう半年近くはたちますよ」

「仕方あるまい。アレの住む村を襲つたのがあの『十の獣』……『S級犯罪者』で構成された危険な組織なのだ。奴等を振り切るにはここに逃げるしかなかつた」

合わせていた手を離した。歌声が止んだからだ。

「だがそれもここまで。奴等に居場所がバレたといつ情報がきた」「半年もここにいるからですよ」

「ちがうつー。上の判断が遅いのだ！」

「バンッ！」と机を両手で叩く。貯めていた怒りが一気に噴き出した。

「『世界の改变』といつ巨大な力を得ながら、使い方に迷いが生じたのだ！」

「まつ、まあまあ」とヤンはグラムを抑えた。「ふう……ふう……」と暑さの中、グラムの顔は真っ赤になり、今にも熱中症で倒れそうだった。

トントン

ドアがノックされた。

「入れ」

「失礼します」

武装した兵がグラム大将に敬礼した。

「ハンター、ソネット親子が到着しました！」

「来たか。すぐ行く」

ふらつきながらもグラムはなんとか立ち上がった。

「ソネット親子？ 聞いたことない二ヤー。大丈夫なのか二ヤー」

ヤンのおふざけに、武装兵は顔をしかめたが、グラムは平然としていた。慣れていようだ。

「ソネット親子は『赤眼化』できるらしいからな。能力に不足はない」

その情報源はハイドロからだ。条件に一致するハンターがもういないということで、かなり妥協してその人物を選んだ。これでギルドの認定資格が上位であれば『女神』の世話をさせることに抵抗がない。惜しいものだとグラムは思った。

「へ～。でもなんで『親子』？子供がいるのかニヤ？」

「いるようだ。だが問題はない。『瞳』を見せないよう女神にアイマスクを装着させる。もし見られた場合は……仕方がない、ハンターを殺す」

グラムは準備のため部屋から出て行つた。契約書、ハンコ、予算の準備と中間管理職がいないため大将自ら動かなければならなかつた。

「お腹黒いこつたニヤー」

ヤンの笑い方は、本物の狐のようだつた。

塔の奥の部屋では武装兵が2人、部屋の前に立つていた。部屋の中はベッドと机と椅子、そして一輪の赤い花がさされてある花瓶がある。その部屋には少女がいた。黒髪で華奢な体格をしており、白く細い手を2つに合わせ、静かにベッドの上に座つてている。年齢は12歳。その年相応とは思えないぐらいの落ち着きようだ。少女は母から教わつた歌を歌つっていた。少女にはそれしかできなかつた。それ以外やることがなかつたのだ。

トン

塔の窓に何かが止まつた。少女は歌をやめた。視線を向けるとハヤブサが窓辺にとまつていた。

「……お前も1人ぼっちですか？」

少女は立ち上ると鳥に手を伸ばそうとした。だが、背が小さいため窓辺に手が届かない。近くを探すと椅子がある。

少女は椅子に近づくと、持ち上げようと力を込める。大人であれば簡単に持ち上げられる重さだが少女には力が不足していた。体をふらつかせながら椅子を窓辺に置く。

少女は椅子に乗ると再びハヤブサに手を伸ばした。ハヤブサは警戒しながら少女に近づいてきた。

「おいで、怖くないですよ」

少女は優しく微笑んだ。

ハヤブサは少女の『赤い眼』を自分の黒い瞳にうつした。その『赤い眼』には奇妙な烙印が刻まれていた。右目、左目ともに烙印が違っている。

「クアア……」

ハヤブサは一声鳴くと飛び去つていった。

少女はハヤブサが遠くなるまで窓の外を眺めていた。ハヤブサが見えなくなると、窓辺を離れ、ベッドへと戻った。

「そう アレが来るのでですね」

少女はまた歌を歌い始めた。

砂漠が震えた。

人よりも大きい大型の砂蟻が軍隊をつくり、目的の場所へと移動している。

「……かえ……りたい……かえり……たい……」

砂蟻を指揮している者が何度も呟く。

その者の目は畠田とも血のような『赤い眼』をしていた。

### 1・3 神の血脉

「これが……旧世界の塔」

ソネットはその莊厳で巨大な3本の塔に言葉を飲み込んだ。材料は石や煉瓦が使われている。色は風化しているのか焦げた茶色。屋根は尖つておらず、平面四角になつていて。2つの塔を繋ぐ橋には聖人を意味しているのだろうか、ブロンズ製の男の像が座り、地上を見下ろす。

それぞれ中間の屋根の土台に彫刻された像が置いてある。右の塔にはラッパを吹き鳴らす天使達、左の塔には手を広げ喜びを表現する群衆。

真ん中の塔には尼僧のブロンズ像が手を合わせていた。頭部から顎下までを覆うウインブルを見れば誰でもその像が聖職者であることがわかる。頭部のバンド布の下から覗く表情は慈愛に満ち穂やかだ。ただ、両目から涙のような黒いシミが顎にまで達している。それはまるで黒い涙を流しているようだった。

「すういわね……」

塔に施されている緻密な彫刻や可憐な美の表現は設計者のこだわりなのだろう。茫然自失。まさしく魂を奪われた状態になる。

「ふうん……」

ダンテには少し早すぎるのか、いまいち感情が湧いてこないようだ。

「エリニユスの軍隊さんがここを拠点にするのもわかるだろ?」

「そうね。信者でなくても住みたくなるわ」

「これが旧世界の遺跡さ」

ハイドロはあたかも自分が造ったかのように塔を紹介した。

「ねえ。旧世界の人達はこんな塔を造る技術があつたのにどうして滅んだの？」

ダンテは素朴な疑問をハイドロにぶつけた。

「 はるか昔、赤い花びらが世界を覆うという『紅姫現象』が起つたらしい。ほら、お前も聞いたことがあるだろ？ 紅姫現象は世界の崩壊の兆候だと」

「うん。ある」

「それによつて人間は悪魔へと変えられ、旧世界の人類は絶滅した。そんな中生き残つたのが『息子』と呼ばれた13人の男と『母胎』である女1人。『1～13番目の息子』と名付けられていた男達は母胎を護り、俺達新世界の人類を誕生させた……」

「『1番目の息子』ロードが新世界を創り、『2番目の息子』ファストが紅姫の抗体を創り、『4番目の息子』ザクロが知恵と精神と魂を創り、そして 母胎が私達の肉体を創つた」

「ほれるように口から言葉ができるソネット。『そう、その通り』とハイドロは頷いた。

「さて、塔の中へと案内しよう」

スナ鳥を縄に繋ぎ、さっそくソネットとダンテはハイドロの導きによつて塔の入口へと向かつた。入口には武装した兵が2人立つてゐた。腰には剣が装備されている。

「いつもお世話になつております。人材紹介のハイドロでございます」

急に態度がへりくだる。頭をペコペコ下げ、手の平をこすりつけた。

「ハンターを連れてきたのか？」

ハイドロを知つてゐる兵が口を開いた。

「ええ、無線で連絡した通りでござります」

「ほつ……ふむ」

顎に手を乗せ、舐め回すようにソネットの肢体に視線を這わせる。そしてハイドロと同じく、やはり胸に目がいた。男では有り得ない膨らみに納得がいったようだ。

「間違ひなく女のようなだな。だが、体格が細いな。本当にハンターか？ 姫婦ではあるまいな？」

兵にそそくさと近づくと、ハイドロはギルドの登録カードを出した。

「間違ひありませんよ。ギルドにはこのよつこきちゃんと登録されています。人材紹介をしてはや10年。このハイドロの目に狂

いはありません」

大型な顧客であるため、きつちりと証明書を貰つてきていったようだ。証明書にはギルドのマークが赤で朱印されている。まず間違いないだろ?。兵士は「うむ」と頷くと、体を避けて3人を塔へと誘う。

「入れ」

「失礼します」とハイドロとソネット、ダンテは塔の窓から中へと入つた。入口は砂漠の下に埋まつてしまいなくなつていた。元の窓は狭かつたのか、壁は壊され大人2人分ぐらいは通れるよう改築されていた。

「女」「  
はい?」

唐突に兵に声をかけられ、ソネットは振り向いた。

「余計な詮索は無論だが、ここは『ハイエナ』が多い。揉め事だけは起こすなよ」

ニヤニヤと笑つてゐる。「どういう意味よ?」とソネットは少し嫌な印象を受けた。

「おう?」「  
へえ……」「  
これはこれは……」

塔の廊下ですれちがう兵が代わる代わるソネットに注目する。久

しぶりの女にソネットを見るなり個室に走る兵もいた。「ヒューヒュー。俺達と遊ばないか?」とからかう兵達もいたが、ソネットは毅然とした態度で無視した。

男達の反応に慣れているのかソネットとダンテは平然としている。しかし、ハイドロは気持ちが焦っていた。意外なライバルの多さにである。例えエリニコスの信者といえど、禁欲ではないようだ。やはりまず子供と仲良くなるべきだなどハイドロは作戦を立てた。そうなればチャンスがあるかもしれない。身内に信頼されている人間に、人は好意を抱きやすいものなのだ。

しばらく廊下を歩くと詰め所が見えてきた。2人の武装兵が扉の前に立っている。ハイドロは話をつけるために兵達に近づいた。

「さつ……てと、それじゃ、母さんはいつてくるから。1人で待つてるのよ」

ソネットは両腕を伸ばした。

「うん、わかった」

ダンテは素直に頷いた。その笑顔にソネットはつい抱きしめたくなる衝動を抑えるのに必死だつた。

「さあ、稼ぐわよ。とつとと契約をすましてしまいましょ」

ソネットは肩を回すと詰め所に向かつた。

1人残されたダンテは窓から広大な砂漠を見回していた。何もない砂漠だ。活力ある若さには退屈な光景だろう。

「やあダンテ君」

兵との交渉が終わったハイドロがダンテに話しかけた。

「何？」

笑顔で接する。愛想のいい男の子だと、ハイドロは思った。

「今暇か？ それならおじさんと遊ぶか？」

下心あつありである。

「いいけど 母さん狙いならやめたほうがいいよ」

「げつー！」とハイドロは喉を詰まらせる。見事にまでバレているのだ。ダンテは的が的中し、ニンマリと笑った。

「けつこうにいるんだ。母さんと仲良くしたいから僕に近づく人。でもいつも失敗して母さんにボコボコにされる。僕はそれを止めるんだけど、前なんか骨が折れるまでやっちゃったもんだからお医者さん呼んでくるの大変だつたよ」

ダンテは「ふう……」とため息をつく。ハイドロは青ざめた。

「それでも母さんとつきあいたいっていうんだつたら協力するよ。どうする？」

「……腹が痛くなつた。悪いが1人にさせてくれ……」

ハイドロは自然に奥へとフイ ルドアカウトしていった。

「……やつぱり駄目だつたな。母さんとつきあえる人ってどんな人なんだろう？」

ソネットのことを思つて、過去ダンテは色々な男とつきあわせてみた。しかしどれも失敗に終わつていた。

（「ダンテを誘拐しようだなんていい度胸じゃないの！」とか「私のダンテに近づくなんてこのケダモノ！」とか「ダンテは私のものなのよ！ 殺す！」とか……。つましいかないな。母さんの好みの男性つて誰なんだろう？）

決してふざけているわけではなく、本氣でダンテは母のことを心配していた。昔、親子という言葉の意味を知った。親子には父と母と子がいるという意味もあるとわかつた。それなら何故自分達に『父』がいなかつた。ソネットにその事を聞いてみても曖昧に笑うだけで教えてくれなかつた。きっと『父』がいれば母さんも喜ぶと単純に思つていた。

「ふあ～あ……」

まだソネットは出てこない。ダンテは大あくびした。

「ねえ

「なんだ？」

ダンテは扉を守る兵士に声をかけた。

「……そこを左に曲がって真っ直ぐ行け。廊下の突き当たりに青がマークされている。そこがトイレだ。糞尿を狙つて虫が湧いているが、尻を傷つけることはない」

兵士は仏教面で答えた。ダンテは「ありがと」などと話すと、兵士に言わされたとおりの道を歩いて行つた。途中、目が異常に細い男とすれ違つた。「うん？」と狐目の男はダンテを見て立ち止まつたが、声をかけることはなかつた。

「あれ？」

詰め所が見当たらない。

「まずい……迷つた

三口三口していると何か人の声が聞こえてきた

「？」

どこからか纖細な歌声が流れてくる。

……綺麗な歌だな」

ダンテは思わず聞き惚れた。

(……あよつとぐらいならいいか。せつと母さんは契約金でかなり  
ごねてるはずだから時間がかかるし。今頃もつあよつと上げるとか  
言つてゐるんだらうなあ )

母の性格はすでに把握されている。

「よし、行つてみよつ」

子供ながらの好奇心を持つて、ダンテは退屈な待合室よりも歌を選んだ。

歌は塔の最上階から流れている。石でできた幅の狭い螺旋階段を慎重に上がつていき、30と番号がかかれた階に着いた。廊下を曲がると、ダンテは小さく声を上げ、慌てて壁際に隠れた。

そこにも兵士が2人ほど立っていたからだ。しかも1階と違つて重装備だ。肩にはサブマシンガンがかけられ、腰にはロングソードが装備してある。右手の甲にはエリニユスのシンボルマークである『3人の女神』の入れ墨があつた。

2人とも顔中傷だらけである。歴戦の戦士なのだろう、表情1つ変わらない。なんだか重々しい雰囲気だ。

ダンテは近づくのを躊躇した。行つた所で容赦なく止められるだつ。

「どうしよう……」

途方にくれ、壁に背をつき考えてみる。ふと、上つてきた階段の方を向くと、ガラスのない窓があつた。窓の外に頭を出すと壁に小さな出つ張りがある。大人では渡れそうにないが、子供の小さな足なら大丈夫そうだ。それは兵士達が守つている部屋の窓にまで続いていた。

ダンテはニヤリと笑つた。

奥の部屋で少女は歌を歌つていた。

この歌は自分を育ててくれた母が歌つていたものだ。その歌を少女は胎児の頃から聴いていた。

歌を歌つていると不安が紛れた。自分を押しつぶそうとする何かにいつも怯えていた。孤独の中、声が枯れるまで歌い続けた。

ガタツ

何かが動いた。少女は歌を止め、顔を上げた。

「お前、また来たのですか？」

少女はベッドから立ち上がると窓辺を見上げた。またハヤブサが

来たのかと思ったからだ。

ガタツガタツ……

窓辺のガラスのない枠が外された。ハヤブサがそんなことをするだろうか。少女は首を傾げた。

「よしつと。これで中に入れる」

声がした。知らない声だ。さつきのハヤブサが人の言語などしゃべるはずがない。

「よいつ……しょつと……」

頭が見えた。銀髪の髪だ。狭い窓を通り抜けようと、少年が無理矢理体をねじ込んでいる。

「よつ……と」

つまく抜け出ると、部屋の床に着地した。

「…………」

少女は怯えることなくその様子を傍観していた。少女にとつて久しぶりに見る男の子だ。自分をここまで連れてきた人間は背の高い大人しかいなかつた。

「あつ、じんにちは」

少年は人懐っこい笑顔で挨拶してきた。外には見張りの兵がいるので声は低めだ。

「　はい」

少女は反射的に答えた。一瞬兵を呼ばうかとも考えたが、しばらく様子を見ることにした。

「僕の名前はダンテ。君は？」

「名前？」

「うん」

少女は躊躇つたが、少年の悪意のない表情に少しだけ警戒心をといた。

「　ノゾミ」

「ノゾミ？ 珍しい名前だね」

ノゾミはエリーコスの子供用修道服の上に、リネン・キュラッサという軽量型の白い鎧を着せられている。制服のサイズが合っていないのかスカートの丈が短く、太股が出されていた。細く、白い足は精巧な人形のようだ。背はダンテより少し低い。両目は赤く、ダンテを見る視線が宝石のように輝く。形の違う左右の烙印も瞳の奥で光沢を帯びる。膨らみのない未成熟な体の特権である汚れも曇りもない肌に、ダンテは魅了されていた。

「女の子なんだ？」  
「はい」

「やつぱり」とダンテは満足気に笑った。いつもソネットと一緒にいるのですぐに性別の見分けがつく。女の子はなぜか髪が長く、体も華奢で、同じ年でも背が小さい子が多いとダンテの頭の中のデータが分析していた。

「……」  
「……」  
「歌を歌つてます」  
「どうして？」  
「気分が良くなります」  
「綺麗な歌だね」  
「……」

ノゾミは頬を赤らめた。自分の歌を褒められたことがなかつたらだ。恥ずかしい感情がよく理解できず、戸惑つた。

「少なくとも僕の母さんよりはうまいよ  
「そり、ですか」

ノゾミの顔が少し曇つた。ダンテはその反応を見逃さなかつた。

「どうしたの？」

「ダンテ、母がいますか？」

「うん、今いるよ

「あなた達は何故ここに来たのですか？」

水晶のような赤い瞳がダンテの瞳をのぞいている。

「うん、確か『神の血脉』を持つ人の護衛で僕と母さんは雇われたんだ。僕も一応『ハンター』」

「そうですか。だから剣を持っているのですね」

ダンテの背中にあるロングソードが気になっていたノゾミは、理由がわから落ち着きを取り戻した。

「まあね」

ノゾミはベッドに座った。

「ねえ。僕もそっちに行つていい？」

「どうぞ」

ダンテは遠慮なく少女の隣に座つた。そして、ノゾミの瞳をジッと覗き込んだ。

「君が『神の血脉』を持つ人？」

それは完全に予測で言つたことだつた。ソネットから『神の血脉』を持つ者は『赤い瞳』と『烙印』があると教えていた。ノゾミの瞳にはピッタリの特徴があり、もしやと思ったからだ。

「そりゃらしいですね」

淡々と返されてしまった。自分が『神の血脉』であることに何の感慨も持っていないようだ。恐らく、自分の中ではさほど重要なことではないのだろう。ノゾミとダンテの視線がピッタリと合わさった。

「綺麗な瞳　宝石みたいだね」

「宝石……」

白い頬が紅色に染まる。恥ずかしいというより予想外の反応に戸惑っていた。この瞳を綺麗だとは言われたことがないからだ。畏怖と憂慮、崇高と高邁、人間ではない何か。そんな反応しかされてこなかつた。だからよけいにノゾミを困惑させた。

「怖く……ないですか？」

恐る恐る少女は口を開いた。

「別に。どうして？」

「…………」

ノゾミは視線をダンテから逸らした。言葉では思いつかない感情がノゾミにそうさせた。何故か顔が熱くて仕方がなかつた。異性には何の興味ももつていなかつたはずなのに。

「…？」

急に少女が立ち上がつた。ダンテは驚いてベッドから飛び退いた。

「……………」

「……………来る」

「……………来たの？」

「あ～暑い……」

旧世界の塔の屋上で見張りについている武装兵が、持っている布で汗を拭う。気温は最高度になり、昼に近づきつつあった。屋上では簡単なテントを作り、1人で砂漠中を見回るという勤務についている。気温が高すぎるのか視界がぼやける。汗が目に何度も入り、すでに両目は充血していた。

「塩飴でも舐めるか」

支給品の塩飴を取り出すと、口に入れた。当然塩の味しかしない。だが気分は少し安らぐ。肩ひものついたサブマシンガンを置き、口号ソードを放った。本来は規定上見張りの最中武器を置くことは違反なのだが、今まで敵が攻めてこなかつたので油断しているようだ。

「もう半年か……女つ氣のないこの塔ともよつやくお別れだな。それにしても、ギンスの奴。仕事ほおって下に行きやがって。つたく、何があるってんだ……」

飴を口口口内で転がしながら武装兵は何気なしに、東の砂漠の方を眺める。

「うん？」

目をジバシバさせた。砂漠の砂が空へと舞い上がっている。こんな光景は今まで見たことがない。

「なつ、なんだ？」

テントから慌てて双眼鏡を持ってくると、砂が舞い上がりっている方角を覗いてみた。双眼鏡のレンズに凄まじい数の砂蟻がうつった。あまりの数に目をパチクリさせ、何が起こっているのか必死で分析しようと頭に血を昇らせた。

砂蟻の中心に何かいる。それは下半身を砂蟻と同化させ、灰色の骸骨のような姿でコチラに向かってきている。窪んだ眼窩にある赤い瞳が兵を睨んだ。

「うひ、うわあ！」

兵は双眼鏡を砂漠へと落としてしまった。だがそれを気にしている余裕はない。人類至上最もやつかいな敵が攻めてきているのだから。

「エツ、エコーズだ！」

兵は絡みあう足で、警鐘のある台へ走った。

「冷たい水とか出ないのかしら？」

ソネットは兵士の詰め所の一室で20分も待たされていた。それでもまだこの塔にいる依頼主がやってこない。いい加減イライラしてきたのか自然と貧乏ゆすりが出てきている。

「これは依頼料引き上げ決定ね」

相手のアラを逆手に勝手に契約料を引き上げることを決めた。

「……おつー いやいやいや、どーもー」

突然、部屋に男が入ってきた。外にいる兵士達とは違う武装工作服を着ている。目は狐目のようく細く、斜めに釣り上がっていた。

「……何よあなた?」

ソネットはすぐに入ってきた男を警戒した。ここにボスにしては若すぎるし、何よりも顔が生理的に受けつけない。人ではない、そういう、獣のような臭いがする。

「俺? 俺はヤン。よろしくお姉さん」

狐目の男はジロジロとソネットの全身を舐め回した。慣れているはずなのに、背筋に悪寒が走った。どこか気持ち悪いものが喉元へと這い上がる。

「……うん! 上等! 顔は大人っぽいけど体はまだ思春期だな。まったく男だらけで窒息死するところだつたぜ! さつ! 俺の部屋行こ!」

ヤンがソネットの肩に手を置いた。

「ど・こ・く?」

ギュウウウ~

ソネットの肩に手を置いたヤンの腕がえらい方向に曲がった。ヤンが何度も謝り、ようやくソネットの気がすんだのか手が離された。

「ふう～ふう～。いきなり何すんのよ？」

「それは」うちのセリフ。気安く触らないでくれます?」

曲がった腕に息を吹きかけるヤン。ソネットは悪びれもせずソップを向いた。その成熟した顔の割には、子供っぽい態度にヤンは苦笑した。

「えつ？ 君は砂漠の『カスバル』から来たベッキーちゃんじゃないの？」

です！」

「卑怯じやないわよ！ まつたく！ なんで男はこうアホばっかりなの！ まつ、ダンテに近づく女よりかはマシだけどね！」

ついポロッと本音が出た。

「まあいいや。とりあえず俺の部屋に行こう。『天国』に行かせてやるぜ」

「……その口を永遠に閉じやせぬには『屍』とするしかないようね」

転がっている石を持ち上げるとソネットはそれを片手だけでバキ

ツと碎いた。そのパフォーマンスでヤンは「あはは……すうじい力ね」と笑いちょっと引いた。

「あなたみたいな人に用はありません。早く出て行きなさい」「悪かつたよ。まさかあの『赤眼化』できるソネットさんだとは思わなかつた。確か『神の血脉』を持つあの子の護衛だつけ?」「

ヤンは意外に事情に詳しかつた。もしかするとソネットにわざとふざけたのかもしれない。それこそ狐につままれたような顔にソネットはなつた。

「そうよ」

「それはまた『愁傷さま』

ヤンは部屋から出て行くビックリソネットの前の椅子に座つた。ソネットはムツと男を睨んだ。

「あんた。無事じやすまないぜ」

「……どうじう意味?」

「たぶん高額の報奨金田当てだと思つけど、『神の血脉』とつきあつたつてろくな田にあわないつてことさ」

両手を後頭部に乗せるとヤンは椅子に深くもたれた。細い目がソネットを覗く。

「あんた『神の血脉』が絶滅した理由、知つてる?」

「……知つてるわよ。『2番目の息子』であり13神の1人、ファストが『力のみの存在』となつたからでしょ?」

「学者の話ではそくなつてるな」とヤンは頷いた。

「まあ絶滅したというか異常体質が治つたといった所だニヤ。『神の血脉』を持つ者は『赤い瞳』を失い、常人を超えた能力を使うことができなくなつた」

「『ニヤ』つて何よ」とソネットは眩いた。「何か言ったニヤ?」とまたヤンは語尾に「ニヤ」をつけた。「なんでも」とソネットは詳しく聞くことをやめた。

「……何が言いたいの?」

「人は 希望をなくしたのさ」

「希望?」ヤンの意図がわからずソネットは聞き返した。

「そう。外に出ればマルスオフやエコーブが跋扈する恐怖時代。町や村では円形魔法陣により中は自衛しているが、外に旅立つことは危険極まりない。もちろん皆閉鎖的になっていき、領主は通行税がまつたく取れない始末。そこで皇帝一人が支配し、税を払わなくてすむ商人に都合のいい『帝国主義』つてのが生まれた。エコーブやマルスオフに対抗する資源を植民地から効率よく得られるようになり、最近ではあの『24エコーブ』ですら大人しい」

今の社会情勢をヤンは説明している。アホな男だと思っていたソネットは意表を突かれた。

「だが人々に不安は残る。いつマルスオフやエコーブが攻めてくるかわからない。安定しているのは各帝国諸国のお膝元の都市や町だが、当然人が住む定数は決まっている。そこから除外された人が願うのは『神』の出現さ。自らの不安を取り除いてくれる『神』をね。エリニュスはうまくそこに取り入り、信者を増やしているみたいだ

けどね」

「……神なんていないわ」とソネットは呟いた。ヤンはその言葉を聞き逃さなかつた。

「なら聞いひ。もしこの世界に『神』が本当に具現化されたのなら君はどう思う?」

「……何も変わらないわ。救いを求める」となんてない

はっきりソネットは言いつ切つた。ヤンは「ブフー」と腹を抱えて大笑いした。

「何よ!」

「いやいや。悪い悪い。君は強いね。余計な話をしたな。だけど皆が君のよつに強いわけじゃない。もし本当に『神』ってやつが現れるのなら どんなことをしても手に入れよつとするね」

ヤンは椅子から立ち上がつた。

「じゃな! あつ、ウチの大将に報奨金の値上げ交渉しても無駄だぜ。何せあの人は目が笑つてないからな」

フラフラと手を振ると外へと出て行つた。

「なんなのあの男……」

ポツンと残されたソネットは小さく文句を言つた。

「待たせたな」

入れ替わりに部屋に入ってきた強面の男は、確かに目が笑っていた。グラム大将である。手には契約書とペンが入った黒い箱を持っている。

「むつ！ 貴様……」

グラムのシワが深い谷になつた。

「はい？」

「娼婦ではあるまいな？」

「ハンターです！」

本当に男はアホばかりだとソネットは思った。

「……うつむ。お前達の事情はわかつた

グラム大将が腕を組み唸つた。髪の毛のない額には大量の汗が流れ、黒髪がピクピク動いている。うつすらと頭部に血管が浮かぶ。

「わかつていただけました？」

ソネットがハンカチを片手に涙を拭つた。泣き落とし作戦だ。自分達の苦労を延々と聞かせてやり、相手の同情を誘い、かつ報酬金を上げるのだ。

「だがな。50万ギル上乗せは駄目だ」

キッパリとグラムは断つた。提示されている金額は約500万ギル。人の世話をするだけでこの金額は相当な破格だ。格下のエコーグズ1匹討伐で相場は100万ギルなのだから5匹分に値する。

「じゃあ25万ギル。私達にも生活つてものがあるのよ」

ソネットは上乗せ分を図々しく半分にした。組織が大手なのもつとふんだくれると思つたからだ。

「話にならん。提示した金額以上は絶対に払わん」「なによケチ！」

ソネットは不貞腐れて腕を組んだ。

「ケチでも結構。提示した金額は相場としては破格の額だ。不満があるなら他をあたる」

グラムが席を立とうとすると、ソネットは慌ててそれを引きとめた。わざとグラムはそうしたのだ。これで駆け引きはグラムに軍配が上がつた。

「まつさかあー。ちょっと冗談を言つただけですよーー

急にソネットの態度が卑屈になつた。グラムの狙い通りである。

(……契約決裂となるとこつちがまずい。ダンテにも成長に見合つた服や靴を買ってやりたい。今後の資金も貯めたい)

ソネットはこれ以上余計なことを言つるのはやめた。

(「こ」は大人しく妥協しておいた方が利口ね。このおっさん本当に融通がきかないわ。報酬額はいいんだから「こ」は我慢と)

「ヤツとグラムは気づかれないように笑った。勝利を確信したからである。

「それなら契約成立だ。さっそく仕事のほう……」

「たつたつ大変です！」

若い兵士が慌てて部屋に入ってきた。

「なんだ騒々しい

「マルスオフが……砂蟻が大群でこの塔へ向かっています！」

「有り得ん！」

グラムは一蹴した。

砂蟻は雑食性で餌を取るときは集団で行動し、人を襲うこともあります。体も大人3人分ぐらいの大きさで、硬い顎で骨すら余裕で噛み碎く。しかし、地面に多数いる小さな蟻と違つて、普段はほとんど動くこともなく、繁殖能力も低いので餌もさほど必要ない。むしろ積極的に人を襲うことなどない生き物なのだ。

「ただの大移動ではないか？」

砂蟻の生態を知っているグラムは冷静に聞き返した。餌場を求めて砂蟻は大移動することがあるからだ。

「エコードがいます！」

その一言でソネットとグラムの顔つきが一瞬で変わった。

「なつ、なんだと！！」

「なんですつてえ！！」

若い兵に案内させ、グラムは塔の監視室へと走った。監視室は詰め所の廊下に出る必要はなく、中の階段を10階上つていけばたどり着いた。ソネットもその後ろをついていった。用意されている双眼鏡でグラムは砂漠の先を覗く。

遠くで砂煙が天高く舞い上がっている。

地面が地震のように揺れた。青くなっている兵士の傍に置いてあつた陶器がカラリと地面に落ちた。双眼鏡のレンズの中で恐ろしい数の砂蟻が、触角を真っ直ぐコチラに向けて向かってくる。鋭い顎が2つに大きく割れた。

「くつ……本当にエコードがあるわ」

グラムの双眼鏡にはエコードがうつっていた。骸骨のような体で、灰色の皮膚に肋骨が浮き上がっている。下半身は砂蟻と同化させており、上半身しか見えていない。赤い瞳がこの塔を捕らえ、離さない。グラムの持つ双眼鏡が震える。

「くそつ！！ あの数では明らかにコチラが不利！ せっかく手に入れた『神の血脉』を失うことになりかねん！ それだけはなんとしてでも避けなければならない！ 飛行竜を用意しろ！ ここから『女神』だけでも脱出させる！」

「はつ！」

兵士は敬礼すると、すぐに準備に向かつた。

「ハンター！ お前は……」

ソネットの姿はなかつた。グラムは双眼鏡を地面へと叩きつけ、『女神』の元へと向かつた。

『紅姫』の抗体を持たず、毒の回るこの世界で……旧世界の帰還を繰り返し咳く者。『エコード』。

ソネットはダンテの元へと走つていた。もはや賞金などどうでも良くなつていた。早くここから脱出しなければならない。

ビリしてあんな化け物が……。

今更ながらヤンの言つた言葉が身にしみた。

『神の血脉』？

ソネットが猫目になつた。明らかにハイドロを疑つてゐる。それも当然で『神の血脉』を持つ人間は絶滅してもういなはづだ。これは世界の常識であり、ソネットですら知つてゐる。

ソネットとダンテはハイドロに誘われ、ギルドから出て、居酒屋にいた。夜になると活氣づいてくるが、今は昼で誰もいない。店主が欠伸をしながら掃除してゐるだけだ。ここはハイドロにとつて穴場でもあつた。生温い水がコップに入れられ、机に3つ置かれていた。依頼内容を聞くまでは素直だったソネットの態度が、一転して不貞不貞しくなる。だが、ハイドロにとつてこれは折り込みずみなの

で気にもしていない。

「わかる。俺も依頼で『神の血脉』を護れって言われて顔が狸になつた

「ふつ、そうね」

ソネットの表情が明るくなつた。

「ねえ母さん。『神の血脉』つて？」

「後で教えてあげる。静かにしててね」

唇に人差し指を置く。ダンテは「はい」と静かになつた。

「で、どういひことなの？」

腕を組んで聞く体勢に入った。ハイドロは木の机に肘を置き、両手を組んだ。

「恐らく『神の血脉』とは象徴のことで、実際『神の血脉』を持つ者ではないと俺は考えている。今回の依頼主はあのエリーキュスだ。知つてるか？」

「あ～あの有名な宗教の……」

エリーキュスとは3人の女神、メメント（生への侵犯）、リブラ（魂の葬送）、クノックス（閉じた時間）を信仰している巨大な宗教団体である。永世中立国ノルニルの教皇アシェルが最高位についている。それゆえか、ノルニル国の約7割がエリーキュスの信者であり、その防御力は世界屈指とされている。

信者の数も多く、他の宗教団体の追随を許さない。派閥もいくつがあり、特に有名なのが『烙印の瞳』、『六枚の翼』、『漆黒の服』

の3つである。今回の依頼主は『烙印の瞳』に所属する軍隊のようだ。

「奴等は神の象徴がほしい。その象徴となつたのは恐らく『瞳』に何がある女』だ。『烙印の瞳』は獣の記号を嫌う。姿形は普通の女で、こだわっているのは『世界を見通す目』なんだよ。どこからか適合する女を見つけてきて、塔に閉じ込めていた。それがエリーカスへ帰還命令が出たので、護衛兼世話役として女のハンターがほしいわけだ。わかる?」

ハイドロはまさか本当に『女神』がこの世にいるとは信じていないうだ。実際護衛対象である女を見たことがないのだから当然なのかも知れない。

「なるほど『神の血脉』とは偽物つてことね」

「そのとおり」とハイドロは拍手した。ソネットも『神の血脉』が本当にいるとは信じていないし、深く考えもしない。お金しか興味がないからだ。

「奴等の嘘に乗つてやつてくれないか? 報酬はこんなもんだ」

カラカラとギルドから貰つた紙に金額を書いた。ソネットは目が飛び出るぐらい驚いた。ダンテは「すごい!」と感嘆の声を上げた。

「うへ、こんなに……」

これは逆に怪しい。ソネットの目が報酬欲しきと怪しきで葛藤している。

「これぐらい出せると先方は言っている。何せあの巨大宗教組織だ。金はあるのさ。俺もアンタを紹介すれば結構な額が貰える。頼む。今回は条件が厳しい。アンタに断られたら後がない」

ハイドロはソネットに手を合わせて拝んだ。確かに条件は『女』、『赤眼化』、『ギルドの肩書き』と厳しく、これぐらいなら貰つてもいいのかもしれない。しかも、神の象徴の護衛というかなり高度な仕事だ。たとえそれが女神の偽物でも相手にとつては大切な『神』なのである。

「……わかつたわ。引き受けましょ」

初めて自分が『女』であることにソネットは感謝した。魔法はうまく使えないが『赤眼化』できることにも感謝した。これは神の天命に違いないと、ソネットはその時は思っていた。

今、ソネットはヤンの言葉通り後悔していた。

やはり高額な賞金の裏には何がある。人間ならまだしも、エコーズが攻め入るというのは異常だ。狙いはもしかすると『神の血脉』かもしれない。エコーズは『13神』を嫌っているからだ。

「ダンテ！」

詰め所前へと戻ったが　そこにダンテの姿はなかつた。

「うん?」

岩山の上で相変わらずカンタロウが様子を伺つてゐると、急に兵達が慌しくなつた。何事かと双眼鏡を遠くへ向けてみると、砂煙が舞い上がつてゐる。そこには凄まじい数の砂蟻が塔へと突進してきていた。

「おんや?」

カンタロウが奇声を発した。

数があまりに多すぎる。異常事態であることは明白だつた。

「どうした?」

汚い布で作つた簡易テントの中にキクはいた。鎧や剣を外し、休憩しているようだ。暇なのか櫛で金髪をとつてゐる。

カンタロウがその場から立ち上がり、仁王立ちした。保護色の役割をしていた布がハラリと落ちた。

「おい……大変な事になつてるぞ」

「S級犯罪者がきたか! ? よつしゃ! カンタロウ君行くか!」

「いや……違う。マルスオフだわな」

「なんだ? もづ。私は昼寝するぞ」

暇がピークに達しているようだ。この勤務について口は浅いが、さすがにいつも同じ光景だと飽きた。キクは「ブスッ!」と両手を額に乗せた。

「昏寝なんかしている場合じゃないわな」

「どして？」

「砂蟻が……」

「砂蟻？ 認定外マルスオフじやん。サボテンでも食べにてきたんじゃないの」

「砂蟻の中心に Hマークがいる」

「……はっ！？」とキクが立ち上がった。

グラム大将は逸早くノゾミの元へ向かっていた。状況がわからな  
い見張りの兵が、顔を真っ赤にしているグラム大将を見て戸惑つて  
いる。グラムは大声で怒鳴った。

「どけつ！ 少女を連れて行く！」

見張り兵を強引にどかすとグラムは部屋のドアを開けた。  
そこには『神の血脈』をもつ少女が……いるはずだった。

「なつ！ いないぞ！？」

興奮のあまり誰もいない部屋でグラムは怒鳴った。

「どうなつてるー。」

「誰も通していませんし、少女は外には出でおりませんー。」

見張りの兵士も困惑した。

「ではなぜいないのだ！」

グラムは部屋の中に入った。すると、窓枠が転がっている。

「これは……まさか！」

慌てて小さな窓にでかい頭を突っ込んだ。

「あっ！ 貴様！」

窓の外では、少女が少年に手を引かれて下の窓から逃げ出そうとしていた。2人はすでに異変に気づいていたのだ。

「ちょ、ちょっと待てー！」

手を伸ばそうにももう届かない。

グラムは少女に声をかけた。少女はグラムの声に気づいて顔を上げた。

「どうして逃げる！ 我々はお前を護衛しているのだぞ！」

「貴方達では無理でしょう。私はこの少年と行くことに決めました」

ノゾミは冷たく言い放った。

「じめんよ。この子は僕が責任持つて守るからー。」

少女を窓の外から中に引き入れ、銀髪の少年が叫んだ。

「おつおまえ……ー？」

塔が大きく揺れた。

先発の砂蟻が塔に突っ込んできたのだ。もう時間がない。

「くそつ！ 仕方ない！ おい小僧！ これを持つていけ！」

大将は少年に向かつて何かの紙を投げつけた。その紙は丁寧に丸く丸められていた。少年はそれをうまく受け取る。

「いいかつ！ その地図の場所へ必ず行け！ パンドラという女がお前達を待つているはずだ！ 死んでも女神様をお守りしろーー！」  
「わかつた！」

少年は紙を受け取ると少女を連れて塔の下へと降りていった。

「いいのですかつーー？」

半年も守つてきた大切な神の象徴を、ハンターに任すなど兵には納得のいくことではなかつた。

「いいわけがなかろう！ あんなハンターに女神を任せられるか！ まずは女神の護衛を優先とし、飛行竜による脱出の準備が出来次第女神を奪還する！ お前はあの少年を追いかけ、女神を護衛しろ！ お前はワシと来い！ 飛行竜の使い手が少ないことが仇となつたわ！」

「はつー！」

「了解しました！」

2人の兵士は敬礼した。

「ダンテ！－！ ビニなの！－！」

ソネットはダンテの名を叫んだ。逃げ惑う兵士の中をかき分け、ダンテを探す。兵達はソネットのことなど無視して廊下を駆け回る。

「おい！－お前！－早く逃げないか！」

兵士の一人がソネットの腕をつかんだ。

「つむきいわね。私の息子がいなーのよー。」

その手をふりきる。

「もう知らんぞ！」

兵士はさつさと行つてしまつた。もはや塔を守るべき兵士は散り散りとなつていて。グラム大将の命令よりも速く、砂蟻が塔に体当たりしてきたからだ。予想外の速さで砂蟻は塔を占拠していった。サブマシンガンがけたましく塔内に鳴り響く。ロングソードを抜き、砂蟻の腹に突き刺す兵もいた。だが、やはり数に圧倒され、次々と硬い顎により全身の骨が砕かれた。すでに兵の数よりも砂蟻の数が多數を占めている。戦況はエリニユス側の敗北を認めていた。

ソネットは何とか砂蟻の攻撃をかわしながらダンテを探し続ける。塔の強固な壁は、砂蟻の体当たりにより簡単に破壊されていく。柱にヒビが入り、塔が少し傾いた。

「母さん…」

「ダンテ！？」

愛しい者の声だ。ソネットはすぐに阿鼻叫喚の中、ダンテの声を聞き分けた。

「ダンテ！」

ダンテが塔の階段から下りてきた。ソネットはすぐダンテを抱きしめた。

「よかつた 私の可愛いダンテ」

クシャクシャになつた銀髪から懐かしい匂いがする。ソネットの目に涙がたまつた。

「母さん……それより」

スタスターと静かに塔の階段を降りる者がいた。  
胸で苦しそうにもがくダンテの後に少女がいる。

影から現れた2つの瞳は、血のように真紅に染まつてゐる。  
だが、それは不気味という感情ではない。人ならざる艶美に思わずソネットは息を飲む。

すくなく綺麗な瞳。だけど……。

心がつかまれ揺さぶられる。心拍数が勝手に早まっていく。口の中の水分が乾いてくる。その赤い瞳は人を底知れぬ不安へと陥れる。

「……あなたは？」

「始めまして、ノゾミです」

ノゾミはスカートを手に取り、恭しく頭を下げる。

「あつ、始めまして」

挨拶を返した後、瞳の奥に何かあることに気づいた。そこには月のように薄い金色の『烙印』がある。それは噂に聞く『神の血脈』ではなかつたか。

そんな……まさか……。

実在しているはずがない。あの帝国が『絶滅宣言』したのだ。この世界にいるはずのない存在なのだ。

「ダンテ……」の声は……

砂蟻がノゾミの後ろの壁を突き破つた。

煉瓦が雨のように散らばつた。

触角が機械的にソネット達の方向へと向いた。

「ぐつー。」

ダンテは反射的にノゾミの手を引いた。

「砂蟻！ もうこことなとこりまでー。」

ソネットは背中から剣を抜いた。

「かえりた……い……かえり……たい」

マルスオフの頭部から何かがはえてきた。それは人のように頭があり、体があり、両腕があった。下半身は砂蟻と同化している。姿は灰色の皮膚から肋骨が浮き上がり、人の骸骨を連想させた。両目は異常にまで赤く、憎悪の炎に燃えている。それは人の言語である「かえりたい」を何度も呟いた。

「…………かえり…………たい…………」

ノゾミを見つけると、8本の足を使って方向転換し、襲いかかってきた。ソネットはダンテとノゾミの前に立とうと剣を持ったまま走った。だが、予想以上に砂蟻の反応は速い。

「さがつて！」

ソネットが叫んだ。間に合わない。それより早くマルスオフの強力な顎がノゾミに振り下ろされる。

「やめつ…………」

砂蟻の前に立とうとしたダンテをノゾミは片手で制止した。ノゾミの瞳が黄金に変色している。神々しい光がノゾミの全身を包み、外へと魔力を発散させた。魔力を直接受けた砂蟻はエコーズと共に動きを止められた。

まるで時が止まつたかのように砂蟻の動きは完全に制止した。

「…………すごい」

ダンテはノゾミの能力に、感嘆した。ソネットは今がチャンスと

ダンテに向かつて叫んだ。

「ダンテ！ 今よ！ 早くその子を連れて逃げるわよ！」

ソネットの声でダンテは我に返つた。

「行こう！」

ノゾミの手を握るとソネットの後を追つた。制止した砂蟻とエコーズは口すら動けず、魔力の効力が切れるのを待つしかない。エコーズは獣のような赤い瞳でノゾミの後ろ姿を睨んでいた。

ソネットはスナ鳥を停車させている区域へと向かつた。運のいいことに、まだその区域に砂蟻は侵入していない。スナ鳥達は身の危険を感じているのか大きく鳴き、首の繩を断ち切ろうと暴れている。もう何羽かは逃げ出したようだ。そこにはハイドロもいた。

「あっ！ あんた！」

「おう。あんたも来たのか。悪いけどお先に失礼」

ハイドロはスナ鳥の繩をとくと、背中に乗り、さつやと南西の方角へ逃げ出した。

「私達もスナ鳥に乗つて逃げるわよ！」

スナ鳥は残りあと2羽だった。大量のスナ鳥が飼われているはずだったが、兵達が勝手に持ち逃げしたのだろう。

「ダンテ。いけるわね？」

「大丈夫。僕とノゾミが一緒に乗るよ」

ソネットが1羽の背中に乗り、ダンテとノゾミがもう1羽に乗ることになった。ノゾミはスナ鳥の背中に乗ったことがないので最初は戸惑っていた。そんなノゾミをダンテは手を貸し、じりじりか背中に乗せることができた。

「僕の背中にしつかりつかまつて

「はい」

遠慮なしにノゾミはダンテの背中に抱きついた。腕からレザーアーマーの感触が伝わってくる。ダンテはうまい手縄をわざくと、スナ鳥を一回転させた。ノゾミは怖くなつて両手をつぶり、ダンテの背中に顔をうずめた。

(……あつ、いけないいけない)

ダンテの背中にしがみつくノゾミを見て、ソネットは複雑な心境に陥つてくる自分に気づいていた。その邪念を追い払おうと頭を振つた。今はここから逃げることに専念しなければならない。

「よし！ いいよ、母さん！」

「うん！ それならハイドロが逃げていった方向へ……」

突然、ハイドロの悲鳴が響いた。ソネットはスナ鳥の動きを止めた。

「……ではなく。逆の方向へ逃げましょー！」

「オッケー！」

ソネットとダンテは手縄を操り、ハイドロとは逆方向へと走り出した。

3人を乗せたスナ鳥は「クエ！」と一声叫ぶと砂漠の砂を踏み鳴らし、塔から北東の方角へ走った。さすが砂漠で進化した動物だけあって地理に不利はない。旧世界の塔が遠くなつていい、未だに人の雄叫びや銃声が静寂だつた砂漠を喧噪に変えている。兵や大将には悪いが、やはり自分やダンテの命が最優先である。ソネットは黙祷を込めてチラリと後ろを振り向いた。

すると、砂蟻達は方向転換してソネット達の方へと移動を開始した。再び砂嵐が空へと舞い上がり、寡黙な砂蟻の4つもある黒い目が太陽に反射した。ゾクリとソネットの背筋に悪寒が走る。

「追いかけてくる！」

ダンテは砂蟻達の異常行動にすぐに気づいた。頬に激しく当たる乾いた風が、氷のように冷えてきた。

「どうどうして追いかけてくるのよ！ 塔の兵士達の方が筋肉もあつておいしいじゃない！」

砂蟻達の中心にノゾミを攻撃したエコーズがいた。真っ直ぐソネット達を睨む。

（あのエコーズ！？ どうして！？）

エコーズの行動原理がわからない。ソネットは少しパニックに陥つた。「母さん！ 落ち着いて！」とスナ鳥の手綱裁きに乱れが生じたソネットを、ダンテが一生懸命励ました。

砂蟻達がどんどんソネット達に追いついてきた。スナ鳥の時速は速い部類に入るが、限界までスピードを上げてくる砂蟻達はそれはるかに凌駕していた。ダンテは何か手はないかと周りを探した。

(あれ?)

空で何かが光った。水色と赤色が虫のよつと細かく動いている。それは急速に落下してくる。

「いっくぞお～！」

突然、空の彼方から大声が砂漠に広がった。赤色の光は炎の翼をまとった人間だった。水色の光も水の翼をまとった人間だ。2つの相反する翼はソネット達の後ろの砂蟻達に凄まじい速さで迫っていく。

「あれは……」

次の瞬間、水と炎が砂蟻に当たる直前でクロスし、再び空へと羽ばたいた。「ボンッ！！」と炎と水の柱が立ち上がり、砂蟻達を地面から吹き飛ばした。強力な攻撃魔法に砂蟻達はたじろぎ、陣形が崩れしていく。

「十三神の力だわ！」

この世界では典型的な高位魔術だ。ソネットでも知っている。最高クラスの攻撃型魔術。その中でも『四天』と呼ばれる翼を持つ魔法。

この魔法を使えば普通の人間でも空を自由に飛び回る事が可能になる。しかしそのコントロールの難しさに背に魔力の翼をはやせて、空を飛行できるのはさらに修行を積み重ねなければならない。よつて今空中を飛行しているのは第一級魔道師に匹敵する。

男と女の両目は赤い瞳であり、右半身に『ロードの印』がうきあがっていた。それは『赤眼化』している証拠だ。2人とも右手の甲

に何かの紋章があるが、ぼやけてよく見ることができない。

炎の翼を持つた男は大きく回転すると一気に急降下した。マルスオフと同化したエコーズを狙っているのだ。エコーズの赤い眼がギヨ口リと動いた。

「もらつたわな！」

男の刀がエコーズに振り下ろされる。

スカツ

「あらー！？」

エコーズは素早く体を砂蟻の中に隠し、刀をかわした。

男はそのまま砂漠の中へと突っ込んでいった。

「ちょっとー？」

男の安否が確認できない。かといって助けることもできない。今

スナ鳥の手綱を離せば終わりだ。

エコーズは再び本体を砂蟻の体から出現させた。

「本命はこつちー！」

出てきたばかりのエコーズの体に剣が振り下ろされた。

「ぐあっ……」

エコーズの肩が裂けた。赤い鮮血が砂蟻の体に飛び散った。

水色の翼を持つた女がそのまま空へと上昇していく。どうやら赤

い翼の男は囮で、水色の翼の女がトドメをさす段取りだつたらしい。畠にかかつたエコーズは、赤い目を動かし空へと逃げた女を追つた。

「あの紋章は……」

女の右手の甲に『オピオン』の紋章が出ていた。それは『盲田の蛇』を表す国章だ。つまり、大帝国に所属する者であることを証明している。男の方ももしかすると同じ国章があるのかもしれない。ソネットは「クリ」と唾を飲み込んだ。

空では赤い翼を持つた男が砂漠の砂を全身に浴びながら待機していた。

「ゴホッ……どうだ!? うまくいったか? キク?」「いや……浅い。さすがにしぶといね、カンタロウ君」

砂蟻達の進行は止まらない。多少陣形は乱れたが、すぐに体制を整えてくる。指揮官一人いるだけでこうも戦況は違つてくるのである。

「かえり……たい……かえり……たい……」

エコーズの眼から血の涙が流れる。そして再びマルスオフの中へと隠れた。

「隠れたか……こうなりや砂蟻ごと一気に」「待つて 様子がおかしい?」

水色の翼を広げ、キクがカンタロウを制止する。砂蟻達の速度が遅くなつた。いや、ソネット達の速度に合わせてきているのだ。

「母さん」

「わかつてゐる」

ソネットとダンテも砂蟻達の奇妙な行動に気づいた。

「コケ！コケ！」

スナ鳥達が唐突に泣き叫んだ。

「何！？」

「うわつ！？」

大地震が発生した。画面が激しく上下に揺れる。ソネットとダンテはよろけそうになるスナ鳥を立て直すのに必死だった。ノゾミはダンテの背中から顔をだし、遠く前方を指さした。

「 来る」

砂漠が揺れた。

地震ではない。

砂漠の砂全体が衝撃に耐えられず、轟音を天にまで響かせている。世界の空間が震え、空気がすべてを圧迫し、ゆれば太陽にまで到達した。

「あれは 」

5人の視線が固まつた。

砂から巨大な透明な羽が4本飛びだしてきた。

その羽虫のような羽はまだ序章に過ぎなかつた。

本体はさらに巨大で、長い胴体の先に小さな頭がある。

砂の中から出てくる際、砂漠中の砂が空に飛び上がり、それは大きな波となつた。

まるで海から巨大な大蛇が出てきたようだ。

全長は軽く旧世界の塔を超えている。

体はイモムシのようにドーナツ状に重なつており、色は闇よりも深い黒で光沢を帯びる。

砂蟻のような4つの目に、巨大な顎、2つの触角が静かに動く。

オオオオオオオ

その巨大な怪物は声を上げていない。

悲鳴を上げたのは砂漠だ。

圧倒的な怪物の前に自然は為す術もなかつた。

「 砂蟻の女王様だ」

口を開けないカンタロウの変わりに、キクがその怪物の名前を言った。

旧世界の塔の上では、グラム大将と部下が女王蟻の出現に体を硬直させていた。双眼鏡を持つ手が震える。砂漠の熱さが原因ではない生ぬるい汗がとめどなく流れた。グラム大将の後ろで飛行竜が突然の巨大な古代の生物にパニックを起こしている。

「ばつ……馬鹿な。砂蟻の女王が地上に現れることなど有り得ん！」

過去にまったく事例がないことだった。ゆえに砂蟻の女王の存在は知っていても、その姿を見た者は少ない。だが、今砂漠を支配している巨大生物は、文献に描かれている砂蟻の女王の特徴と一致していた。

「くそつ！ あんな小僧に女神を任すのではなかつた！ おい！」

「はいっ！」

「あの小僧について行けと命令を受けた兵士はどうした！？」

「消息不明です！」

グラムの目元が引きつった。

「おのれ！ 今日に限つてこつも裏目につ！ 飛行竜は準備できたか！？」

「だつ、駄目です！ 興奮し、制御がききません！」

「うひ、うわあ！」 とベテランの飛行竜使いが叫んだ。またグラムの目元が引きつった。

「くそお！ なんとかしろ！ ハンター！！！」

「……どうしたら……いいの？」

砂蟻から逃げるソネットは絶望感に支配されていた。このままスナ鳥を進めていけば、女王蟻へと突っ込んでしまう。かといってスナ鳥を止めてしまうと後ろの砂蟻の大群に押しつぶされる。斜めや横に逃げようにもエコーズにより意思を支配された砂蟻が、V型の陣をとりソネット達を逃がさないようにしている。ハ方塞がりだ。

「私がここから降ります」

ダンテの背中を抱きしめているノゾミが提案を出した。

「……えつ？」

ダンテとソネットは意味がわからず聞き返した。ノゾミはいたつて冷静だった。

「さっきのエコーズの狙いは私です。私が倒れればあのエコーズは後ろの砂蟻の制御をやめると思います。あなた達はそのままスナ鳥で進んで行ってください。砂蟻が歩みを止めた時、方向転換してください」

ノゾミの手がダンテから離れた。

「さよなら　ダンテ

ゆつくりと体を砂漠へ預ける。

「ノゾミー。」

砂漠へと吸い込まれていくノゾミの腕を、ダンテがつかんだ。力強くけつして離そとしない。ノゾミは驚いた。

「……ダンテ？」

「駄目だ！ 君を死なせはしない！」

ノゾミの赤い瞳が動搖する。理由がわからないからだ。

「ダンテ、私を離さなければあなたの母も、あなたも、死んでしまいます」

わかりやすくダンテに説明する。だが、ダンテは首を横に振った。

「君を絶対に離すものか！」

ノゾミはダンテを説得してほしそうにソネットに助けを求める。

「……うん、さすが私の息子。ノゾミー その手を離しゃや駄目よ  
！」

予想外の答えた。ノゾミはもう一度2人に忠告することにした。

「でも、あなた達は死にますよ？」

「……覚悟のうえよ」

ソネットはノゾミに振り向くとともに、決意を告白した。

スナ鳥を操るソネットとダンテの真上では、魔法により空中を飛行しているカンタロウとキクの姿があった。2人はこれからどうするか思考を高速回転させていたが、もう時間が残されていないことを知った。すでに砂蟻の女王の前に、側近である羽砂蟻が奇声を上げ、攻撃行動を開始しようとしている。このまま進めば確実にソネット達の身が危ない。

「これは助けないといけないわな。キク。行くぞ」

「待つて！」とキクはカンタロウを止めた。

「……鳴いている……砂蟻が鳴く所なんて初めて聞いた」

キクは砂蟻の生態に詳しくはないが、この世界の砂漠地帯に必ずいる生き物なのである。旅していく時に何度も目撃している。蟻のわりには気性は穏やかで、人を襲うことは滅多にない。肉食でもあるがサボテンばかり食べているイメージしかない。あんなに奇声を上げる所は学者ですら知らないのではないか。

「まさか……」

キクはある事に気づいたが、カンタロウは待ちきれずソネットの元へ向かつた。

「おい！」

「何よー！」

余裕のないソネットは声が荒い。魔法の翼を「ソントロールしながらカンタロウは許容範囲まで近づいた。

「今からお前達を連んで飛ぶ！ そのスナ鳥は捨てろ！」

帝軍が自分達を見捨てず、助けてくれることにソネットは驚いた。普通なら何のメリットもないハンターなど助けずにさっさと逃げていくはずだ。もしかするとノゾミの『神の血脉』に気づき狙つてゐただけかもしれないと考えたが、とにかく助けてくれるのならダンテやノゾミだけでも救つてもらいたい。

「わかった！ だけどまずダンテとあの子からにしてー。」

「大丈夫だ！ キクがやつてくれる！ キクー！」

「カンタロウ君！ わかった！」

キクがカンタロウの傍にまで飛行してきた。水色の翼が太陽の光で輝く。

「何が！？」

「あの女王蟻は後ろの砂蟻とは系統が違うー。」

「つまり何！？」

後ろの砂蟻達の足音がうるさい、カンタロウとキクは自然と大声になってしまっていた。

「血が繋がつてないってことー。恐らく砂蟻は繩張りに敏感で滅多

に争いはしない生き物だと思う！ それが今回大群を率いて攻め込んだきたから女王蟻とその側近の羽砂蟻がてきたと思うの！ あの鳴き声はきっと威嚇！

「そうか！ 自分達のテリトリーに侵入されると勘違いしているわけだな！」

だからあんなに鳴いているのだとカントロウは理解した。

「だからあのヒーラーを止めないと蟻達の戦争に巻き込まれちゃう！」

「ヒーラーなんて探している暇はないわな！ 僕はこの女を運んで飛ぶからお前はその子達を運んでくれ！」

「それしかないね！ わかった！」

例え女王蟻が出てきた理由がわかつたとしても、結論としての答えはそれしかなかつた。

さつそくキクはノゾミを抱きかかえた。「あつ……」とノゾミは空気のような声を漏らした。カンタロウは大人であるソネットの体を両手でつかんだ。「変なとこ触らないでよ！」とソネットは警告した。

「そんなに余裕ならまだ大丈夫だわな」とカントロウは笑つた。

「さつ、君も私につかまつて」

左胸にノゾミを押しつけると、キクはダンテに手を伸ばした。

「……止めなあや」

急にダンテがスナ鳥の背中に立つた。ソネットはダンテの様子にまだ気づいていない。

「えつ？」

「ノゾミをよろしくね、綺麗なお姉さん」

「ちょ、何してるの？」

「上を見て」

ダンテの言うとおり、キクが上を向くと黒い影がいくつも射した。空には何十匹とこう羽砂蟻達がキク達を狙っている。

「羽砂蟻！？」

「いつのまに！ 囲まれてるぞーーー？」

カンタロウも太陽を隠す羽砂蟻の存在に気づいた。羽音の動きが、自然ではなく規則正しい。明らかにエコーズに操られている。ソネットもダンテが何をしようとしているのかようやく気づいた。

「ねえ綺麗なお姉さん もし余裕があつたらよろしく」

ダンテは微笑むと、スナ鳥の背中を蹴った。キクの真上を素通りしていく。ソネットがダンテをつかもうと手を伸ばすが届かない。ダンテはそのまま空中を遊泳し、ある砂蟻に向かつて剣を抜いた。

「そこにいるんだね？ 『ごめんね』

ダンテが剣を投げた。剣は砂蟻の背中を貫いた。

「がつ！？ がああああつーーー！」

砂蟻とは違う魔物の悲鳴が木靈する。砂蟻は生命の灯火をなくし、スピードの赴くままに砂漠に転がった。その上を仲間の砂蟻達が踏

みしだいていく。

「！」のおおおー！」

空に飛び上がったダンテをつかもうと、キクは手をのばした。ノゾミを抱えているためバランスがとれず、魔力の翼は思うように動かない。大帝国章『オピオン』が苦しげに真っ赤に光る。魔力は限界に達し、キクの手はあと数？の所でダンテの手から離れていった。

届か……！？

その瞬間 空間が静止した。キクは気づいていないが、ノゾミの瞳が金色に輝く。砂蟻達やキクの動きは静止していないが、ダンテの体だけが空中で止まった。

今一瞬、空間がつ！？

考えている余裕はなかつた。ダンテの手を取つた刹那、一気に重力がキクにのしかかつた。

「よしつー！」

キクはダンテの手をつかんだまま空へと上昇しようとした。背中の水色の翼に魔力を追加し、曖昧な風切をより具現化させる。もなくと砂蟻達が起こす砂煙がキクの視界を邪魔する。キクは歯を食いしばつた。

「くわうー！ ちょっときついー！ー！」

自分でも聞いたことのない悲鳴だ。子供とはいえダンテとノゾミ

の体重は、キクの力を吸収していく。『赤眼化』できる時間も残り少ない。最後の力を振り絞つて魔力の出力を上げた。それによつて水色の翼はさらに具現化され、天使のように大きく羽ばたいた。

砂煙がようやく晴れ、視界が広がつた。真上にある太陽と砂蟻の行進によつて削られた砂漠跡が交差する。そしてキクの目の前に巨大な岩が姿を現した。

嘘つ！？ キノコ岩！

てつぺんは広がり、根元は細い。砂嵐に根元が削られた典型的な砂漠の岩壁だ。高さはちょうどキクの視線先がてつぺん部分にある。このまま飛行を続ければ確実に衝突する。

一瞬、キクとノゾミの目が合つた。キクは固くなつた表情をといた。

キクはダンテとノゾミを捨て、体重を軽くし真上に逃げるという選択をしなかつた。むしろ自分の体を盾にするため体を翻し背中を向けた。両目を閉じたのは重傷を負うであろうダメージに耐えるためだ。

「インバルンの名において命ずる！ 高速の炎の塊となり敵を碎け！」

カンタロウの声が空に響き渡つた。炎の塊がキノコ岩の前の砂漠を吹き飛ばす。キクの翼はうまくその上昇風に乗り、空へと舞い上がつていく。

「よっしゃ！ ナイス、カンタロウ君！」

「おうよー！」

カンタロウは親指を立てた。

「よかつた……ダンテ……」

ソネットも安堵のため息をついた。

「はあ……無茶するな。」この子はお前とビリーハーの関係なんだ?  
だ?」「

なさい。」

真っ赤になつたソネットがカンタロウの体から離れようと手に力を込めた。

「いやっ。今いりで離すと落ちるわな？」

必死で抵抗するソネットを宥めようとしたが無駄なようだ。カンタロウは翼を閉じると砂漠へと降りていく。

卷之三

「暴れるな暴れるな。今降りるから」

地上では指揮官を失った砂蟻達がウロウロと今いる場所の確認をしていた。エコーズからの意識支配から目が覚めたのである。支配されている時の記憶はなくなっているようだ。

「はーー。無茶するね。君は」「ごめんなさい。でもお姉さんすごいねー

「ごめんなさい。でもお姉さんすごいね」

ダンテは申し訳なさそうに頬を搔いた。

「ま～あね……つて、この子寝てるし」

キクに抱えられていたノゾミは「スー、スー」と寝息をたてていた。

砂漠は平穏を取り戻しつつあった。

砂漠に高波が現れ、山が盛り上がりしている。女王蟻が地中の口口二一に帰るためできた砂漠の波だ。他の側近の羽砂蟻も女王と共に帰っていく。砂漠は海のように、女王達を飲み込んでいった。

ソネット達を襲った砂蟻達は、違う砂蟻のテリトリーに侵入しそうになつていてことに気づき、慌ててその場を去つて行つた。女王蟻を護るために巣に向かっていた砂蟻も、杞憂だとわかり、砂漠の砂へと潜つていく。砂漠に日常的な光景が戻ってきた。

『赤眼化』を解除し、キクとカンタロウは地上へと降りた。2人の右手の甲にあつた国章や右半身の神の印も消えている。カンタロウから離れたソネットは、すぐにダンテの元へと走る。

「ダンテ！」

ソネットの剣幕にさすがのダンテも萎縮した。

「あつ、じつ、じめん母さん……」

「母さんを困らせないで！ どうしてあんな無茶するの！ もしあなたが……私からいなくなつたら……もう私……」

ソネットは強くダンテに抱きしめた。田には涙がたまつている。

「……じめんよ。母さん」

真剣に自分を心配する母に、ダンテはもう一度謝った。キクとカンタロウはお互いの無事を確認していた。

「はいカンタロウ君。この子をおぶつてよ」

キクはノゾミをカンタロウに差し出した。それでもノゾミは起きてこない。小さな寝息をたてている。

「うん？ なんで寝てるんだ？」

「さあね。まつ、起いすのも悪し」

「そうかい。いい寝顔だわな」とカンタロウはノゾミを受け取り、背中に背負つた。

「ヤツホー。大丈夫かい？」

ノゾミをカンタロウに託し、手を振つてキクがソネット達の元へ近づいてきた。ソネットは慌てて涙を拭いた。

「次からあんな無茶しちゃ駄目だぞ？」

キクはダンテに注意した。

「わかった」

ダンテは素直に頷いた。

「……一応お礼は言つておくわ」

低い声でソネットはキクにお礼した。

「いいつてことよ。で、その子とあなたはどんな関係？」

「別にそんなことないでも……」

「僕の母さんだよ」

ダンテが答へてしまつた。「ダンテー?」と答へを済つたソネットが叫んだ。

「ええ? そつなの? ゼンゼン似てないじゃん」

その言葉にソネットはカチンときた。

「まつといでよー。これでも鼻はそっくりだねって言われるんだからー。」

「うー微妙じやん。よくわかんないし」

ソネットとダンテをキクは見比べている。

「よく見なさいよー。まじめりー。」

鼻を突き出す。キクは少し引いた。

「わかったわかった。そつこい」としておへよ。なんで? あの子はあなたの娘?」

今度はノゾミを指した。

「そんなことビリでも……」

「あの子はノゾミ。依頼主から一重に送り届けられたといふと言われてるんだ。『神の血脈』の子」

「へつー?」とキクは驚いた。「ダンテ……」とソネットは頭を抱えた。

「どうした？」

ノゾミを背負つたカンタロウが近づいてくる。ソネットは慌てて誤魔化そうとしたが遅かった。

「その子『神の血脈』を持つてるんだって。気づかなかつた」「……本当か？」

キクの報告に、カンタロウの目が細まる。犯罪の臭いがブンブンするからだ。『神の血脈』に関する事件は特に多い。

「本当よー、つて、あつー！」

言つてしまつた。ソネットは口を抑えたが、遅かった。

「『』の子をどうするつもりだつたんだ？」「あなた達に教える理由はないわ」

これ以上キク達と関わりあいたくないソネットはソッポを向くことにした。

「そうか。俺はカンタロウ。帝国軍第四類所属」

「私はキクだよ。同じく帝国軍第四類所属。よろしく～」

2人はとりあえずソネット達に自己紹介した。

帝国軍第四類。大陸中央を支配する五大帝国の一つ、大帝国が所有する軍隊である。エリートで構成される帝国軍第一類、一般兵で構成される帝国軍第二類、技術兵で構成される帝国軍第三類、そしてマルスオフ、エコーズ等強力な外敵を討伐するために精銳部隊で

構成される帝国軍第四類。定員は50名、全員が十三神の力を発動できる条件、『赤眼化』を持ちその力は第一級魔道師に匹敵する。

「大帝国の軍の人！？ すごい！ だからあんな高度な魔法使えたんだ！ それに帝国軍第四類って死帝って呼ばれてる人達だよね！ ？ カツコいい！」

帝軍は子供に尊敬される職業ランギング上位である。ダンテは興奮して飛び上がった。それに対してもソネットの反応は低い。

「あなたは反応薄いね。証拠見せようか？」  
「別にいいわよ。その右手の甲。盲目の蛇オピオンの国章を見たから」

『盲目の蛇・オピオン』は大帝国の国章だ。特に帝国軍第四類の国章の表現方法は特殊で、赤眼化が完了すると同時に右手の甲に表れる仕組みになっている。国章は卵から盲目の蛇が出てくる姿が描かれており、他の帝国もそれぞれ特殊な国章をもっている。個人を識別するコードも含まれているので、両手がない者は帝国軍第四類になれる資格をなくしてしまうのである。

ソネットがそれを知っているということなので、キクは右手を下げた。

「そう。でつ、君達のお名前は？」  
「あなた達に名乗る必要は……」  
「僕はダンテ。母さんはソネットって名前だよ」

またまた、ダンテは素直に答えてしまった。ソネットはもつ何も言わなかつた。

「ねえねえ！ もう一回『赤眼化』して見せてよー。」  
「駄目駄目。もう疲れちゃった」

「え〜」とダンテは残念そうに頃垂れた。「また今度ね」とキクはフォローした。

「さて。自己紹介も終わつた所で、この子が仮に『神の血脈』をもつた子として、お前達はどうする気だつた？」

カンタロウが問い合わせ始めた。

「それはね……」

「待つてダンテ。私から説明するわ」

ソネットは手を上げてダンテを止めた。

「私達はあそこの旧世界の塔にいたエリニコスつていう宗教団体から依頼を受けたの。その子を護つてほしいってね。ただそれだけよ。深い意味は無いわ。それに犯罪だったとしても、私達はお金さえ貰えればなんだつてやるの。待遇のいい帝軍さんは違うんだから」

ぶつきらぼうこソネットは答えた。

「やけに突つかかるな」とカンタロウが言つと、「今シンが出ております」とキクが返した。

「でつ？ 帝軍さんが何故こんな砂漠にいるのよ？」

今度は逆にソネットがカンタロウ達を問い合わせた。

「それは教えられんよ。何せ機密事項だから……」

「私達はS級犯罪者を追つてたんだよ。エリーユスが基地にしているあの塔にその犯罪者が現れるつてどっかからリークされたの」

「……つておー」と機密事項を言つてしまつたキクにカンタロウが突つ込んだ。

「でも匿名だから信用性はゼロ。そんな情報で人は動かせんということだ、私達2人だけでわざわざこんな大陸西の砂漠まで来たつてわけ」

「S級犯罪者……つて、あの国一つ滅ぼすことができるつていうー。？」

口に手を当てソネットは驚いた。

「まあそれは拡張しすぎだと思つが、それぐらい危険な犯罪者だ」

カンタロウが補足した。

「ねえ母さん。S級犯罪者つて何？」

「人の名を呼ばれない者、皆『獣の名』で呼ばれているわ。犯罪等級最高の犯罪者でその能力は国一つ滅ぼすと言われてこられるよ」「母さんがやつつける人？」

「あれは小物よ。あんな奴等よりよっぽど手強いはずよ。会つたことないけど」

「へー……」と初めて知つた知識にダンテは息を漏らした。

「もしその情報が本当だとしたら……やはりノゾミを……」「狙つてるかもしれないね。もしこの子が本当に『神の血脈』を持つているのなら」

背中でスヤスヤ眠っているノゾミに全員が注目した。

「ノゾミは本当に『神の血脉』を持つてるよ」「だとしたら保護対象だ。この子は俺達が預かり、大帝国へと連れて行く」

平然とカントタロウは言った。

「そんな!? 待ってよ! その子の護衛を依頼されたのは私達よ!  
! 報酬金が……あつ」

「どしたの?」と目を丸くするソネットにキクが訪ねた。

「報酬金……まだ契約が済ませてないわ! 今から行つて契約を!」

まだグラム大将との契約をソネットは済ませていなかつた。契約途中でマルスオフが攻めてきたからだ。時間は元には戻せない。ソネットは焦つた。

「あの塔なら全滅してるよ。エリーウスの人ももう生きていんじゃないかな?」

確かに、塔を見ると黒い煙が上がり、人の気配がしない。しかも人肉を食りに大型のマルスオフがやってきている。兵士の遺体を咥え、巣へと持ち帰るつもりなのである。数時間前までは人の活気に溢れていたのに、今では再び魔獸の住処へと戻つていた。

「確かめなきやわからないじゃない!」

「駄目だ。砂蟻がまだウヨウヨしてるし、人の死体の臭いをかぎつ

けて砂漠のマルスオフが集まっている。俺達の体力もないし危険すぎるわな

「もついいわ！ なら私一人で……」

1人で行こうとするソネットをダンテが止めた。

「母さん。この地図の場所にノゾミを連れて行けば報酬金が貰えるんじゃないかな？」

「えっ！？」とソネットが叫ぶ。ダンテは手に持っていた地図を広げていた。

「こここの町にパンドラって人がいるから。そこにノゾミを連れて行つてくれって髭のおじさんが言ってたよ

「さすが私の息子！ 素晴らしいわ！」

ソネットはまたダンテを抱きしめた。「苦しくよ……母さん」とダンテは呟いた。

「というわけで、お引き取り願おうかしら？ 」の子は私達が無事送り届けますので

ソネットが腰に手を当て言つたが、キクとカンタロウの姿はそこにはなかつた。2人はちやつかりとダンテから地図を見せてもらつていた。

「まうまう。この地図から目的地への道は……ここから南に渡つて、入り江がある港湾都市から船にのつて沿岸航海してこの町に到着すると

赤いバツ印から逆算して地図をなぞつていく。ダンテもカンタロウの指を追つた。

「町から結構離れてるね。山脈を越えた所だな」

「聞いたことのない町だわな。エリニコスは幅広く宣教しているからもしかすると支部があるのかもしれない」

「そんなことより久しづびりに新鮮な海の幸が食べられるな。よっしゃ！ 行くがカンタロウ君！」

キクがはりきつて手を振り上げた。

「大陸中央に住んでいるとなかなか食べられないからな。行きますかね」

カンタロウは冷静に同意した。

「ちょ、ちょっと待つて！ あなた達何言つてるの？」

「君達について行くことに決めただけだよ？」

「どうして！ あなた達には関係ないじゃない！」

ソネットがキク達に抗議した。

「関係なくはない。もし本当にS級犯罪者が『神の血脉』を狙つているのならこの子についていくのが妥当だ。それにお前に守れるのか？ S級犯罪者からこの子達を？ 無事ではすまんわな」  
「そつ、それは……不確定な情報なんでしょう？」

痛い所を突つ込まれ、ソネットはしどろもどろになつた。確かにS級犯罪者の力は未知数で自分一人で『神の血脉』を守れるかと言われば自信がない。

「火のない所に煙はたたないでしょ？ 何、別に私達は何も不利益なことはしないよ。ただこの子が無事エリーコスに届けられるか見届けるだけ。それが終われば任務は終わり。S級犯罪者が現れないと無事証明され、大帝国に帰れるつてわけ。こちらも仕事なんだよ？」

「その割には楽しそうじゃない……」ソネットは小さく抵抗してみせる。それぐらいの抵抗ではキクは動じないので「ふふふ」と逆に余裕を見せられた。

「母さん、僕はいいと思つよ。一緒に来てもうおつよ」

ダンテに頼まれば嫌とは言えない。ソネットは渋々頷いた。

「仕方ないわね……だけどお金は絶対にあげないわよー」

一応自分の利益をソネットは主張した。キクとカンタロウは反論すらしなかった。

「いいよ別に。やつと決まつたらどうあえず風呂と飯だなー。もう金属の上で卵を焼くのも飽きたし」

砂漠の気温は40度を超えていた。今ここに立っているのも辛くなってきた。

「ああ、じぱりくは見たくないわな」

卵を食い飽きたカンタロウは、お天道様を見上げた。

「じゃ カスバルに行くか。レツツゴー！」

拳を空に突き上げ、キクは先頭をきつて歩き始める。その後ろをダンテとカンタロウがついて行く。

「明日ギルドへ行つて、スナ鳥を借りて砂漠を出るか

すでにカンタロウは次の段取りを考えていた。ソネットは1人の息をついた。

「は～……ほんと、ビ�なるのかしら～。」

カンタロウの背中でノゾミは可愛らしげな寝息を続けていた。

## 1・9 S級犯罪者 イナゴとアリグモ

カスパルに帰る前に、ソネット達はスナ鳥を手に入れることにした。幸い砂蟻達に押しつぶされなかつた2羽のスナ鳥が生きていた。カンタロウとキクがもつていた食料を分け与えることで、再びその背中を許してもらうことができた。ダンテとノゾミ、ソネットが1羽に、もう1羽にキクとカンタロウが乗り込んだ。

スナ鳥を手に入れた後は、ダンテのロングソードの回収だった。エコーズを倒したその剣は砂の海に突き刺さっている。エコーズの死体はなかつたが、恐らく砂蟻達によつて巣へと持ち帰られたのだろうと推測され、そのままカスパルへと向かうこととなつた。

旧世界の塔の屋上ではグラム大将と部下が8人ほど生き残つていた。塔の下ではマルスオフが、人の臭いをかぎつけ集まつてきていた。新鮮な肉に我慢ができず、マルスオフは吠えたが、グラム大将は無視していた。

グラムが双眼鏡を置いた。

「よしつ！ 今より女神奪回を開始する！」  
「はっ！」

グラムの一聲に、8人の部下が敬礼した。腰にはロングソード、肩にはサブマシンガンがつけられている。この8人以外の部下はすでにマルスオフの餌となつっていた。

「目標は女神である少女！ その他ハンターである女1人、その子供1人、魔術師の男1人、女1人である！ 女神さえ回収できれば他の者の命は保証しなくていい！ 奴等はカスパルへと向かつている！ 恐らく今日の宿をとるのだろう！ 今夜奇襲をかける！」  
「了解しました！」

こんな状況でも部下の士気はまつたく落ちていなかつた。皆信じるものがあるからだ。『女神』とはそれほどまでに人に強靭な精神力を与えていた。

「飛行竜を用意しろ！ 女神奪回後ただちにハオスへ向かう！」  
「失礼します。ハンターの命も奪つてよろしいのですか？」

1人の兵士が敬礼しつつも前に出た。

「女神の世話役が必要だ。言つことを聞かないようであれば子供を人質にとれ。それでも駄目なら殺せ」

「了解しました」

「ではすぐ準備にとりかかれ！ 我等は女神に選ばれた戦士である！ 数は問題ではない！ 我等には女神のご加護があるので！！」

「女神の祝福を！」

兵士達はさつそく飛行竜の準備にとりかかつた。グラムは屋上から砂漠の果てを見据えた。

「……待つておれ。野蛮人などに女神を渡してなるものか……うん？」

手元で何かが動いた。

茶色の虫だ。

不快な羽音をさせている。

この虫の名前を、グラムはよく知つていた。

「 イナゴ？」

「 ジャヤあー？」

突然部下の悲鳴が塔の屋上に響いた。何事かとグラムは振り向いた。

「う、うわああああ……」「ぐふつ！？」  
「な、なんだ！？」  
「ひ、ひいいい！」「ぐえつ！？」

一瞬で5人の部下が血まみれとなり倒れている。剣に太陽の光が反射し、グラムはその者の顔をよく見ることができなかつた。だが、銀縁の眼鏡、黒の布地の服に、口は黒の布で隠されていることがわかつた。部下がもつてているサブマシンガンが火を噴く。

「きつ、貴様！ 何者……まさか……」

グラムの顔に絶望が走つた。「ぐわつ！」とサブマシンガンを連射していた部下の腕が空中へ飛ぶ。ロングソードを振り上げた部下の胸が切り裂かれる。最後の部下が目の前で倒れた時、ようやくその男の名前を思い出すことができた。

「S級犯罪者 イナゴー！」

背中に隠してあつたハンドガンを男に向ける。だが、その弾が発射される前に剣がグラムの胸を貫いた。

「ぐつ！？」

力が抜け、地面へ倒れる。口の中に赤い血が広がる。瞬き一つせ

ず、見下ろす男に向かつてグラムは血で染まつた歯を食いしばつた。

「……おのれ……貴様等なんぞに……女神を……」

それがグラムの最後の言葉となつた。体中から力が抜け、心臓は活動を停止した。イナゴと呼ばれた男は長剣を肩に乗せた。

「ふん……以外に呆気ないな？ エリニユスの軍隊も」「殺す必要はなかつたんじゃないのかな？ イナゴ」

イナゴの後ろでまた別の男の声がした。全身を小汚いの布で包んでいる。頭の布がはだけ、無感情な表情を出す。普通の人間とは違ひ、特異なのは頭頂部にはえた2本の角だ。イナゴの銀縁の眼鏡が太陽光線に反射する。

「姿を消して高みの見物をしている奴に言われたくはないな。アリグモ。シナリオではコイツ等はマルスオフではなく俺達に全滅させられるはずだつた。予定が狂つただけさ」

アリグモと呼ばれた男はイナゴの目を覗いた。

「……僕はトドメをさす必要性はなかつたんじゃないかと言つてい るんだが？」

静かな反抗だ。イナゴは鼻で笑つた。

「ならばコイツ等がさつき言つた作戦を実行すればどうなる？ ど のみち誰かが死ぬぞ？ それに俺の凶行を止めないお前は罪にはな らないのか？」

アリグモは答えられない。静かに両手を閉じる。

「……僕は争いが嫌いなだけさ」

「まあいいさ。今はお前と喧嘩する気などない。女神がハンターと出て行く所まではシナリオ通りだ。帝軍が入ってきたのはやっかいだが問題はない」

すでに2人は事の顛末を見ていた。エコードスが砂蠍を探り、旧世界の塔を襲い、女神がハンターに連れ出され、帝軍に助けられた事もすべて。アリグモはソネット達が向かつた方角に視線を合わせた。

「あのハンター……大丈夫かな？ 無事女神を届けることができるだろうか？」

「できるさ。あの地図の道通り行けば問題は無い。報酬金だつて高いから女神を丁重に扱うだろ？ 行路からしてエコードスと出会う可能性だつて低い」

地図の内容まで把握されている。すでにソネット達はS級犯罪者達の手の上にいるのだ。

イナゴが邪魔な死体を足で蹴つた。それが死者を冒涜する行為に見えたのだろう。アリグモの顔が一瞬歪んだ。

「不満そうだな？ 僕も殺しは好きじゃない。ただ少女を神だと崇めてこんな塔に閉じ込めるコイツ等を好きになれそうになかっただけさ」

それは本音だった。アリグモはイナゴの真意に驚き、それが本當かどうか確かめようと体の動搖に注視した。しかし、イナゴは嘘である証拠を微塵も感じさせなかつた。それでアリグモはふと、イナゴが犯したミスを思い出した。

「その性格が災いして大帝国に僕達がここに来る計画がバレた」

「そうだな。だが問題はない。あの女も少しは反省しだろう」

「君は脅迫が得意だからね。女神の実の母親は突然の受胎告知に発狂したというのに。さて、この飛行竜を使わせてもらおうか」

飛行竜はさつきの戦闘でかなり興奮していた。屋上に繋いでいた鎖がギシギシと叫ぶ。その興奮を、アリグモはすぐにおさめていた。飛行竜がアリグモを上位階層の者と認めたからだ。時間にして1分はかかっていない。2人分あればいいので、あとの飛行竜は空に逃がすことにした。

「イナゴ」

準備ができたのでアリグモはイナゴを呼んだ。イナゴは塔の屋上から女神が向かった先をまだ眺めていた。

「やはり気に入らないな。あんな幼い子供を……切らなければならぬのは」

アリグモは細い目を、イナゴの背中に向けていた。

「ア……アア……」

砂漠の砂が動く。それは砂をかきわけながら前へ、前へと進んでいた。しかしキノコ岩の前で力尽き、手の動きを止めた。空を飛ぶ

鳥達が、それの生命が尽きるのを今か今かと待つている。

それは呻いた。もうすぐ自分の寿命が尽きようとしていた。ダンテの放った剣により胸を貫かれ、何とか剣を抜き逃げ出したがここまでだ。だが自分の役割は十分果たした。あとは願いを叶えて貢うだけだった。

「よつ

軽めの挨拶をされた。それが見上げると誰かが立っていた。キノコ岩がちょうど太陽の影になつてゐる。それに声をかけたのは狐目の男、ヤンだった。

「「」苦労さん。お前のおかげで女神の力が見れた。ありや本物だな。あのハンター達が運が良かつたのが予定外だったが問題はない」

それの……もうすぐ命の灯火が消えかけそくなつてゐるエコーズと同等の赤い瞳をヤンは持つていた。細目ゆえに誰も気づかなかつたのだ。血よりも紅く、深く濃いその目は死にかけてゐるエコーズに最後の希望を与えた。エコーズの手が救いを求めるようにヤンに向かつて上げられる。

「すぐに楽にしてあげるよ　帰るといい。お疲れさん」

ヤンが指を鳴らすとエコーズがいる地面に魔法陣が現れた。円形魔法陣だ。円は魔力を循環させ、エコーズの体を優しい光で包んだ。エコーズの両目が静かに閉じられていく。そのまま光の結晶となり「」の世界から消えていった。

「さてと……上も片付いたようだな。まさかイナゴが来るとは思わなかつたニヤ。あんなのと会つたら命がいくつあっても足りないし

ね

ヤンはすぐに岩の影に隠れた。

S級犯罪者イナゴ。『使役使い』とも呼ばれている。エコーズやマルスオフとは違った別の異世界の魔物を操る人間。例え『24エコーズ』とて、『使役使い』は非常にやっかいな存在だ。数が少ないのが唯一の救いである。

飛行竜が旧世界の塔から飛び立つた。方向はソネットとは逆の方向へ向かっている。ヤンは首を傾げた。

「うん？ 奴等……女神を追いかけないのか？ 『神の血脈』を手に入れることができないということか？」

岩陰に隠れながら考えてみたが、イナゴの行動がわからない。もしかすると『神の血脈』に気づいていないのかも知れないとヤンは考えた。

「それならそれで都合がいい さつそくアイツ等を呼んで、女神をこの手に入れることとするかね」

ヤンの尖った八重歯が「クククッ……」と笑った。

『赤い瞳の少女…完』

その『醜悪ヤ』は『魔神』ですら恐れおののく

深遠な森で狐目の男、ヤンに出会ったソネット達。しかし、ヤンの正体はエコーズだった！ 3人の強力な『24エコーズ』と異様なマルスオフ達の包囲網に次第にソネットは精神的、肉体的にも追い詰められていく。森の端にある古城で身を隠し、挽回のチャンスを待つ5人。だが、そこで待っていたのは『破滅の存在』だった。

『ダンテ、オママ、ゴトじょつ お肉はたべたるあるから

『僕を 照らさないでくれ』

『第一章・まがいものの女神』

男が全力で走っていた。

樹木がまばらな疎林で腰に刀をつけ、東洋風の服を着た男が木を避けつつも素早く動く。木々の間から射し込む太陽が、男に道を指示示しているようだ。激しい呼吸が、土を蹴る音が、薄い森林に響く。

「グフツ！」

男の後ろで獣が鳴いた。せっかく見つけた獲物だ。獣の足は地面を削り、土を飛ばす。丸く曲がった2本の立派な角が口からはえ、茶色い毛に4本足で突っ込むように突進する。イノシシのような姿だが、両目の赤い目はマルスオフの特徴の一つだ。体格は男の体の2倍はある大きさである。

だが、獣は気づいていなかった。あまりの興奮に男の逃げ方に違和感を感じることができなかつたのだ。脳内の戦闘のホルモンが、獣の野生の勘を狂わせていた。

「キク！ 来たぞ！」

男が叫んだ。獣の耳には入らない。そのまま男の体に角を向ける。

「よつしゃ！ 任せろ！」

突然木々の間から太い縄が現れた。獣の視界に縄が入ったが、遅かつた。すでに足に縄が絡みつき、獣を太い横模様の木の幹に激突させた。

「ソネット！」

「いただきます！」

大剣が獣の体に突き刺さった。大きな悲鳴が木を震撼させる。およそ5秒で獣は生命の火を目から失い、力がなくなつた。

ソネットが獣から大剣を抜いた。ヴィーキング・ソードという主に切断を目的とした剣だ。剣の幅が広く、厚い。サイズはもちろんソネットに合わせて作られている。大型のマルスオフに対応するためにソネットが特注した品物である。

「ふう……これで飯が手に入つたわ」

獣の血で剣は赤く濡れていた。ソネットはその太い剣を片手で振る。

「よかつたよかつた。さすがハンター。剣の扱い方うまいね。一発で仕留めちゃった」

木に縄を縛り付け、罠を仕掛けていたキクが木陰から出でてきた。久しぶりの動物性タンパク質に舌なめずりをしている。

「まあよかつたんだらうが……」の役変わってくれないか?」

獣をおびき出す役のカンタロウがゼイゼイと息を切らしている。  
その懇願は女性2人の耳に届かず、見事にまでスルーされた。

「」苦労カンタロウ君。さっそくダンテ君の所に行こう!」

ダンテとノゾミは結界がはつてある休憩場所で3人を待っていた。

「」の体では……3人分つて所ね。もつといないかしら?」

ソネットが獣の遺体に触れた。

「おいおい……まだやるのか? うん!-?」

「どうした? カンタロウ君」

カンタロウの言葉が詰まった。口をつむぎ、指を指している。キクが振り向くと、倒されたマルスオフとそつくりな獣が2体、興奮し後ろ足で土を蹴っている。体格は小さく、もしかすると獣の子供かもしぬれない。ソネットもその2体の獣に気づいた。

「ふふふ……餌が大量にかかつたわ」

獣以上にソネットが興奮していた。

ダンテはロングソードを振っていた。母から教わった型を身につ

けているのだ。普通ロングソードの長さはショートソードよりも長く作られているが、ダンテの体のサイズではギリギリの範囲内である。ただ剣は分厚く、固い。マルスオフと十分戦える。ダンテの手が握り部分からギシギシと唸っていた。

「ふう……

汗を腕でふく。本来はソネットとダンテがコンビを組んで餌を探しにいくのだが、キクとカンタロウが仲間になってからダンテは留守番役になってしまっていた。ノゾミの護衛もあるし婆といえど妥当な選択だ。

そもそもソネット達が帰つてくるので鍋の準備をしなければならない。ダンテは服と鎧が置いてある木へと向かつた。汗が流れるダンテの肉体は、同年齢の子供よりもたくましく発達している。だが、傭兵や戦闘を主にする職業ではダンテぐらいの体格の子供は珍しくはなかつた。

「うん？ 歌だ……」

静かな歌声が聞こえる。寂しげなオルゴールのメロディーのようにな、細く和らげで儂い。ダンテは上半身の服を着ないまま歌声の元へと足を歩めていた。

休憩場所でノゾミが歌つっていた。ノゾミの周りには小動物が集まつていた。小鳥や兔、リスなど草食系の動物が多い。肉食系の動物である狐や狸、狼もたまにいるが、争いは絶対に起こらない。不思議な能力だとダンテは感心していた。

「あつ」

ノゾミがダンテに気づいた。同時に、ノゾミに集まつていた小動

物達が離散した。

「あつ、じめん。邪魔しちやつたね」

まじまじとダンテの体を見ていたノゾミは、気持ちを落ち着かせるために息を吐いた。

「いいえ」

一言、そう言つとノゾミは立ち上がった。

「いい歌だね。誰の歌？」

「母です」

「へ～お母さんどこにいるの？」

「ベルドという村だと思います」

会話が続かない。いつもノゾミは質問を単語で返す。出合つてからもう3日はたつが、まったく変わらないノゾミの態度に、ダンテもすっかり慣れていた。

「今は何をしているの？」

「たぶん　もうこません」

「そうなの？」

「はい」

ノゾミは視線をダンテに合わせない。頬が赤くなっている。

「会いにはいかないの？」

「もう会えませんから」

それだけ言つと、ノゾミはまたと休憩場所に戻つていった。

「……そろそろ鍋の準備しようか」

ダンテは服と鎧を着に、置き場所に向かつた。  
鎧を着たダンテは水を川からくんできた。ノゾミは鍋を準備している。

「ただいまダンテ。 今日も大量よ！」

元気よくソネットが紙に包まれた獣の肉を持つてきた。手を大きく振つてゐる。その後ろではキクとカンタロウが同じ種類の獣の肉を持つてゐる。大きさはソネットが持つてゐる肉が一番大きい。残りの部分はマルスオフ達が血の臭いで集まつてくるので、遠くに捨てられていた。

ダンテは血まみれの獣の肉に、ノゾミがどう反応するか心配だつたが、以外に平氣なようだ。表情に怯えもなく、まったく変わらない。動物に好かれるということと、動物を食べるということはノゾミの中では別物なのだろう。

「3匹も捕る必要があつたのか？」

「育ち盛りなんだからいいのよ」

ニッヒソネットは白い歯をカンタロウに見せた。

ソネットの頬に獣の血がこびりついてゐる。こうして見ると本当に狩人の女みたいだ。逃げ役だったカンタロウの体にはまったく血がついていない。

「そんなことより血で体汚れちゃつた。私、川浴びに行きたいぞ」

キクの体にはそんなに血はついていない。どちらかといつと汗まみれな体が嫌なようだ。

「料理はどうするんだ?」

「カンタロウ君やつてよ。今日料理当番じゃん」

「そんなこと決めてなかつたわな」

あまりにも子供っぽい嘘だ。キクはいつもやつである。カンタロウはもうすっかり慣れていた。

「いいじゃん。じゃ、任すからな。ソネット、川浴びに行こうよ」

「やれやれ」とカンタロウは料理役を暗黙で引き受けた。人のいい性格がでたようだ。キクから獣の肉を受け取る。

「嫌よ。私は1人に入るわ」

「そんないい体してくるくせに?」

「いい体つてどういう意味よ? 私は1人で入りに行きます」

ソネットは頑として一緒に川浴びすることを拒否している。

「ならせめてキクの近くの川にするほうがいいわな。ここは神脈があまり通っていないみたいだからマルスオフが多い。丸腰で川にはつかれんだろう」

剣も持たずにもマルスオフに襲われれば一巻の終わりである。ソネットもそこはわかっているようだ。

「そうだよ。だから2人の方がいいじゃん」

「……まあそれなら……でも私は離れて入るから! あと裸見に来

ないでよー。」

「それを女の私に言うの？ じゃ、ノゾミもついでに連れて行くことにしてよ！」

どうしても裸を分かち合いたいのか今度はノゾミが皿をつけられた。

「キク、私は特に汚れていません」

ノゾミは首を横に振った。

「いいからいいから。臭い女は男に嫌われるぞ？」

その言葉に、ノゾミの赤い瞳がダンテの方を向いた。ダンテは「？」と顔をしかめた。

「わかりました。行きましょう」

あつさりと承諾されてしまった。あまりにも呆気なかつたため、強制的につれていこうとするキクの怪しい手の動きが止まつた。「何をする気だつたの？」とソネットは目を細める。

「じゃあダンテと俺で料理を作つとくか？」

「そうだね、わかつた」

ダンテは素直に頷く。ソネットから大きな肉を両手で受け取つた。

「それじゃ、女三人川浴びに行きますか！」

拳を天高く振り上げ、キクは先頭を歩き出した。その後ろにノゾ

ミがついていく。

「お皿葉に甘えるわ。ちなみにカンタロウ。ダンテに手を出さないでよー！」

ビシッとソネットがカンタロウを指摘した。

「出すわけないわな」

「母さん……」

恥ずかしい母の行動にダンテは顔から火が噴き出しそうだった。

「わあ……すゞく綺麗」

ソネットが感嘆の声を上げた。

その滝は落差15メートル、標高200メートル以上だろうか。白水が直瀑式に流れしており、水が白く濁っている。落差が低いだけに迫力はたいしたことなく、静かに滝は流れているが、その姿はとても優美で美しい。川近くに散りばめられた、真っ白の石がさらに滝を際立たせている。

ソネットはさつそく靴を脱ぐと白い石に素足を降ろした。つるりとした感触が足から伝わってくる。ゾクゾクとソネットは体を震わせた。

「冷たいです」

ノゾミが白水に手をついた。

「味は……普通の水だな。飲めるぞ」

キクはぺろりと水をつけた指を舐めた。

「ダンテも連れてくればよかつたわ  
「いつも一緒に入ってるの？」

「そんなわけないじゃない。交代で入ってるわよ  
「へゝ禁断の背徳関係を期待してたのに」

「ウシシシシシ……」とキクが密かに笑った。

「何言ひてるの？」

ソネットは本当にキクが言つてゐる意味がわからなによつた。首を傾げてゐる。キクは「なんでもないつて」とまだニヤニヤしていつた。

「そひ、マルスオフの気配もしなこしさつをひっちゃおひ

さつやくソネットは布を広げると、木の枝に結わえつけた。キクとノゾミに自分の裸を見せないためだ。黒い影は見えるがそれは仕方がないと諦めた。

「いひつー、ここが境界線だからー、ここから先は入つてきちゃだめよー！」

滝側を自分のテリトリーだと主張すると首を引っ込める。

「了解了解。滝壺には氣をつかうよ」

すでに鎧を脱ぎ捨てているキクが適当に答えた。

「キク、どうしてソネットは一緒に入ることを嫌がるのでしょうか？」

ノゾミはまだ服を脱いでいない。軽量型の鎧を脱いだだけだ。修道服のスカートはサイズが合っていないので本当に短い。一応男子がいるのによく気にならないなとキクは思った。

「お尻にアザがあるんじゃないの？」

「何か言った！」

「なんでも。せつ、ノゾミも脱ぎなよ」

一枚布で仕切っているだけなのでお互いの声はよく聞こえていた。

「…………」

ノゾミは服を脱ぐことを躊躇している。

「何恥ずかしがってるの？ ほらほら、脱がせてあげようか？」

「いいです。自分で脱ぎます」

意を決してノゾミは修道服を脱いだ。エリコスのマークが、胸に糸で縫われていた。

キクは服を脱ぎ捨てたとこにつかった。外の外気温と水の温度はちょうどよく、全身の神経を缓めていく。筋肉が柔らかくなり、気持ちよさが頭を駆け巡った。

「あ～気持ちいい

白い砂利が足のツボを刺激する。ちょうど大木があるので太陽の光も避けられた。布の向こうでソネットの裸体の影が動く。川につかた瞬間、ソネットの息が漏れた。

「いい天気だねえ」

ふと気づけば、ノゾミもすでに川につかっていた。ただ、キクとは距離を離しているようだ。バレッタを外し、肩まである黒髪の先が水に泳ぐ。鎧を着ていたのでわからなかつたが、本当に細く華奢で色白い。細い指が、艶のある黒髪を手櫛でといた。成長したらこの子は結構な美人になるなどキクは思った。

「ノゾミ、こっち来なよ」

「……」

キクの言葉にノゾミはちゃんと反応している。恥ずかしそうに両手を胸に置き、どうしようか迷っているようだ。恐らく、他人と一緒に水浴びなどしたことがないのだろう。

「何恥ずかしがつてるの？」

キクの健康的な小麦色の腕がノゾミの体を抱きしめた。「あつ……」とノゾミは声を上げた。体温が急上昇している。

「ふふ～ん。いい体してるねえ。最近の子は発育がいいわ

「うう……」と自分の体を撫で回されても、ノゾミは小さく声を上げるだけで抵抗はしない。キクは幼児体型の体を押しつけ、さらになゾミの体を弄くり回した。

「さあやー！」

いきなり川の水圧がキクを弾き飛ばした。「ドボンー」と川にはまる。

「あんた！ ノゾミに向してるのー！」

ソネットからの攻撃のようだ。布から顔だけ見せてくる。

「何にもしてないよ。耳がいいな

キクはブルブルと髪を振った。

ソネットに警戒されたキクはしばらく川の流れに身を任せ、空を見上げることにした。布の影からソネットの鼻歌が聞こえる。ノゾミは岩に頭を乗せ、水辺で川遊びをする小鳥達を見つめていた。尾が鮮やかな瑠璃色の鳥だ。

「こんなのは初めてです」

「川浴びが？」

「いえ、同姓と川浴びすることがです」

瑠璃色の小鳥がノゾミの頭に止まった。すぐに逃げ出すかと思われたが、毛繕いをしている。キクには絶対に近づいてこないのに何故かノゾミだけは安心できるよつだ。

キクは目をパチクリさせた。

「すごいね君。その鳥は警戒心が強すぎて絶対に人には近寄つてこないのに」

「そうですか？」

頭を動かしても鳥は逃げない。むしろノゾミの頭に腰を降ろしている。

「キクはありませんか？」

「ないない。私の所に来たら捕まえて食べられると思ってるからね」

「そうですか」

ノゾミの表情は変わらない。年齢の割にはやはり表情が乏しい気がする。

「ねえ、ノゾミ」

「はい」

「親は、いるの？」

言葉に間が入った。聞きたくない事だからだ。

「いました」

過去形だ。ソネットも聴いているのか、鼻歌がやんだ。

「血は繋がつていませんが育ての母はいました。歌が大好きでよく私に聞かせてくれました」

珍しくノゾミは饒舌だ。これなら色々な疑問点に答えてくれるかもしれないと思つた。

「ヒリニコスの人？」

「はい」

「どこにいたの？」

「ベルドといつ村ですか」

「小さな村？」

「はい」

矢の如く質問しなければ会話が途切れてしまう。キクは質問を続けた。

「その村はいまでもあるの？」

「たぶん」

「たぶん？」

「もう村があるかどうか。私にはわかりません

淡々としている。感情を押し殺すこともない。微動だにもしない。

「……誰かに襲われたの？」

「私は村が襲われる前に逃げ出しました」

「そしてあの塔に行つたのね？」

「はい」

経緯はわかった。ノゾミはベルドといつ村で生まれ、そこでエリニコスの信者と共に育つた。しかし、女神を狙う何者かに村が襲われ、今はもう存在しないかも知れない。エリニコスの軍隊が動いたぐらいだ、相当な敵が現れたのだろう。

その後、旧世界の塔に閉じ込められ、半年近くすごした。ノゾミと同い年の年齢の子ならば精神的にまいるかもしれない出来事だ。それでノゾミは無感情になつたのかも知れない。

「そつか……」

キクは質問を止めた。もう十分だろう。「へクチツ！」とソネツ

トが小さくシャミした。我慢していたのが出たのだ。

「ねえ。あなたの本物のお母さん……」

瑠璃色の鳥が空へと羽ばたいた。ノゾミはキクの質問に答えなかつた。ただ水辺で遊ぶ鳥を……いや、虚空を見つめていただけかもしれない。

「うん。じめん。なんでもない」

白い川の流れは絶えることなく3人の体をすり抜けていった。

しばらくしてソネット、キク、ノゾミの3人は水浴びを終え、川から出た。着替えもすまし、あとはダンテとカンタロウの元へと帰るだけなのだが、ソネットが洗い物があるからと言って2人を待たせていた。

「ふん ふふん」

上機嫌で洗い物をするソネット。滝の細やかな飛沫が肌に当たり気持ちがいい。鳥が水浴びをし、小さな羽をパタパタと水辺で飛び跳ねる。下流では狐の親子だろうか、人間に警戒しつつ水を飲みに山から出てきていた。すでに太陽はピークへと達していた。キクのお腹がそれに合わせて鳴いている。

「ソネットー、まだあー？」

「あとちょっとよ。待つて」

キクは櫛で乾いた髪をといていた。

鎧を着終わりいつでも帰れるキクを尻目に、ソネットはマイペースに洗い物を続けている。「ぶうー」と子供のように拗ねるキクに苦笑しながら。

ノゾミは自分の傍へとよつてくる小鳥達と遊んでいた。人差し指を出せば今度は腹と腰が黄色い小鳥がとまる。まるでノゾミに愛を告白するかのように「チチチツ、チチチツ」と歌を歌う。無表情なノゾミが一瞬柔らかな顔になった。キクがそれに気づき近づくと小鳥は逃げてしまった。

「あつ……」

「あつ、『ごめん』」

「いえ」

また無表情に戻った。キクは残念がった。

「ねえ、もう一度その田を見せてよ」

ノゾミに頼む。3日前カスバルの宿で詳しく見たが、もう一度ノゾミの瞳の烙印を調べておきたいと思った。カンタロウが手帳にきちんと書いているが、生と紙とではやはり印象が違う。

「はい」

ノゾミは素直に烙印を見せてくれた。最初は警戒していたが、ダンテが「信用していいよ」と言ってくれた時からノゾミはキク達を信用しているようだ。すでにノゾミの中で本人は気づいていないが、ダンテの存在が大きくなりつつあった。

キクはノゾミの頬に両手を触れると、その瞳を覗いた。

不思議な瞳。

キクはそう思った。今から100年も前、『瓦礫の塔』と呼ばれる地図でいえば海の中心に小さな島があつた。そこには『十二神』が住み、『生命の樹』と呼ばれる大木があつた。そこから人類は誕生し、世界へと散つていったと言われている。

だが、神々は自らの欲望のために争い、その肉体を滅ぼし『力のみの存在』へと変わつていった。最後の神『ファスト』が『力のみの存在』となつたと確認できたのは、『生命の樹』がある『瓦礫

の塔』が地図から消滅したからだ。島はいつの間にか地図から消え、海の藻屑へとなっていた。

その時から『神の血脉』はすべてその力を失った。最初『神の血脉』とは『赤い瞳』を持つ者のことだった。そう、『烙印』はなかつたのだ。血のよう真紅の瞳を持つ者は、普通の人間の瞳へと戾り、『赤い瞳』を持つ『神の血脉』は絶滅したと発表された。帝国のシナリオではそうだった。しかし、ここに『赤い瞳』と『烙印』を持つ少女がいる。

今でこそ高位魔術である『赤眼化』は一般化されているが、もしかすると100年以前の『神の血脉』とは、『赤眼化』できる人間だつたのではないかという説が今最も有力だ。つまり『神の血脉』でもなんでもないということだ。『ファスト』が『力のみの存在』となつた影響で、『赤眼化』の持続時間が単に短くなつたのではないかという学者もいる。

様々な憶測が飛び交い、人の想像は盲信へと膨らんでいく。だけど真実はとても単純な理由なのだ。その真実を飛び越えて、絵本の世界からノゾミが出現してしまつた。

もしかすると、ノゾミは本当に『神の血脉』の子かも。

キクの考えが正しいのなら、それこそ歴史が変わる大事件だ。エリーユスが丁重に保護するのもわかる。解剖好きの賢帝国の教授に知られればどこまでだつて追いかけられる。今後この子の人生はとても厳しいものになるだろう。

だけどたぶん……この子は……。

キクの顔に影が射した。真実は単純だが、とても残酷だ。ノゾミに対する暗い現実を考えずにはいられない。

「よしひと。結構汚れが落ちたわ。それじゃ、行きましょ」

暗澹な気持ちを払拭するかのよつた、明るく元気なソネットの声が、キクとノゾミの耳に届いた。

カンタロウとダンテは料理を作りながら、ソネット達を待つていた。

薄い森なので森の香りの元となる揮発性成分も少ない。降水量の少なさが疎林を進行させていったのだろう。木の影も少なく、太陽の光が槍のように射し込む。木の木陰で作業していても、草に光が反射した。

「やつぱつ多いな。鍋が脂っこい」

鍋をかき混ぜるカンタロウが愚痴つた。肉が鍋を埋め尽くしている。熱い火が水をよつやく沸騰させた。

「かとこつてほつとけばすぐこ腐るしね」

鍋の中で肉は脂ぎつており、とても朝食にはできない。胃にもたれるのは明らかだ。

「こなにお前は食うのか?」

「つぶさ。よく食るのは母さん」

「……よく太らんわな」

「これだけの量を食べてあの体型を維持できているのである。貴族の娘が見たら嫉妬しそうだ。体の太さは富の象徴だが、動きが鈍いという悪い印象がある。

「まあ乾燥スープはたくさんあるから。これで誤魔化せるよ  
「塩もいれとか。香辛料はあるのか?」

「ないよ。高いもん」

「そりゃそうだわな」

一般人では、なかなか香辛料は手に入れられない。値段が高価なのだ。ダンテは鍋に手をつけ味見した。

「うん。こんな感じ」

カンタロウも味見してみた。

「ほつほつ。なかなかおいしいわな

「この肉がいいんだよ」

「マルスオフは危険だが食料にはもってこいだわな。マルスオフを捕らえて食料にする仕事もあるんだぜ」

「へ~」

「俺も何日か働いたことがある。けつこう給料はいいぞ」

「みたいだね。母さんも働いてた」

どうやらソネットも経験があるようだ。カンタロウは感心した。

「なんでもやつてるな。お前の母ちゃんは」

「お金になればなんでもやるよ。僕も手伝つてる」

「そつか。まつ、こんな時代だ。生きるのに四の五の言つてゐる場合じゃないわな」

ダンテは両目を伏せた。

「……でも母さんは僕に危険な仕事はさせたくないみたいなんだ」

「そりやそうさ。大事な息子だ」

「僕には関係ないよ。母さんを手伝いたいんだ」

その年で立派な事を言つ。だが、この時代では珍しくない。

「うん。ならもっと剣の腕を磨くんだな。いつかお前が母を養う時  
が必ずくる。人は成長する。そして必ず年老いて死ぬ。それはすべての人に与えられた試練だ」

「試練……か。ねえカンタロウさん。赤眼化してみせてよー。」

急にダンテが高揚して言つた。よほど『赤眼化』が見たいようだ。  
そういえば初めてカンタロウと砂漠で出会つた時もダンテは『赤眼化』を見たがつていた。

「母ちゃんから見せてもらつたことはないのか?」

ソネットは『赤眼化』で見るはずだ。カンタロウはそうソネット  
から聞いた。

「見たことはあるけど僕が見せてつて言つても見せてくれないんだ」

ダンテにも理由はわからない。『赤眼化』することで何か危険が  
及ぶものでもない。カンタロウは首を捻つた。

「そうか? 理由はわからんが……まあいいさ」

暇つぶしにカンタロウはダンテに自分の赤眼化を見せてやることにした。息を吸うと体内を循環する魔力を高める。神脈を感じ、赤眼化を発動させる。カンタロウの右半身にロードの印が現れる。

「あれ？ 目が赤くならないよ？」

「まだ『起動状態』だからさ。この右目から右の足の爪先まで『ロードの印』と呼ばれる紋様ができる。次に右目の下に文字が浮かぶ、俺の文字は『テト』と呼ばれるものだ。この文字ができ『赤眼化』は完了する」

カンタロウの右目の下にテトの文字が現れた。と、同時に両目が赤くなり、赤眼化は完了した。そこまでの時間はおよそ10秒。神の印である紋様は、戦闘部族が戦争前に顔や目に化粧している姿と似ている。魔力がその紋様を伝っているのか、赤く光り、線を循環しているようだ。この姿から見てもわかるように、赤眼化した人間はかなり目立つ。

「うわあー！」

ダンテは飛び上がつて喜んだ。

「そんなに珍しいもんじやないわな。ちなみにこの右手の甲にできたのは盲田の蛇『オピオン』。大帝国の国章だ。帝国軍第四類は皆『赤眼化』と同時にこの国章が出てくる仕組みになっている」

カンタロウは右手の甲に浮かび上がつた国章をダンテに見せた。

「なんで？」

「高位魔術の発動条件を兼ね備えている証拠としてさ。帝国軍から外された者はこの国章を消される」

「かつこいい！」

「そつ、そつか？」

少し照れる。赤眼化すれば人の反応は2つに分かれる。1つはダンテのように喜び、もう一つは気味悪がられるのだ。やはり前者は男の子が多い。

「その文字は人によつて違うの？」

テトの文字が気になるようだ。

「違うわな。個人によつて文字が違う理由はわかつていない」

「キクさんも違うよね？」

ダンテは砂漠の攻防でズバ抜けた視力を發揮していた。そのためキクの文字もしっかりと見えていた。

「よく知つてるな？　ああ、確かに違つていたわな。……まあ少し変わつてるが」

「どうしたの？」

「うん……まあなんでもないわな」

言ひずらうにしている。その態度はますますダンテの好奇心を刺激した。

「ええつー？　気になるよ！　教えてよー！」

「ねえねえ！」とあまりにダンテがせがむので、カンタロウは折れた。

「しょうがない。教えるけど母ちゃんには内緒だわな?」「

「わかつた! 約束する!」

「よし。男と男の約束だ」

「うん」

カンタロウとダンテは拳を合わせた。

「キクの文字は『テフア』。この文字を持つ者はキクしか確認され  
ていない」

「どうして?」

「キク以外いないからわ。俺の文字『テト』は結構持っている者が  
いるんだが、キクの文字を持つ者はまだ発見されていない。だから  
珍しいんだ」

「ふ~ん……」ビビリしてかダンテは考へている。以外に思量深  
いなどカンタロウは思った。

「お前の母ちゃんはどんな文字なんだ?」

カンタロウはふと、ソネットについて聞いてみた。

「わかんない」

ダンテは首を振る。じつやら赤眼化の文字についての知識がない  
ようだ。「それなら……」とカンタロウは木の枝を見つけてダンテ  
に渡した。

「文字の形は覚えているか?」「  
覚えてるよ」

ダンテはやりとりと地面に形を描き始めた。意外と絵心はある。記憶もはっきりしているようだ。

「こんな形」

「……これは」

言葉が詰まつた。その文字にカンタロウは見覚えがある。

「本当にこんな形なのか?」

「間違いないよ?」

「……」

黙り込み思考している。カンタロウの表情は真剣そのものだ。ダンテは何故態度が変わったのか理由がわからなかつた。

「どうしたの?」

「あ、いや、なんでもないわな」

我に返つたカンタロウは手を振つた。ダンテは気になつて聞いていたが、ソネット達が帰つてきてしまつた。

「ダンテ! 無事だつた!」と、ソネットの第一声がこれだつた。

「どういふ意味だ?」

「母さん……」

異常な母の愛情にて、ダンテは本心でやめてほしかつた。

「つまそつな匂いだなカンタロウ君。まあ飯にしちゃせー。」

キクがはりきつて自分専用のスプーンを懐から取り出した。

## 2・3 選択の結果

食事を終え、今後の計画を話し合つことにした5人。地図を広げて指で道をなぞりながら、ソネットとカントロウ、キクが話し合っている。ダンテはその様子を眺めていた。ノゾミはダンテと少し距離をおき、塔のよう立ちはがつて白い花を見つめていた。

「反対だ」

「なんですよー」

ソネットとカントロウの意見が割れた。

「今まで3日。カスバルで1宿、砂漠を出て1宿。今回は速く移動したいからということで、街道を外れて村道を通り、さらに外れて疎林に入った。ただでさえ神脈から遠いうえに、マルスオフだつて出てきている。これ以上道を外れて森に入つてしまえば強力なマルスオフと出会う確率が高くなる。ここは一日街道に戻つて宿場で1泊するのがかしこい」

「そんなことすれば一週間かかるし、前金もらつてないからお金がもうないのよ！ それならこの辺りで野宿して、明日この森林を夕暮れまでに越えて、一気に□□の街道に入った方が時間もお金もかからないわ」

地図を乱暴に指さし、感情的になり始めるソネット。カントロウは冷静にソネットの意見に反論する。

「まあ気持ちはわかる。このルートは緊急時には使われたみたいだからな。湾岸都市までの距離が短くなる。だが、行方不明になつた旅人もたくさんいると噂では聞いている。神脈もあまり通つてな

いみたいだし、基本的に深い森林は別名荒海と呼ばれるほど危険地帯だ」

「危険なことはわかつてゐわよ。だけどもつお金がないの… 街道に出ても稼げそうな町は遠いし、目的地まで時間がかかるわ

「歩も譲る気はないらし。色々な角度からカンタロウはソネットを諭したが、聞く耳をもつてくれない。

「ダンテ君は野宿平氣？」

「よくしてから平氣」

「なるほどなあ……」とキクはダンテをダシに使つことをやめた。恐らくダンテはソネットに味方する。

「そんなに嫌なら別にここで別れても結構よー」

完全に癪癩を起してしまった。カンタロウは口をやむおえずつむべ。

「あのお、ソネット。ダンテ君と君だけならいいと思つたが、ノゾミもいるんだよ。彼女にも危険が及ぶかもしれない」

キクはノゾミを使つことにした。自分が使われているのに、ノゾミは興味がないのか花から田を離れない。

「……まあ、そただけど

核心をつかれ、今度はソネットが口をつぐんだ。

「ソネット、私は平氣です」

ノゾミは根拠もないことを言った。旅の経験がないだけに危険なことでも受け入れてしまうようだ。

「おっ、おい」とカンタロウが突っ込もうとしたが、それより早くソネットが立ち上がった。

「はい3対2！ 3対2よー！ 多数決でこちらが圧勝よー！」

ソネットは「うん」とばかりに勝ち誇った。ここで民主制の多数決を持ち込むのはどうかとカンタロウは思ったが、ノゾミの護衛の依頼を受けたのはソネットである。ただの付き添いの立場である2人は強く言つことができない。討伐目的であるS級犯罪者がノゾミを狙つているという確証がない限り、ハンターの利益を妨害することは法律にも違反する。

「はあ……どうする？ カンタロウ君？」

諦め気味な態度でキクがカンタロウに振った。

「仕方がない。今回だけは付き合つてやる。だけど次からはこんな危険なルートやめとけ」

「なに？ 帝軍も案外小心なのね？ 私達なんてこんな日常茶飯事なんだから」

「おっほっほー」とますますソネットは調子に乗った。

「じゃ、決定ね！ お鍋とナイフ、洗いに行きましょー！」

対立していた態度を切替え、ソネットは鍋とナイフを持ち川へと向かった。ダンテはその後ろをついていく。手伝いに行くのだ。」

ノゾミ、行こう」とダンテからの誘いを受け、ノゾミもダンテについて行つた。

「はりきつてゐるわな」

「そうだよね……よしカンタロウ君。今夜はソネットに復讐しようぜ」

カンタロウの肩をモモモモミしながら、キクは悪戯っぽく八重歯を光らせた。

「えらい事言つわな」

特別カンタロウは止めなかつた。

夜。森林に入る前に決めておいた丘で、5人は野宿することにした。結界の魔法陣が書きやすい平地を選び、キクがナイフでさらさらと描いていく。ダンテが興味があるのかキクと一緒に魔法陣作成を手伝つた。中央に棒を刺し、頑丈な糸を使って綺麗な円を描く。あとは絵を描くだけだ。

「これはなんていう円形魔法陣なの?」

「円形魔法陣『月の都第2』だよ。だいたい2~10人ぐらいの人間をマルスオフやエコーズから守ってくれる結界」

中央に都を描き、円の東西南北に閉じた門を書き入れる。魔法陣を描き終わると、次にキクは詠唱を唱えた。

「うわっ……」

魔法陣が薄く光り、周りに魔力を波及させる。不可視の結界がこれまで発動された。

「はい、終わり」

「こんな結界が町や村にはあるんだ？」

「そうだよ。町や村の中央に神殿があつて、そこに魔法陣が必ずあるはずだよ。さて、みんな仕事終わつたかな？」

ソネットとカンタロウは、落ちていた木の枝を集め火をつけていた。ノゾミはみんなのために布を用意した。

円陣結界の中、たき火の前で軽い食事をすませた後、突然キクが怖い話をしようと言い出した。「そんなの怖くないわよ。無駄無駄」とソネットは戯れ言と片付けようとしたが、ダンテが興味津々なので結局話を聞くことになった。

キクの怪談話が始まつた。

「……ある国王が王位をめぐる争いに負け、死んだの。王妃はショックで白い喪服姿のまま城に閉じこもり、憔悴しきつたまま亡くなつたわ。そしたらそのお城に出入りする人が少なくなつちやつて、最後は庭番しか残らなかつたの。ある夜、庭番がお城に行つたまま帰らない。心配した奥さんはお城に行くと橋の上で夫が恐怖の形相のままこと切れていた。やがてそのお城では白い喪服姿の婦人が彷徨つているという噂が……」

ソネットは無意識にカンタロウの腕をつかんでいた。

「なつ、なつ、なつ、何よそれ？ 白い猫だつたんじやないの？」

力がこもる。カンタロウは痛さで顔をしかめた。

「怖くないの？」

「怖くないわよ！」

皆から細い目を向けられるソネット。「なつ、何よ」と視線の矢から顔を逸らす。

「それなら俺の腕を離してほしいんだが。すごい力だから腕が切れると」

もう我慢ができないようだ。そう言われ、よつやくソネットはカントロウの腕をつかんでいたことに気づいた。

「別に怖いからつかんてるんじゃないわよ！ 何か握りたいの！」

「それならとりあえず離してほしいわな」

相当痛いらしい。ハンターだけに力の強さは折り紙つきだ。

「ほら！ ソネット後ろ！」

突然、キクがソネットの後ろを指さした。

「きやああーー！」

叫びが丘を振動させた。たまらずソネットはカンタロウに抱きついた。鎧を脱いだソネットの豊満な胸を、まともにくらつたカンタロウの呼吸が止まつた。

「あやははははー 全然駄目じゃん！」

キクは爆笑だ。よほどソネットの反応が面白いらしい。

「キツ、キク！ 驚かないで！」

「「ぐつー」とソネットの羽交い締めから解放されようとしたカンタロウは抵抗したが、凄まじい力によって無力化される。「母さん。カンタロウさんが死んじやうよ」とダンテが言ってくれたおかげでカンタロウはようやく解放された。「」ほつ！」「ほつ！」「むせている。

「あれ？ 幽霊怖くないんじやないの？」

「ニシシ……」と笑うキクに、ソネットは憤慨した。

「怖くないわよー 目の前を嫌いな虫が飛んだから叫んだのよ！ ねつ、ダンテ！」

と、恥ずかしさを誤魔化そうとダンテに同意を求めた。

「そうだね」

「大人だな。お前は」

「いえいえ」

自分の喉を手でスリスリ触るカンタロウがダンテを褒めた。

「はあ…… それじゃ、もう寝ましょ。火も小さくなつてきたりし、私が先に起きて見張りを担当するわ」

「めん」とカンタロウに謝り、ソネットは両手を上げた。

「次は俺が担当じょい」

カンタロウが手を上げる。

「私は朝まで寝る」

キクがカンタロウの次に手を上げる。

「おい。そりゃ駄目だ」  
「どうしても？」  
「どうしても」

さすがに受け入れられないようだ。わかつてたことなので、キクは両手を上げた。

「しゃーがない。それならお先に失礼。ノゾミ、コシチおいで」「はい」

「ノゾミと布の上で横になると、キクはノゾミと一緒に寝ることになった。微かだがキクの口から寝息が聞こえてくる。

「……寝るの早いわね」

「いつもあんな感じだ。じゃ、俺も寝るわな」

カンタロウも横になった。

「僕も。おやすみ母さん」  
「はい、おやすみダンテ」

母親らしく優しく柔らかな口調だ。

「何かあつたら大声で叫べ。俺よりキクの方が起きるのが早い」

寝転びながらカンタロウは手を上げた。

「そうなの？ わかった」

ソネットは丘の上に一本だけあつた木に腰を降ろすと、火を消した。

灯りが消えれば 周りは黒よりも暗い漆黒。火種が弾ける音がなくなれば鳥の静かな鳴き声に支配される。静寂と沈黙。暗闇から聞こえるのは小さな寝息だけ。

空を見上げれば満天の星。白、青、赤の星が川のように流れぐ。乾いた風が髪をゆらす。どこからかする森の匂いが精神を落ち着かせる。

ソネットはこの世界にある3つの月を眺めていた。赤と黄色と黒の月を。

（綺麗な月……）

あの人があえてくれた。あの月が3つある理由を。豊富な知識と薄い唇で丁寧に優しく。昔のことを今のようにソネットは思い出した。

（ あの人があ、こんな月を見たらどんな感想を言つだらう？ ）

目を閉じれば思い出す。ダンテは成長するたびにあの人によく。病弱で動けない体だったあの人と比べると、ダンテは元気に育

つてくれた。これからも色々な冒険をさせてあげたい、あの人にはできなかつたから。

私の存在が　この世界から消えるまで。

黒い手だ。

どうして起きているのに、私は悪夢を見ている？

駄目だ。

あの男がやつてくる。

黒い男が私の体に触れる。

卑しい笑みが弓張月のように曲がる。

『お前の人生は　私のものだ』

「はつ！？」

全身に汗をかいていた。ソネットはここが現実か夢か区別しようと目を激しく動かす。頬に大きな手が触れた。

「大丈夫か？」

カンタロウだ。カンタロウの体温に妙な安堵感をソネットは感じている。血が一気に顔に上った。

「なつ、何よ！」

手を払いのける。顔が真っ赤になっているのがわかる。

「ふう……交代だ。疲れていたのか？　見張りなんだからしつかりしろ」

「あつ、「じつ、「めんなさい」  
「いいや。代わるつ」

カンタロウが手の平を上げた。「何よ?」と行動の意味がわからず、ついソネットは言ってしまったが、それがタツチだということに気づき、手を「パンツ!」と叩いてあげた。

「よろしくね」

「あいよ」

ダンテの元に向かうと、スヤスヤと寝息を立てていた。隣に座つても起きてこない。ソネットは横になると、ダンテの前髪を優しくかき上げた。いつも嗅いでいる息子の匂いがする。

「よく眠つてるわ。ダンテ……」

「いい寝顔だな」

ソネットが見張りで座つていた木に腰を降ろすと、カンタロウは刀を抱きかかえた。

「ありがとう。あなた達が旅の手伝いをしてくれるからダンテの負担を軽くできる」

「気にするな」

「昔は大変だったのよ。よく悪夢を見て起きあがうの。だけどそれもいつの間にかなくなっちゃった」

初めてソネットが自分の事を話した。ある程度キクとカンタロウを信用したようだ。

「何かしたのか?」

「ううん。私は添い寝ただけ」

「いい母親じゃないか」

「ううかしら？ 自信ないな」

手からダンテの体温が伝わって来る。緩くなつた表情が可愛い。ソネットは微笑んでいた。

「間違いないさ。自信をもて」

辺りが静かなだけに言葉はソネットの心の奥底にまで入つてくる。今日の昼間の出来事を思い出し、ソネットはカンタロウに謝りうと思つた。

「……今日は」「めん。あなたが言ひこむ」とは言つこわ

今日の昼間、カンタロウやキクの言つてこむ」とは言つこわだとソネットはわかつっていた。

「……ああ

「だけど私には もう時間がなこの」

「うん？」

「ううん。なんでもない。おやすみ」

手を振つてソネットは画面を閉じた。

「ああ」

カンタロウもそれに答えた。

「いい雰囲気じゃないか？」

ソネシットとカンタロウの会話を聞いていたのかキクがからかった。  
「どうやら田を覚ましてしまつたよつだ。

「お前は本当によくそういう所に食いつくわな」

「ふふん……あれ？ ノゾミちゃんまだ寝てないの？」

ノゾミの赤い瞳がパチチリと開いている。闇の中輝く赤さはひと  
きわ目立つていた。

「キク、どうして星はあんなに輝くの？」

星を眺めていたようだ。

「うへん……どうしてだろ？」

「昔母が言つていました。あの星はこの世界で死んだ者の魂が輝いて  
いるのだと」

「ロマンチックだねえ。私そういう考え方好き」

「私は非科学的だと思いました。あれはただの恒星。自ら光を作つ  
ているだけだと」

ピシヤリと自然の事象を断定する。

「本で勉強したの？」

「それ系統の本は読みました。母も知つてはいるはずです」

「なあや。ノゾミは天国つてあると思つ？」

キクに視線を向けるノゾミ。キクは真っ直ぐ空を見据えている。

「……わかりません」

「どうして？」

「死んだ人から聞けないからです」

「そうだよね。この世界には、わからないものがたくさんある。だから人は想像できるの。もしかするとあの星は恒星じゃないかもよ。だって誰も宇宙に行つたことないんだもの」

ノゾミとキクの視線が合ひ、

「…………」

「だからさ 魂が輝いてるのが一番口マンチックじゃん。

君のお母さんは素敵な人だね」

「…………やっぱですね」

無感情なノゾミの口元がほんの少しだが笑つた。

「キクさん」

急にキクの名前が呼ばれた。ダンテだ。眠いのか目をこすりながらキクの傍に立つてゐる。

「おお、どうしたダンテ君？ お母さんじゃ物足りないのかい？」

「どうしても下ネタの方向へ誘導したいようだ。カンタロウは咳払いした。

「違うよ。悪いけど、ここで寝ていい？」

「どうして？」

「母さんはイビキが……」

「グゴー…… フゴー……」

この世のものとは思えないイビキが闇を漫食している。喉が震え、氣道が叫ぶ。口を大きく開け手足は四散し、品の欠片もない姿のソネットが夜の醜態を旨にさらした。カンタロウとキクはその人間とは思えない魔物の雄叫びにドン引きした。交代してまだ1分足らず、『早寝大会』というイベントがあれば優勝者として世界に君臨できるだろう。

「…………凄まじいんだ。いつもは耳栓してるんだけど宿に忘れちゃつた」

平然と魔物の息子、ダンテは大あくびした。

「おいおい……大丈夫なのかコイツ？」

異常なイビキにカンタロウは心配になつた。イビキの停止は、下手すれば生死にかかるかもしれない。

「すじー！ でもさ。ノゾミちゃんもダンテ君達と同じ部屋だったよね？ 耳栓してるの……」

キクは呆気にとられた。「スー、スー」とノゾミは寝息をたて熟睡している。魔物の呪われた叫びですら平然と眠る神経の岡太さに誰もが感服した。

「ノゾミはやいんだ。母さんのイビキをものともしない  
「なんか……さすが女神つて感じ」

知られざる女神の生態が今初めて発見された瞬間だった。

「仕方がない。おいでダンテ君。お姉さんと一緒に寝よつ」

キクは両手を広げてダンテを受け入れようとした。

「いやつ、近くで寝るだけだからいいよ。じつて両手を広げるの？」

キクの申し出を明らかにダンテは拒否している。照れてるのか顔も赤い。

「セクハラはやめとけ。ダンテ、じつに来い。俺の傍で寝ればいいわ」

カンタロウがダンテに助け船を出した。

「えへ。ダンテ君。せっかく美人なお姉さんが一緒に寝よつて誘つてるんだよ？」

「僕はカンタロウさんと寝るよ」

「即決！？ やっぱりまだ年齢的に早かったな」

「ブー」とふて腐れてキクは「コロリ」と横になつた。ダンテはカントロウの傍に布を広げると横になつた。ソネットの魔物の雄叫びはまだ続いている。

「それにしてもイビキが止まらんな。鼻になんか突つ込んでくか？」

さすがにあのイビキを聞くのは耐えがたいらしい。

「平気だよ。あのイビキでマルスオフがやって来ないんだ。ビビつて」

「お前はすごいな……まあ、ある意味便利な兵器だわな」

慣れとは恐ろしいとカンタロウは思った。

まだ5人は気づいていなかつた。

夜の闇にまぎれ、遠くの木から5人を見つめる大きな瞳を。

怪鳥は一鳴きした。

その瞳の奥は5人の姿をありのまま映していた。

深淵な夜の森の奥。一番高い木の太い枝に寝転ぶ男の姿があつた。線のようく細い目をしたその特徴は、ソネットが砂漠の塔であつたヤンであるとすぐ判別できる。

ヤンは腕に小型のマルスオフをとまらせていた。そのマルスオフは目が人の何十倍もあり、ヤンの腕をつかんでいる手は一本しかない。つまり、目と手しかない怪物なのだ。主に通信手段として利用されるマルスオフで、地面から引っこ抜けば半年はもつ。半年後は萎びて死んでしまい、眼球が割れて胞子を飛ばす。森の奥にしかない魔物である。ヤンが持つてているのは特別に改良されたものだ。

「あら……こんな所にいたのか。まさか女神がいるつてのに危険なルートを通りとは予想外だつた」

怪鳥の視界が映像として『千里眼』と呼ばれるマルスオフに伝えられていた。映像からソネット達5人が寝ていてる姿が見える。ヤンは「ふうむ……」と顎をさすつた。

『見つけたのかえ?』

ハンディタイプの無線から女がヤンに話しかけた。音声のみで映像はないため、声の主の姿はわからない。賢帝国技術者が作った無線機械は枝の間に設置されていた。市場で売られていたものをヤンが買い取つたのだ。

『つたくしつかりしるよー。』

チャンネルの違つもつゝ一つの無線から若い男の声がした。

「悪かつた悪かつた。落ち着くニヤ。とりあえず目標は発見できた」  
『今から行くか!』

深夜という時間帯を利用して敵に攻め込むつむりらしい。ヤンは苦笑した。

「いやつ、 わすがにこれからあそこまで行くのは時間がない。待ち伏せするのが妥当だニヤ」

『わらわ達はどうすればよいのかえ?』

癖のある口調で女がヤンに判断を求めた。

「このルートだと…… 街道に戻るか森を通りか……」

『わざわざ危険な森を通りか……』

『俺なら森を通りか……』

「ふむ…… よし。とりあえず森で待ち伏せすることじよ。外れればまた別ルートを考える。とにかく船に乗られる前に捕らえないとな

『よつしゃー。』と若い男の声と共に、無線の奥から無数のマルス  
オフの興奮した叫び声がノイズと共に木霊した。

## 2・4 深淵なる森林の中へ

朝がきた。

朝影が丘を射し、最後の見張りとして木に座つていたキクを照らす。細い日蓋から光が入ると、全身の体温が上昇する。仄明かりが脳を活性化させ、鼻孔から濃厚な自然の匂いが感じとれる。どこか遠くで間延びした鳥の鳴き声が聞こえた。キクは「ゴシゴシ」と手を擦ると両腕を伸ばした。

「うう……ん」

暖かで穏やかな協風が肌を撫でる。全身をマッサージするように脳の快楽神経を刺激した。寝起きの眼に夜では見えなかつた、黄色のベビイチゴの花や白く小さなナズナが小さく風に揺れる。手を地面につけば土が、夜の冷たさを伝えてくれた。

「おはようー。」

丘の登頂で誰かが立つていた。ソネットとダンテだ。2人は両腕を左右に動かし、両足を屈伸させていく。

「……何やつてんの?」

「何つて朝の体操に決まつてるじゃない! あなたもやる?」

ソネットの体が大きく左に曲がり、そして右に曲がつた。ダンテもそれに随つ。どうやら毎日の日課のようだ。

「……朝から元気だな」

カンタロウも起きていた。起き上がり頭をボリボリ搔いている。その隣ではノゾミが朝の光を浴びてもなお、目を閉じ寝息をたてていた。

「まだ寝てるのか」とカンタロウはノゾミの寝起きの悪さに驚いた。茶色の体に背中に黒い斑点のある小鳥達が、ノゾミの胸の上で遊ぶ。「うつ……」とノゾミは苦しそうな呻き声をあげた。

「椰子の木みたいな頭してるわね。さつ、とにかくあなたも体操しましょ」

金髪の髪が何本か天に向かって広がっている。キクの寝癖である。どうやって寝ればそうなるのか未だ解明されていない謎だ。ソネットがキクの腕をつかんだ。強制的に体操に加える気だ。キクは「えー」と迷惑顔で抵抗した。

「やだあ。朝から体動かしたくない」

「何恥ずかしがってるのよ？ さあさあ。カンタロウも立つて

「うー」と結局ソネットの力に負けてキクは朝の体操に巻き込まれた。

「……俺もやるのか？」

「もちろんよ!」と女特有の元氣で張りのある声で、カンタロウも渋々立ち上がった。

体操を終えた後、川で洗顔と髪を整え、朝食をとることになった。昨日取つておいた木の実が並べられる。

「いい？ 暖暉しなよつに平等に分けましょ」

1人、1人にソネットは木の実を渡していく。固い殻はすでに取り除かれ、中の脂肪分の高い、岩のような形の実が手の中で転がる。2つほど余った実は、ダンテとノゾミに渡された。後はそれぞれパンを頬張った。

「ふう……何か朝から体痛い。しかも眠い」

ポリポリと実をかじりながら、キクは田をしばたかせた。昨日のソネットのイビキと早朝の体操が相当体にこたえたようだ。

「しつかりしなさいよ。だらしないわね」

「誰のせいだ。誰の」

「何よ？」

カンタロウの皮肉にソネットは顔をしかめた。

「昨日魔物のイビキが聞こえたんだよ」

「えつ！？ ほんとに！？」

「精神的にダメージを受けてもうボロボロ」

腕を伸ばすキク。眠気がまだ収まらないようだ。

「私は熟睡してたから知らないけど……でもたいしたことない魔物ね。私平気だし」

「だらうね」

「何よ？？」

本当にわかつていないうだ。ソネットは隣でパンを食べているダンテに尋ねた。

「ねえダンテ、昨日何があったの？」

「別に、何もないよ」

母を気遣つてかダンテは本当の事を言わない。

「なんだ。やつぱり何にもないじゃない。ノゾミもやつよね？」

「ソネット、イビキがつるやこです」

「ブーー」とカンタロウの口から木の実が噴き出した。「直球で言つたよ」とキクはノゾミの怖い物知らずの根性に感心した。ダンテは銀色の瞳をパチクリさせた。

「何言つてんのよ？ 私は生まれてから今までイビキなんてしたことがないわ。キクじゃないの？」

まつたく自分のイビキの凶悪さをソネットは理解していなかつた。熟睡しているので当たり前だが、ちやつかり責任をキクになすりつけている。

「……ソネット」

「なつ、何よ」

キクはゆうりと立ち上がつた。

「うりやー」

「ひつー」

素早くソネットの後ろに回り込むと両手で胸を薙づかみにした。手が安物の鎧であるレザーアーマに食い込む。卑猥な指の動きが柔らかで大きな乳房を揉みほぐした。あまりにも公然とした猥亵行為

に、帝軍のカンタロウですら自分の立場を忘れていた。

「何すんのよー!」

真っ赤になり肘をキクの顔面に食らわせるソネット。

「つぎやー!?

キクは後ろに吹つ飛んだ。

「ふー! ふー!」とソネットの呼吸が荒い。頬を紅色させキクを睨んだ。「お前な……」とカンタロウは顔を手で押さえた。

「……ふふ、カンタロウ君。一矢報いてやつたぜ」

地面に頭をめり込ませ、お尻を空高く突き出したつも、キクは満足気に親指を立てた。

「体張つたわな」

カンタロウは頷いた。

丘を出て徒歩約1時間。

まだ朝露が乾ききらない时刻に、ソネット達は難関である森林に到着していた。陸地は湿地地帯で雨の水が溜まつた淡水湿地なのだろう。花飾りのように半球体に広がつた黄色の花であるリョウキン力が点々と点在している。植物の栄養が富んでいるため名前も知ら

ない多様な植物が足に絡まつてくる。遠くで、人に驚く灰色のノウノトリが様子を伺つてゐる。

「これは……」

森林を前にしてカンタロウは声を上げた。高木を超えた林冠や高木の間に低層の木々が埋め尽くされている。あまりの木の高さに遠くを予想することすらできない。その森林にポツカリと暗い穴が開いてゐるのである。もしかするとここを通る旅人によつて切り開かれた穴かもしだれない。

「完全な熱帯林だわな」

湿地よりも高層ゆえ、地面は固く乾いている。自分達より高い木によつて光合成ができない木は、人の死体のように地面に倒れていた。そこから傘の茶色いキノコが何本もはえている。

「どうしてこんな森できるの?」

「単純に降水量が多いからだ。プレートが収束して山もできる。その山から水が流れ巨大な湖を形成してるんだろうな」

ダンテの疑問に答えつつも、カンタロウは地図を地面に広げた。

「この地図からして陸地なのは北と、南西と、東の3つ。後は山と湖に囲まれてるわけか。それにしても単純な地図だな」

等高線の表現が浅く傾斜がわかりにくい。これでは山頂はなんとかわかつても、森の広さの予測がつかない。ただ単純に街道を中心として描かれた地図のようだ。

「森のど真ん中進むしかないわね。予想以上に山の傾斜がきついわ

ソネットに続いてダンテも地図を覗く。

「そうだね。今僕達は南西にいるから……一気に北に向かつて森を抜けないと日が暮れて危険だね」

それがどう考へても妥当なようだ。

「もう少し詳しい情報を聞けなかつたのか？」

「しようがないじゃない。宿屋のおっちゃんに地図見せて聞いたらそうだつて言うんだもの」

2泊目の宿屋でソネットは近道を宿屋の老人に尋ねていたようだ。

「はあ……街道を外れるつて言つ所からおかしいとは思つたが。本当に信用していいのか？」

「大丈夫よ！宿屋を経営して30年。多くの旅人を見てきた俺の目に狂いはない！ つて言つてたわ」

「イメージが目に浮かぶわな」と、自分が痴呆気味であるとわからず旅人にアドバイスする老人の姿が見えた。

「まあいいじゃん。とつとと行こうぜー！」

キクはズケズケと深淵な森林の中へと入つていった。

森に入り30分経過した辺りから、道はますます険しくなつていった。動物の骨に混じって人骨まで出てきた。嫌な予感が辺りに侵食し、それは現実となつた。

キクが4人に向かつて片手を上げた。何かが来る合図だ。キクのマルスオフに対する直感は異常に鋭い。カンタロウはそれを知つているため「気をつける」とソネットに忠告した。

突然、マルスオフが現れた。背中に鋭い針のあるワニ型のマルスオフ、2本足で立つ毒々しい紫色のカエル型のマルスオフ、木の上から襲いかかるサル型のマルスオフが奥の森林から襲いかつた。久しぶりの新鮮な人肉に獣と爬虫類は興奮し、彼等にとつて戦いとは餌の取り合いである。

この3種類は帝国によりマルスオフ・イエロー認定されているクラスだ。イエローは一般的に人を襲うマルスオフのことである。よつて名称もカエル型は『ツトグラ』、ワニ型は『ボクルグ』、サル型は『エト』と呼ばれているが、この3匹はそれらの亞種なため便宜上名前を呼ばれるのみの最下層のマルスオフだ。

「くつ！？」

カンタロウはボクルグの噛みつきかわし、身軽な体技で忍者のようく木の幹の横に立つた。ボクルグの背中から針が飛ばされる。刀で飛ばされた針を弾くと、真上からボクルグの背中を貫いた。

「やあ！」

ソネットは木の上から降りかかつてくるエトを一気に3匹切り裂いた。さらに地面を走つてくる2匹を仕留めると、マルスオフの血のついた剣で威嚇する。いきなり仲間5匹殺されたエトは、本能的に恐怖を感じ後ずさつた。

「いつ！？ 気持ち悪！」

キクはツトグラを相手にしていた。ギヨロギヨロと大きな両目を動かしながら、透明な体液を吐きつけてくる。木の陰に隠れ、体液をかわしながら、1匹、また1匹と剣で切り裂いた。2匹やられた所でツトグラはすぐに逃げ出した。

敵を退けたという安心からか、3人の呼吸が漏れた。すると、後ろで剣の金属音が響く。「ダンテ！」とすぐにソネットは踵を返す。

「ノゾミー、僕の後ろへ！」

ダンテが骸骨と戦っている。骸骨は鋸びて刃のこぼれた剣を振り上げ、ダンテの剣に打つ。次々と地面に倒れていた人の骸骨が立ち上がり、ダンテの方へとゆっくりとした歩調で歩いてくる。1体、2体とダンテは骸骨の遅い動きの隙をつき、倒していくが、下半身を折られても地面を這いずつて襲いかかってくる。

ソネット、キク、カンタロウの3人も戦いに参戦した。だが木が邪魔なうえに骸骨の剣をかわすのも一苦労で、徐々に中央に追い詰められていった。

ノゾミを中心に囲み、4人は東西南北と背中をつきあわせた。

「なんか骸骨多いわね！」

「恐らくこここの森林に入った旅人だわな」

興奮で感情的になつていいくソネットとは対照的に、カンタロウは冷静に切り返した。

「なんとかならないの！」

「無理無理。あれは術者が操つてゐるから何度攻撃しても無駄」

死者を操る魔法原理を知つてゐるキクは手を振つた。

「どこにいるのよー？ そんなの！」

「たぶん近くにはいないわな。恐らく森に古くから住む妖精か何かの仕業だうや」

勝利を確信してか、ケタケタと骸骨達が笑う。人を小馬鹿にしたような笑いだ。

「とんだ悪戯者ね！」

そんな事を言つてゐる間にも、骸骨はますます数を増していった。武器の特徴から、かなり前時代の骸骨もいるようだが、腐るどろろか艶のある太い肋骨をしている。どうやらこの森林には濁んだ空気が溜まりやすく、しかも骨は腐ることなく存続できるようだ。

「ちょ、ちょっと……数が多くなつてない？ 獣や爬虫類型のマルスオフは逃げたのに！」

森の闇から光る赤い眼窩の多さに、さすがのソネットも後ずさり始めた。

「すごい数の人がこの森で死んでるんだわな。大方術者はお前に道を教えた宿屋の親父だつたんじゃないか？」

「あつ、それ有り得る。カンタロウ君面白い推理」

キクとカンタロウはまったく動じていない。「……すごい余裕ね」とソネットは汗の流れる額を拭つた。

「じゃ、あれやるぞ！ カンタロウ君ー！」  
「わかつた」

キクとカンタロウは同時に赤眼化の魔力を発動した。右半身に赤きラインが走り、右目下に文字が浮かぶ。カンタロウは『テト』をキクは『テファ』の文字が出るまで10秒。赤き両目をした高位魔道師が骸骨達の前に歩み出た。

「インバルンの名において命じる。黒き結界を作りあげ、我等を守れ！」

カンタロウの手が地面におかれ、短い詠唱である『一桁詠唱』で炎が広がる。炎は草や地面を焦がし、黒い結界を作った。範囲は狭いが簡単な円陣型魔法陣ができあがっている。

「何つ！？」

何をしているのかわからないソネットは、敵前の前にもかかわらず後ろを向いた。

「よし。この中に入つて動くなよ。キク！ いいぞ！」

5人を円陣型魔法陣に入れると、キクは両手を横に広げ赤き目を閉じた。

「ランゲの名において命じる。紅海の大蛇よ、高波をもつて敵を一斉攻撃せよー！」

キクの両手から紅い水が渦を巻いて巻き起こつた。それは空で大蛇となり、魔法陣の外を凄まじい勢いで回転している。蛇が通った

地面から高波が上がり、森林の一番高い木を追い越して流れだす。波は骸骨を押し流し、森林の奥へと追いやつていった。

「す、す、す、……」

「ゴクリと唾を飲み込む。ここまで術者をソネットは見たことがなかつた。波はキクが魔力の放出を止めると、すぐに消失した。

「す、いやキクさん！」

ダンテは飛び上がつた。

「ふふん、お姉さんに惚れたら」

赤い瞳でダンテに向かつてキクはウインクした。「はいそこー！ダンテを誘惑しない！」とソネットが突つ込んだ。

「見事に洗い流したな。これでしばらくは襲つてこないわな」

戦闘が終わり、森林は元の静けさを取り戻していた。

だが、それで終わりではなかつた。

30分もたたないうちに、マルスオフはソネット達に襲いかかつた。ノゾミがいてはうまく逃げることもできない。正面突破しか攻略法はないのである。

しばらくして、ようやくマルスオフの攻撃が止まつた。森林にいるほとんどの種類のマルスオフと戦つたのではないだろうか。今がチャンスと、5人は小休止をとることにした。

キクは得意の木登りで天候の確認をしにいった。一番高いであろう木の上に金髪が靡く。

「うーん……すげい森の匂い」

足を枝に、手を幹に、しつかりとつけ遠くを見据える。

空から眺める森林の景色はあまり変化がない。緑の海に酔いそうになる。先も木が邪魔でよく見えない。動きがあるとすれば鳥が空を飛び立つ時ぐらいだ。

「どうだ！？」

「大丈夫！ 絶対に雨はない！」

自信をもつて言える。森林の下では見えなかつた青空が世界を覆う。これで雨が降るといつのなら異常気象だろ？

「よし。わかつた

激しい雨の恐れはなくなつた。しばらくは安心して森林を進めるだろう。方角の確認のため、太陽もついでにキクに見てもらつた。

「器用ね。あの子」

少しソネットに疲れの色が見えた。やはりマルスオフの数が多い。今まで何とか撃退できていたが、これがダンテとノゾミだけの3人なら、どうなつていたかわからない。帝軍のキクとカンタロウの助けがあつたからこそ、ここまで生きてこれたようなものだ。

「どうした？ 少し後悔してるか？」

「……ううん、疲れただけ」

後悔はしない。それをするぐらいなら前に進まない。

ソネットは頬をパンッと叩いた。

「ダンテ、奇妙な形のキノコがあります」とノゾミは腰をおろした。傘の赤茶色のキノコが、何本もはえ、地面に輪をつくっている。「これは妖精の輪だよ」とダンテはノゾミに教えてあげた。キノコは地面の中で糸のような菌で絡み合っている。それで輪ができるがるのだ。

「物知りですね。ダンテ」

「そうかな？ 旅をしていたら普通に見られるよ」

「私はあまり旅をしたことがないですから」

「そうなんだ？ それならこれからもつと面白いものが見られるよ

「楽しみです」

無表情だがノゾミは喜んでいるようだ。そんなほのぼのとした会話に、ソネットの不安が少し和らいだ。

「カンタロウ君！ ほら見ろ！ 蛇だ！ 食おうぜー。」

「……でかくない？」

キクが片手で振り回している蛇は、カンタロウが引くぐらいでかかった。

太陽が頂点に近くなってきた。  
森林に入り約2時間、マルスオフの攻撃は気持ちが悪いくらい静かだつた。

巨木が寿命を終え、真横に倒れている。緑のコケが巨木の最後の生命を吸い取るようにくつづいている。カンタロウ、キク、ソネットの3人は、その上を難なく渡つていった。大人ではなんでもない障害物でも、女の子にとつては巨大な壁で、その幹を越えるのは至難の業である。線の細いノゾミは無表情だが途方にくれた。

「ノゾミ」

ダンテが手を出してくれた。ノゾミはその手を取つた。それでどうにか巨木を越えることができた。白く細い指が、子供の指にしてはゴツゴツした太い指と絡まる。その感触にノゾミはいつも驚いていた。同じ年齢で性別も違うが、ここまで皮膚の感触が違うものなのか。

「どうしたの？」

「いえ」とノゾミは首を横に振つた。

どんな生き方をすれば、こんな指になるのでしょうか。

屈託のない笑顔を向ける少年に、ノゾミは徐々に興味を覚え始めた。

しばらく森林を歩いていると、急にダンテがムズムズし始めた。カンタロウに何か聞きたくて仕方がないようだ。

「ねえ、カンタロウさん」

「なんだ？」

ついにダンテは気になっていたことをカンタロウに聞いた。

「魔法について教えてよ」

どうやらキクの魔法が衝撃的だつたらしい。町や都市では魔法は規制されているので、滅多に強力な術を見る』とはないのだ。

「『一柄詠唱』のことか？ お前の母ちゃんから教えてもらつたことはないのか？」

「ないよ。母さん魔法使えないもん」

ダンテは口を尖らせた。

「ダンテ、使えないんじやないわ。使わなくても大丈夫なの」

ソネットは虚勢を張るかのように、腰に手をやつた。

「ふーん……まあいいわな。この世界で魔法の元となつているものは何かわかるか？」

「魔法の元？ うーん……神様？」

「そう。世界を創世した『13神』だ。幻影のレパートード、物質操作のロード、模倣のクラウン、水のランゲ、監視のコンステイン、生命のグリード、炎のインバルン、重力のエンブネス、風のマルス、無のザクロ、氷のレトリック、最初の息子ファスト、造物神ロードの13神だな」

「みんな『息子』って呼ばれてたんだよね？」

「そうだ」とカンタロウは頷いた。

「これらの神はすでに体をなくし、『力だけの存在』となり神脈に力が溶け込んでいる。神脈とはこの星全体の地面を通っているエネルギーのことだわな」

「それくらいだったら私だって知ってるわ」とソネットも割り込んだ。

「魔法を使う者は詠唱と呼ばれる『赤の言霊』を唱える必要がある。神の力を借りるためのキーワードを一字一句間違うことなく読むことで、魔法は発動する。一般的に魔術師でなくとも魔法は使うことができるが、強力な魔法は呪文を間違うと爆発するので注意がいるわな」

「ふんふん」と初めて知った知識に、ダンテは興味深そうに首を動かす。

「だが、それでは時間がかかる上にマルスオフには対応できないということで、呪文は簡略化されていつたがそれも限界があった。そこで赤眼化の誕生だ。お前も見たように神の印が右半身に現れるのは、神脈から魔力を吸っているからだ。右目下の文字は神脈を魔力に変換する電動機みたいなもんだな。この2つができるて初めて『一

「『え～。赤眼化しないといけないの？』と、赤眼化できないダン

テはがつかりした。

「続けるぞ？」一桁詠唱は『神の名+イメージする魔法』で発動可能だ。直接言葉で表現することによって、自分が思っている魔法を発動することができる。かなりの熟練者になると、身振り手振りだけで魔法を発動することもできるようになるそうだわな

「詠唱、必要ないんだ？」

「だがやめておいたほうが無難だわな。何せイメージが崩れれば魔法が術者に逆流してしまつ。いわゆる自爆といつやつだな。魔法を使う者は細心の注意と安全性の確認をもつて行うべし」

カンタロウの魔法講座が終わった。

「他に何か教えてほしいことはある？　お姉さんが何でも教えてあげる」

キクがダンテの肩に手を置く。手つきがどことなくいやらしく。その手をソネットが素早くつかみ上げた。

「私の息子に触れないでくれます？」

「あだだだ！　『ごめん！　ごめんってば！』と背中に手を回され叫んだ。『ふしゅ～』とソネットから鬼神の吐息が漏れた。

「じゃ、マルスオフって何？」

ダンテは学校に通っていないので、世間の常識に疎かつた。カン

タロウは嫌な顔一つせずそれに答えた。

「マルスオフってのは、『5番目の息子』風のマルスが作った化け物のことだ。昔はマルスオフがない時代があつて、人が最も発展していたらしい。その均衡を崩したのがマルスだ。神々の争いによって母胎を失ったマルスは世界に絶望し、破滅へと向かつたと言われている。動物実験や人をさらつては人体実験を繰り返し、マルスオフという化け物をこの世界に解き放つた。のちに人間に倒されるまでマルスの凶行は続いた」

「ちなみにマルスに協力していたのが『8番目の息子』生命のグリードね。純血のマルスオフが異種交配を繰り返し、さつき私達を襲つた亜種が数多く生まれてしまつたわけよ」

キクがカントタロウの話を補足した。

「純血のマルスオフはすごいの？」

「あれ程度じやすまない。帝国認定レッドかダーククラスだ。その凶暴性から目立ちやすく、人間にほとんど駆逐されてしまい絶滅気味ではあるがな」

現実、純血のマルスオフは人を見れば襲いかかり、どんな強者でも逃げださなかつた。逃走本能は動物に自然にそなわつた生存戦略である。これが取り外されているのだから、生存確率は非常に低い。今ではその活動はすっかり沈静化してしまつていて。

「マルスオフがいない時代か……ほんと、そんな時代がくれば世の中平和なのにな」

それは全人類が願う希望だろ？

「じゃ、エコーズつて？」

「エコーズとは繰り返し旧世界の帰還を喰く者、人間がこの世界に生まれる前からいた旧世界の遺物だ。元は新世界になる前の人間だつたと言われている。13神が『力だけの存在』になる前までは、神の力によって行動を押さえられていた。だが、神がこの世界にいなくなつてからはマルスオフを使い、帝国に攻め込むようになった。それがおよそ100年前、『生命の樹』が地図から消滅してから始まつたと言わわれている」

「……あなた以外に物知りね」

スラスラとしゃべるカンタロウを、ソネットは少し尊敬した。

「こんなのは常識だよ。知らない君がおかしいの」

「ぐつ……」とキクに突つ込まれ、ソネットの言葉が詰まった。

「あつ……」

ノゾミの足が止まつた。

その視線の先には何かの鳥が地面に倒れている。

フクロウの死骸だ。

何者かにやられたのだろうか、枝をつかむ大きな足はもはや力なく、茶色の毛の中に埋もれた両目は静かに閉じられている。

まだ生きているのではないかと思つくらい、死を迎える前の姿そのものだ。

ノゾミの様子に気づいたダンテは、何事かとフクロウの死骸とノゾミに視線を交互させた。

ガサツ

「何つ！？」

草むらが動いた。森の奥から足音がする。ちよび木の影になつており、姿が見えない。

「またマルスオフか？」

カンタロウとキクが剣を構える。ダンテはノゾミを後ろにやつた。

「お？ よ？」

草むらから出てきたのは、狐の男、ヤンだつた。

## 2・6 ヤンの正体

「あなたヤンじゃない！？」

懐かしい友に会つたように手を上げるソネット。それにヤンも気づいた。

ヤンは旧世界の塔で出会つた時のままの格好で、武装工作服を着ていた。薄い金髪の髪を上にした、特殊ヘアバンドによるツインツインスタイルも健在だ。物を収納するいくつものポーチ、ホルスターには小型銃が見える。

「おおうー？　お前か？　よくあんな砂蟻の大群から逃げられたな？」

「あなたもね」

「確か……カスパルのベッキーちゃん？」

「ソネットよ！」

「冗談冗談」とヤンは白い歯を見せた。カンタロウとキクが顔を見合わせる。

「知り合いか？」

訝しげな表情になるカンタロウ。

「同じハンターよ。あんたもエリーカスに雇われてたんでしょう？」

「そうだよ。お前とは別口で雇われてた。いや、それにしても助かった。森に入つたはいいけど迷つちました」

恥ずかしそうに頭を搔く。こんなに深い森林ではあり得ることだ。

「馬鹿ねえ～」

「ところで後ろの4人はどちら様?」

ヤンはソネットの後ろの4人を知らない。

「ああ、帝軍のカンタロウさんとキクさん。そして私の息子ダンテと……」

1人1人紹介していくが、ノゾミの所で迷いが走った。ダンテの後ろでノゾミは修道服についているフードを口深にかぶっている。自分が他の人間とは異質なのを知っているのか、無自覚に行動したようだ。

「どうした?」

「むっ、娘よ! ちょっと人見知りだからフードかぶつてるの」

ノゾミが『神の血脈』をもつてている事は言わなかった。例え同じハンターでもヤンはそこまで信用できないようだ。

「ほう? 何か修道服を着てるみたいだけ?」

顎をさすつて細い目をますます細める。その修道服はエリニユスの物であることは一目瞭然だ。動搖からかソネットは手を慌てふためいた。

「服がなくなつて貰つたのよ。別にどうでもいいでしょ!」

さりに下手な言い訳をしてしまつた。

「そういえば……『神の血脈』はビリしたんだりうな？ 行方不明みたいだが……」

「契約途中だつたから私は知らないわ」

ソネットは会話を断裂させた。

「まあいいや。俺はヤンだ。流れハンターをやつてる。ムヒムヒー  
ヤ」

「ニヤ？ キクが首をかしげた。『口癖』、『口癖』とソネットは  
補足した。

「『』の森を通り『』と『』、湾岸都市に行くつもりか？

「そうよ」

「なるほど。ちょうどいいや。俺も急用でそこへ行くつもりだった  
んだ。仲間に加えてもらえないか？」

拝むよう、手を合わせた。

「いいわよ。ねつ？ 協力し合いましょ

ソネットは快く受け入れた。

「それはありがたい。よろしくニヤ」

「ハリハリハリ」

お互い握手を交わそうと手を差し出す。

「ソネット、待て」

それをカンタロウが止めた。

「ちゅうとこつちへ来い」

「何よ?」

カンタロウとソネットはその場を離れた。ヤンに聞こえないよう  
に小声で話す。

「誰か知らないが信用していいのか?」

「別にいいでしょ?」

「こつちには『神の血脉』を持つノゾミがいる。氣づかれでもした  
ら変な噂がたつ」

「それを言うならあんた達だつて信用できないじゃない

その言葉にカンタロウは心外そうな顔をした。

「俺達はちゃんと大帝国の証明があるだろ?」

「どうだか。とにかくいいじゃない。困つてるようだし、仲間にし  
てあげましょ?」

「しかし……」

「それならこの森林を抜けるまでいいじゃない?」

「つむ……」

実はソネットはそれほどヤンを信用しているわけではなかつた。  
しかし、目上の人間に何かを言われれば、反抗してしまった性格であ  
る。帝軍という絶対的な肩書きを持つ、キクやカンタロウにどうし  
ても主張を抑えられないようだ。

「何か突然のことと申し訳ないニヤ」

揉めている原因が自分だとわかつていいのか、ヤンは申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいって、いいって。じゃ、改めてよろしくねヤン」

ソネットとヤンが握手した。

「ノゾミー。」

ようやくダンテは気づいた。自分の腕をつかんでいるノゾミが微妙に震えていることに。ソネットとは違い、感情的になれないノゾミは何かを伝えたくても言葉にできない。ダンテは心配になり、ノゾミの表情から心を読み取ろうとしたが、無表情ゆえにわからない。次にキクがヤンの前に立つた。

「よろしく。キクです」

「じつやビーモビーモ。まさか帝軍さんに会えるとは思わなかつた

……」

キクの握手に応えようと、ヤンは手を差し出した。その瞬間、キクは腰につけている剣を振り上げた。木の枝から落ちてきた木の葉が真つ一つに分かれる。

「えつー!？」

ソネットは2つの事に驚いていた。

1つはキクがいきなりヤンを剣で切りつけたこと。

もう1つはキクの剣を素早くかわし、常人を超えた脚力で後ろに飛んだヤンにだ。ヤンは細田の表情をまったく変えず、その場から立ち上がった。

「ひゅ～、危ない危ない。急に何すんのよ？」

「人間とは思えない身のこなしだね」

「まあ仮にもハンターだからね。それよりもこれはどうこうことだ  
？　君達本当に帝軍？」

疑いの口調になる。顔は笑っていても、声色が鋭く痛い。矛先はキクに向けられている。

「間違いないよ。だからこそわかる　君が人間じゃないってね」

「どうこうこと？」とソネットは困惑する。「しつ！」とカンタロウは再び戦闘の構えになつた。

「おいおい。どこからどう見ても俺は人間だニヤ。ちょっと身体能力が高いだけで……」

「私があなたを敵だと判断した理由は3つある」

ヤンの言い分を聞かず、キクは指を3つ出した。

「一つ、この状況は偶然にしてはできすぎ。あなたは森林を通れば湾岸都市に早く行けるって誰に聞いたの？」

「宿屋の親父だよ」

「どうやって聞いたの？」

「単純に湾岸都市に行く方法を聞いただけさ」

「そんなあいまいな情報によく飛びついたよね？」

「急いでいたからな」

ヤンは躊躇なく答えていく。

「ならなおのこと通らないでしょ？ だつてここ帝国認定のレッドゾーン区域、つまりマルスオフ出現率80%の場所だよ。つまり入れば死ぬつてわかる場所なの。大事な用があるのにわざわざこんな危険地帯を通りの？」「……自信があるからさ。俺はこれまでこんな危険地帯を通りてきたからね」

「……自信があるからさ。俺はこれまでこんな危険地帯を通りてきたからね」「……」

雲行きが怪しきなってきた。明らかに言葉を考へていて。

「1人で？ それ普通の人間の感覚じゃないよ」

「……」

ついに黙ってしまった。

「レッドゾーン！？ そんなの聞いてないわよ！」とソネットは慌てた。「知らなかつたのか？」とカンタロウは冷静だ。

「次に2つめ。あなたの特徴。狐目、ツンツン頭、武装工作服、もしかして無線機もつてるんじゃない？」

「うつ……」

自分の特徴だけでなく、愛用の無線機を言い当てられた。

「Hコーズ『一尾』。Hコーズの中ではアナログ派で、武帝國を襲つたことで有名。『24エコーズ』の一人として認知される。帝国軍関係者なら『24エコーズリスト』をもつてているから誰でも知つてる」「うつ……」

『24エコーズリスト』とは実在するリストである。『24エコーズ』とは帝国各國にマルスオフを使い、攻めてきた24体のエコーズをさす。Hコーズの中では特に凶悪で、その正体を詳細に書か

れているのが『24Hローズリスト』である。このリストは世界各国に周知されている。

「……一応聞くが、さつめの理由は？」

「ふふ。聞きたい？」

「ぜひ」

「女の勘」

「うとキクは笑つた。

「……ふふ」

ヤンはしづらへ雖然としたが、すぐこの口を閉じた。

「わはははは！　いや、面白い。お前みたいな帝軍がいるとはね。それにしても有名になるとやつぱりやつぱりになあ」

それは自分が『24Hローズ』だと認めたことだ。本心からおかしいのかヤンは笑い続ける。

「あなた……」

楽しそうに笑うヤンとは対照的に、ソネットの顔から血の気が引いた。もじこまま仲間にいれば100%危険な相手だ。

「まあいいや。それじゃじかの条件を立てよつて　やこの『神の血脈』の娘を渡してもうね」

やはり狙いはノゾミだ。すでにフードをかぶる少女が『神の血脈』を持つ女神だと気づいている。ドクリとノゾミが小さく震えた。

「条件？ どういう条件だ」

刀を抜くと、カンタロウは構えた。

「お前達を生かす条件だ」

ヤンの線のように細い目蓋から、血のような赤い瞳が覗いた。

そんな。

ソネットはショックだった。

旧世界の塔で出会った時、ヤンは好みのタイプとは程遠かった。それでもヤンに悪い印象はない。ヒヨウヒヨウとしていて、どこか垢抜けている。そう、餌さえ与えれば誰でも懐く猫のよう。自立的でマイペース、自分はない強さ。虚勢を張り、弱さを隠してどうにか保てる自分にはない何か。

それが崩れしていく。ポロポロとパズルのように。頭ではまだヤンを一尾というエコーズだと認めていない。

だけど事実は 絶対だった。

「それにしてもリストに特徴までのつてるとか……。人の姿はよくするが、何故服装までわかつた?」

ヤンを改め、一尾は顎に手を当てる。

「お前が頻繁に人間の市場に出てくるからだ。しかも田立ちたがり屋で去年も事件を起こしたの?『24エコーズリスト』は更新されてるんだよ」

「あ~納得」

ポンと一尾は手を叩いた。

「よく仲間から注意はつけているんだが、つい自分の改造物を見せたくてね」

「たははは」と一尾は恥ずかしそうに頭を搔いた。

「どうして……どうしてノゾミを狙うの？」

喉がつかえる。いろんなにも自分がショックを受けているのかとソネットは驚く。

「決まってるだろ？」殺すためだ。俺達エコードは13神の力が苦手でね。神が消えるまで暗い闇の中にいたのさ

「神を……恨んでいるわけね？」

「……くくく」

唐突に一尾が含み笑いしだした。

「何がおかしいの！」

「馬鹿正直な反応だなソネット。そんなわけないだろ？ 別に地底暮らしなんてしてないし、他はともかく俺はよく人間の都市や町に行つてたよ」

「からかったのね！」

カツと、頭に血が上る。

「悪い悪い。年のわりにはお前は素直で騙しやすいんだよ。まるでまだ穢れを知らない乙女のようだ

「ひひ、ひめのさいわね！」

今度は別の意味で顔が赤くなつた。

「それじゃ、君の目的は何？ 女神を殺すことではないのなら」

「兵器を作るのさ」

キクの質問に即座に返ってきた答え。一尾の口元が大きく開いた。

「俺は数多の兵器を造ってきた。マルスオフを使い、合成して、軍事国家のような戦車や戦闘用ヘリなんかも造った。お前達は何か作品を造つたら世間に出して人に見せたいだろ？ 自分の作品がどんな評価を得るのか試したいだろ？ 俺は頭の悪そうな武帝國に自分の作品を使うことにした」

「そんなことで……たくさんの人を殺したの？」

狂氣の兵器開発者が言いそうな台詞だ。しかも戦争に対しても何の責任も、重みも感じていない。あまりにも理由が軽すぎる。

「そんなことで？ これは純粹な探求心だ。どんな威力か？ どんな使い方をするのか？ 俺の作品を目にした人間はどんな反応をするのか……」

「そんなことじやないわ！ 人を殺して何とも思わないのかって聞いてるの！」

「おいおいソネット？ その質問ははつきり答えがでてるじゃないか？ お前は自分の餌になるマルスオフのことなど考えるか？」

「……それは」

一尾を攻める言葉が出てこない。人とマルスオフは違う。だけど生命は同じではないか。単純だが奥が深く、ソネットは簡単な答えを思いつけない。

「俺とお前達は種類が違う。お前達が人間なら、俺はエコーズだ。そこに超えられない絶対の壁がある。 食用の豚に同情の涙を流すのか？」

「ううう……」と顔をしかめるソネット。一尾はすでに割り切っている。もう自分は人と仲良くなどしない。いつでも裏切るのだと。

「何悔しそうな顔をしている？一時でも、一緒に時間を共有した仲となつたことで愛情でもいだいたか？」

「いだくわけないでしょ！」

図星なだけに語気が荒くなる。もう一尾と握手できそうにない。ソネットのあふれ出る感情が、涙目となつて表れる。

「そう それでいい。俺とお前の関係はそれでいい」

一瞬だが一尾の顔が緩んだ。まるでソネットに嫌われて安心しているように見えた。あまりにも一瞬だったため、誰にも一尾の感情は気づかれなかつた。

「さて、話しあを戻すぞ？ 最初は武帝国攻略を目標にしていたが、さすがマツチヨの大国。戦況はいつの間にか不利になつていて。なによりも俺が飽きた」

またふざけた理由だ。もうソネットは何も言わなかつた。

「そこで兵力を強化しようと情報を集めていたら、エリニコスが女神を手に入れたという。確か、エリニコスの派閥の1つ『烙印の瞳』だつたか？ 半信半疑だつたが、とりあえずあの髪の大将の護衛というチャンスを得ることができた

「結構、めんどくさいことするんだね」

呆れたのかキクが両手を広げる。

「そういうのが好きなんだよ俺は。後は老齢のエコーズを使ってあの旧世界の塔を襲わせた。女神がいる部屋はわかつていたが、力があるかどうか試したかったからな」

「老齢のエコーズを？」

刀の構えを崩さないまま、カンタロウはオウム返しに聞いた。

「エコーズはこの世界に浮遊し、目に見えないウイルス『紅姫』の抗体をもっていない。死ねば『赤い花』にその身を喰われる。邪神の血となり肉となってしまう。それは人間に殺されるよりも屈辱だ。安らかな死を与える代わりに塔を襲えともちかけたら、あつさり乗ってきた。まつ、実際は異世界に送っただけだけね」

旧世界の塔が襲われたのは、ただエコーズがこの世界の人間を嫌つてではなく、裏に複雑な要因があつたようだ。

「さあ、話しさは終わりだ。よくわかつたる？」

「適当感があるけど長い話、ありがとう」

「はは……やはりお前は面白い」と一尾はキクに向かつて言った。

「では 女神を渡していただこう。そうすれば戦いだけは避けられるぜ」

ローブを頭にかぶるノゾミはまつたく反応しない。一尾の八重歯が口からはみでた。

「お前の肉体を滅ぼし、『13神』と同じく『力だけの存在』にしてやる。そして俺の兵器となり 絶対的な恐怖で世界を支配し

てもらひ

一尾の前に、ダンテが一步でた。「うん?」と一尾が反応した。

「力だけの存在……それは……生きてるの? 花を綺麗だと思ったり、星の輝きに喜んだり、鳥や動物達と遊んだりできるの?」「できないなあ。だけどただの人間として生きるよりかはマシだぜ?」

一尾の表情が張り詰める。

「もし女神の力がないとしたら……お前達帝軍がその子を護るか? ハンターがお金にもならないその子を護るか? エリーカスの信者が命をかけて、その子を護る必要があるのか?」

ノゾミの瞳から一筋の涙が流れた。

何かを思い出しているのか、激しく動搖している。

涙は地面に落ちて粉々に砕けた。

言葉にならない感情が、ノゾミの涙を促す。

「ただの人間に価値はない 大切な人を失つても、流れない涙にしてやる!」「もう……もうやめろ!」

叫ぶダンテ。興奮からか言葉が引きつる。息子の激しい感情にソネットは目を開く。

「ほ

「僕はお前の言つことなんか聞かない! だから ノゾミに神の力がなくたつて護つてみせる!」

「威勢がいいな。いや、いいことだ。子供は元気でなくっちゃ」

人間の言葉は、エコーズには届かないのか。一尾は平然とダンテの言葉を聞き流す。いや、むしろ人間の言葉を信用していないのかかもしれない。それを表すように、一尾は自分の耳を指でほじくつた。激しく呼吸するダンテの肩に手が置かれた。ダンテは空を見上げた。

「カンタロウさん……」

「まつ、そういうことだ。お前にノゾミは渡さない。ほしけりや俺を殺していく」

刀を構え、戦闘の態勢になるカンタロウ。

「答えは出たよね。言つとくけど、ノゾミは私のものだから」

キクも剣を構え、カンタロウの横に立つた。「いや、お前のものじゃないわな」とカンタロウは突っ込んだ。

「ヤン……いえ、一尾。あなたと初めて出会つた時、生理的に受けつけないと思つたけど。今はますます駄目になつたわ」

ソネットもキク、カンタロウと並んで横に立つ。ノゾミを渡すつもりはないという全員の意思表示だ。予想外の展開に、ノゾミ本人は驚き皆を見上げた。それはそつだらう、自分を目の前のエコーズに渡しさえすれば全員が助かるというのに、わざわざ戦いを選ぶというのだから。

「まつ、いひなる」とは予想済みだ。なんつたつて強者同士。話しあいには土台無理。ならば戦いで決めるしかない

パチン

一尾が指を鳴らした。

突然、地面に円形魔法陣が描かれ、星のよう光った。太陽の射さない森林に、不気味な光が螢のように仄かに大木を照らす。

「何つ！？ 円形魔法陣！？」

普通魔法陣は手でもって描かれる。

それが指一つで構築できるのだ。

相当な実力者でなければこんな芸当はできない。

「召喚魔法だ。一尾といえば『殻のマルスオフ』の使い手だ。油断するなよ」

カンタロウの言つとおり、茶色の固そうな装甲が巨大な魔法陣から姿を出す。砲弾をまっすぐ飛ばすための長く大きな筒が3つ、ゴツゴツした凸凹の表面、狭い森に似合わない巨体。いびつな姿をした戦車型マルスオフが、戦闘を前にして喜び叫ぶ。

「もとより戦うつもりだったんだよ。　うまく女神を護つて死んでくれ。帝軍にハンターさん」

一尾はマルスオフの上に乗ると、そこから5人を見下ろした。

戦車型マルスオフは歓喜するかのようにキヤタピラを回す。左右の5つある車輪が「ガラララララ！」と轟音を鳴らし、召還魔法陣を荒く削つた。岩が砕け、石が飛び散り、悲鳴を上げながら大木が倒れ死んでいく。長い筒が自在に動き、木の幹を木つ端微塵に碎いていく。その行動は破壊神そのものである。

「アドバイスだ。うまくよけるよ。コイツの火力は半端ないからな。まともに当たれば体は残らないぞ」

余裕の笑みを浮かべる一尾。

一尾の足の下でマルスオフの大きな目がカツと開いた。グルグルと眼球が動き、敵に焦点を合わせる。破壊できる敵に打ち震え、口のない巨体をせらりと振動させた。

「カンタロウ君！」

「わかつてゐるわな。ノゾミ、俺の背中に乗れ」

すぐにキクとカンタロウは行動を開始した。腰を降ろすと、ノゾミに背中に乗るように催促する。ノゾミは躊躇した。

「どうした？」

「カンタロウ 私を置いていけば助かるのですよ？」

「……それで？ とにかく乗れ」

「……」

ノゾミは手を握りしめ、胸に掲げて迷う。だが時間がない。決心すると、言われたとおりカンタロウの背中におぶさつた。

「ダンテ君、おもいつきり走れる?」

「うん。大丈夫」

「「ケるなよ」

頷ぐダンテ。2人が何をするのかまだわからないが、生きる意欲だけは感じ取れる。

「何? どうするの?」

帝軍の行動がわからないソネットは、剣を抜いたまま困惑している。

「準備できたぞ」

「よつしゃソネット! とんぼりするぞ!」

言つが早いが、カンタロウはノゾミを背負い、キクはダンテの背中を叩くとその場から全速力で逃げだした。

「……へつ?」

「母さん! 早く!」ヒダンテも倒れた大木を飛び越えて逃げる。肉食動物を見つけて、草食動物が我先にと逃げていくかのようだ。もう帝軍2人の姿は森林に隠れてしまっていた。

「ちょ、ちょっと待つてよ!」

ソネットも剣を背中にしまい逃げる。背中からマルスオフの圧力の高い威圧感がする。後ろを振り向かず、ただ全力で疾走する。

「……あれ？ ……おい……」

まだ召喚魔法陣からマルスオフは体のすべてを出していない。全力で逃げた5人を一尾は追いかけることができない。むしろまさか帝軍が、ブラックリストにのっている自分を前に逃げる」となど想定外だった。

「どうして逃げるのよー。 戦う雰囲気だったのにー。」

せつそくソネットがカンタロウに突っかかる。

「一尾は『24Hコード』の1人だ。あんなのとまともに正面から戦う必要はない」

赤眼化していくてもカンタロウの身体能力は高い。進行に邪魔な木を体に当てることなく、ピヨンピヨンかわしていく。背中に乗つているノゾミは怖さからか両手を閉じていた。

「でもあなた達『死帝』って呼ばれてるんでしょー。」

『死帝』とは『帝国軍第四類』のもつ一つの呼び名だ。ある犯罪者がその容赦ない攻撃と高い能力ゆえに、恐れをなしてつけたあだ名である。そのイメージは人々に伝えられるうちに変質し、どんな敵でも逃げ出さない『最強の軍隊』となっていた。男の子のなりたい職業ランキングを押し上げている強烈なインパクト要因である。

「チチチッ……。ソネット甘い。アイツ絶対戦いのための準備ちやんとしてる」

「どうしてそんなことわかるのよ？」

「指パツチンでんな巨大な召喚魔法使えるわけないじゃん。あつと他にも魔法仕込んでるよ。あつと」

考えてみればそうだ。あまりにも出来過ぎてこる。『くら』24エコーズ』といえど、召還するものを即座に決め、しかも都合よく狭い木々の間ではなく、広く開いた木のない平地で召還魔法陣を発動できるだろ？ 1つ1つ潰していくば、これはかなり綿密に計画されてる。

「あつ、あうなの？」

自分の考えの浅はかさによつやく気がつく。

「とにかく運がよかつたのはあいつは南側にいたってことだ。俺達は北側を田指してこのまま進んで行けばこの森林を出られる

「無理して戦う必要はないってこと」

どういう経験を積めばそんな決断をすぐできるのだろう。黙つて従えば助かるかもしれないソネットは思った。ただ、1つだけ納得できることがある。必ずこの戦いが終わったら聞いてみようとして、言葉を心の奥底まで詰め込んだ。

「……まさか逃げるとわね

マルスオフの召還は完了した。だが敵がない。不発となつたストレスからか戦車型マルスオフの両目がしきりと回る。

「人間つてのは予想の斜め上をいく。せつかく準備してたのに。俺の攻撃で傷を負いながら逃げるつてシナリオだつたのに」

砲塔のハッチに座り、顎に手を乗せ逃げた敵の方角を眺める。緊迫した場面から、あまりにも呆気ない結末に、つい緊張がゆるみ隠していた尻尾が出てしまつた。この茶色毛の尻尾は一尾の体の一部でピコピコと動く。

「……やはり人間つてのはわからん」

ソネットに嘘をついていたことが1つある。武帝国に攻め入ることを「飽きたからやめた」という理由だ。実はそうではなく、追いつめられたのだ。

当時、マルスオフの司令塔である一尾はいつものように戦争に出ず、森の奥へと隠れていた。マルスオフの視覚を自分の視覚とリンクさせ、戦争を眺め指示するのが一尾の戦争スタイルだつた。自分の正体がバレず、しかも傷つくこともないという完璧なやり方だと自負していた。しかし、居場所が相手側にわかり、思わぬ攻撃を受けた。

まだ若い3人組の戦闘員だつた。武闘赤眼化し、不意をつかれた。奇襲攻撃は成功し、一尾に重傷をおわせ、戦争は終わつたのである。それから一尾の災難は続いた。

自分の正体が詳細に敵に知れてしまったのである。『24エコーザリスト』という不名誉なリストに入れられてしまつた。あんなりストにのるエコーズは戦争の素人だと思っていたのに、まさか自分が書き込まれるとは思いもしなかつた。頭の悪い国だと思って油断

した愚かな自分。知恵のある動物に攻撃を加えると、必ず思わぬしつけ返しをされる。一尾はようやく『人間』を学んだのだ。だからこそ慎重に戦いを進めなければならない。

「さて、それじゃアイツ等に連絡しておくか」

一尾は無線機を取り出した。

「もしもしー？ もしもしー？」

応答がない。ノイズだけが波打っている。

ガサツ。

木の枝が震えた。空から2匹のマルスオフが落ちてくる。

「うん？ なんだ？」

1匹は灰色の狼。後肢にある4本の爪を地面にたて、2本足で立ち上がる。長い顎を開け、発達した裂肉歯が丸見えになるまで口を開く。

もう1匹はコウノトリだ。森林の入口で、ソネット達に驚いていた野生の鳥である。ふわりと舞い降りると足指を地面にくいこませる。狼と同じく、上顎と下顎を大きく開いた。

【どうなつたんだよー】

灰色の狼から若い男の声がする。

【待ちくたびれたぞ。わらわは暇は嫌いじゃ】

「コウノトリからは女の声がした。どうやら無線機は使わず、マル

オスオの口と自分達の口をリンクせしむるよつだ。

「あれ？ お前等無線機は？」

一尾はまったく驚かない。声の主はわかっているし、田の前の2匹は獣の皮をかぶったマルスオフである。つまり、エコーズの操り人形なのだ。

【あんな扱いにくい】アナログ機械使えるか！ マルスオフ使えばいいだらうが！】

【まったくじや。あの機械はわらわの部下が踏んでもうた】

不平不満。使う機会の少ない無線機はすでに放棄されていた。一尾はそんなことでは怒りはしないが、女の無線機を壊したという単語にはピクリと眉を寄せた。

「……青火。お前も壊したのか」

無線機はかなり高価な物だ。一尾の口調が変わる。それを微妙に感じ取ったのか、青火と呼ばれた若い男の声が慌てた。

【壊してねえよ！ 俺の部下が飲んじまつただけだ！】

それは壊したと同義だ。

「はあ……」と一尾はため息をついた。そして無線機のすばらしさを教えようとした自分が馬鹿だつたと後悔した。

「お前等後で弁償な」

【なつ！？】

【うつ！？】

2人のHゴーッズは絶句した。

【「ホン……ともかく。計画は進んでおるのか?】

女のHゴーッズはとりあえず話題を変えた。

「バッヂリだ。この森林の出入口はすでに把握している。お前方へ向かつたぜ。青火」

【「うか!? ははつ、燃えてきたぜ! 久々の強敵だ!】

狼の口を通して、青火が興奮しているのがわかる。

【「……で、一尾。敵に……その……アレだよ。アレ】

と、興奮したかと思えば今度は改まった。

「なんだ?」

【「おつ……女性はいるのか?】

「はつ! ? 聞こえないぞ?」

声が小さすぎて何を言っているのかわからない。一尾は耳を傾けた。

【「女はいるのかって聞いてんだよ!】

【「急に何を言つておる? 発情した猿かおのれは】

女のHゴーッズが呆れている。

【「ちげーよ! 敵の性別を把握したいだけだ!】

【嘘つけ】

【ほんとだつつてんだろー!】

誤魔化すのが下手なタイプのようだ。表情を見なくても声からして嘘だとわかる。

「まあまあ。敵は5人。男2人、女2人、女神1人だ。その内訳は帝軍が男女2人。ハンターが残り2人だな」

敵の情報を詳しく一尾は教えてやった。

【ほう？ 珍しい組み合わせじゃな？】

【女が2人もいるのかつ！？】

ますます青火が女というワードに興奮していく。

「でもその中の1人は子持ちだ。息子がいるって言ってたな」

【チツ、ババアかよ！ ババアに用はねえ！】

若い女しか興味がないらしい。ソネットの実年齢は18歳なのだが青火は吐き捨てた。熟女はお気に召さないということだ。

【……で、もう1人の女は……その……世間一般的にいうとアレだ……美人の人か？】

【汚らわしい。お前にはババアの方がお似合いじゃ】

よほど女神よりも女を優先する態度が気に入らないようだ。また女のエコーズが毒づいた。

【違うつづつてんだろー！ 深い意味はねえよ。『一』『二』『三』……】

言い訳のネタが尽きたのか最後の言葉は小さかった。

「うーん。まあ美人の方じゃないか？ 金髪碧眼つてのは珍しいし  
な」

キクの姿を思い出す。人によつて美人の基準は違つが、世界の人  
が恐らく彼女を美女だと認めるだろつ。キクには資質があるからだ。

【マジでかつ！？】

【そんなわけがあるものか。帝軍にしろハンターにしろ戦士であろ  
う？ ボコラと同類の面構えのはずじゃ】

女のHコーズはあくまで認めない方向で行くひじ。

「やつでもないぜ。ちなみに帝軍の方だ」

一尾がお墨付きを『えた。

【よつしゃ！ やつてやる！ やつてやるべー】と青火のモチベ  
ーションが艦登りに上がつていつた。

【ならば女神はどうじや？ まだ幼子じやうづ？】

「年齢的にはギリギリだと思うが……まあ温室育ちつて所か。女神  
として育てられたのか感情の起伏が少ないしな。神に感情は必要な  
いって感じ」

【ほほ、みよい。わらわのモノに相応しい】

幼女が好きなのか女のHコーズのモチベーションもそれなりに上  
がつた。

「とにかく、よろしく頼むぞ」

【任せろー】

【了解じや】

灰色の狼と「ウノトリは口を閉じると空へと舞い上がつた。狼は木の枝から枝へ、「ウノトリは大空へと飛翔する。残された一尾は首をコキコキ鳴らした。

「さて……マルスオフを使って奴等を追つか」

森林の北側出口となる平地。

土の栄養に乏しいこの場所では森林と呼べるほど木はなかつた。先にあるのは岩山で緑の草は少ない。森林の出口ともいえるこの平地で、狼の頭をした数十人の兵士達が、残り少ない草花を踏み潰していた。

彼等は人間と同じ2本の足で立ち、2本の腕に手には剣を持つている。体は固い鎧を身につけ、一見すると普通の戦士と見間違う。『ゴボルト』と呼ばれているマルスオフで、社会性があり群れにはリーダーが必ずいる。彼等のリーダーが高い岩の上に立つた。

「よし！ お前等戦争の始まりだ！」

『ブルーレバノン』という血溝が青い剣を天に掲げ、人間でいうと青年の姿をしたエコーズが戦闘を前にして雄叫びをあげた。釣り上がった眉に、剥き出された歯は血氣盛んな若者を連想させる。髪、瞳共に青く、着用している鎧も同色だ。目に止まるのは体の一部に

青い炎が燃え上がっている事である。防火性のある剣や鎧のおかげで素肌をさらさない仕組みになっている。それゆえに、本人のみならず身につける物すべて青く染まる。

『24エコーズ』青火。その名の所以となる体についた青い火は、本人ですら消すことができない。

「女は生かして俺の所に連れてこい！ 男は殺せ！ いいな！」

青火の言葉にコボルト達は大きく吠えた。剣を青火と同じように天に掲げる。興奮はピークへと達していた。『獣のマルスオフ』の使い手である青火に自らの戦闘意欲をアピールしているようだ。

「ははっ！ いいぞお前等！ 楽しくなってきたぜ！ 今日も騒ぐぞ！」

御輿のような建物が、木陰の地面に置かれていた。

御輿を担ぐために必要な、突き出た4本の木の棒の傍には、異様な者が立っている。

「……ふん、下品な奴等じや。昨日の夜もドンチャン騒ぎしあつて。まあ戦いは奴等に任せとけばよい」

移動用御帳台の中で女のエコーズが呟いた。天蓋の屋根は布で覆われ、太陽の光を薄く和らげている。板敷きの上に畳が二帖ほど敷かれ、茵じとねという敷物が使用されている。脇息という肘置きに体をもたれ、口元を紅梅色の扇子で隠す。高貴溢れる格好だ。

台を持ち上げ運んでいるのは米俵の服を着、汚い布に子供の落書きのような顔を描かれたマルスオフ4体である。布の中に軟体なマルスオフが入っており、女のエコーズの下僕として働いている。『布のマルスオフ』の使い手と呼ばれる所以だ。

お姫様カツトの黒髪に、大人びた声色にまったく似合わない大きく幼い黒い瞳。高位な身分を表す赤の唐衣と裳を着こなし、細身の体を膨らませる。扇子を閉じれば可愛らしげな面容だ。

「初音。わらわの近くにこい」

「はい。紅葉様」

黒いおかっぱ頭の左右に、ちゅうちょ結びをした赤いリボンをつけた少女が、『24エコーズ』紅葉姫の傍へと近寄る。紅葉姫の侍従として働いているのである。六芒星のような籠目の着物を着せらわれているようだ。

初音は紅葉の膝元に横側の頭を乗せると、その頭を愛おしそうに撫でられる。当人も可愛がられることに満足しているのか表情は緩い。

「ふふ、愛しい奴じや。……女神はわらわのもの。捕らえてたっぷり可愛がつてやろうぞ」

3人のエコーズによる、女神の争奪戦が今始まった。

奇妙な鳥が、広大な森林を飛行していた。

鳥の全長は100センチメートル。種類はワシに近い。地上から肉眼でどうにか捕らえられる高さで飛んでいる。奇妙なのはその動き。鳥の特徴としてクチバシや小さな目、かぎ爪、茶色の翼はある。ただ、飛行方法は波打つような動きではなく、常に一定。それはベルトコンベアで運ばれる製品のように機械的だつた。

スピードは遅く、何かを探すようにしきりに目が動く。獲物がいなかつたのか、次は東の方角へと向かう。

「……行つたか？」

カンタロウが林床から空を見上げる。背にはまだノゾミを背負つていた。すぐ傍にキク、ソネット、ダンテもいる。

「どうして隠れるのよ？ ただの鳥じゃない？」

ソネットがぎゅうぎゅう詰めから不満を上げた。隠れた場所が悪く、木の影の範囲が狭かつたようだ。5人は体を密着させていた。

「動きを見る。俺達が逃げてきた道をなぞつてはいるわな」

もしかすると一尾が放つた追つ手かもしれないと思つているようだ。事実、鳥は小動物を見つけても森へと降りてこない。直線飛翔を維持している。

「あの大きさだとわかりやすいわあ。鳥に擬態しているわりには、動作がわざとらしいね」

キクが手に額を当て、鳥を眺める。

「鳥は目がいいからな。もしあれがマルスオフなら、俺達の居場所が特定される」

「どうして？」

「コントラクト・リンクというHコーズだけが持つていて特殊能力を使つてゐるからだ。マルスオフを操れるだけでなく五感も支配できるらしい。ということは、あの鳥の目を通して俺達の視覚情報が伝わつてしまつ。鳥の目はHコーズの目と同じ意味を持つ」

「そんなことまで……」

マルスオフを操れるといつことまではソネットでも知つていた。しかし、五感を支配できるといつのは初耳だ。

「Hコーズの生態の研究は日々続いているからね。まだまだ私達の知らないことがたくさんあるわけよ」

さすがHコーズやマルスオフを担当する部署だけあって、キクとカンタロウは敵の生態に詳しい。よくよく鳥を眺めれば、知性ある者の意思が感じられる。つまり、鳥ではない何か別の意思である物体は空を飛んでいるのである。

「……確かに私達を探してゐるよつとも見えるわ

何種類もの鳥を見てきたソネットは、素直に帝軍の言葉を信じた。それほど今空を飛んでゐる鳥は怪しいのだ。

「…………

キクは何か気になるのかまだ鳥を眺めている。

「しばらぐ！」から出られそうにないわな

「ちょっと……少し近いんですけど」

隠れる場所が狭いため、ソネットの体にカンタロウの体が密着する。とはいっても、直接カンタロウが触っているわけではない。それでも男に触れられるのが極端に嫌なのが、ソネットが真顔になる。

「仕方がないわな。それに男にくつつかれたぐらいで照れる年か？」

ソネットの態度にうそぞうしたのか、カンタロウは心にもない嫌味で反論した。

「なつ！？ デウニヒヒー！」

ソネットが案の定食いついてくる。

「息子がいるのならもう俺達よりも年上だろ？ こんな危険な状況だ。それぐらい我慢するわな」

「あなたいくつよ？」

「21歳。キクより一つ年上だったな？」

「なら私の方が年下……あれ？ キク？」

ようやくおしゃべりなキクが、魚のように黙つていふことに気づいた。「うん？ デウした？」とカンタロウもキクの様子に気づく。

「……なんでもない」

キクは鳥から視線を外した。

「気になるわね……あれ？ 何の話してたっけ？」

しばらぐソネットは考えていたが、「まつ、いつか」と思惑をやめた。

「カンタロウ、私を降ろしてください」

「おお、すまんすまん」

ノゾミがカンタロウの背中から降りた。しばらぐ動けそうにないので、カンタロウも問題ないと判断したようだ。

「とにかく慎重に北に行くわよ。」そのまま一尾に見つからずに森林を出られれば私達の勝ちね

「ソネット、やめた方がいいです」

「えつ！？ どうして！？」

「 やつきのHマークと同じ気配が北でします」

絶句。監口が動かせない。

ノゾミの左右の烙印が心持ち輝く。注目されてもノゾミは平然としている。キクは腰を曲げ、ノゾミの視線に自分の視線を合わせた。

「ねえ、ノゾミ もしかして同じ気配が東でもする？」

「クリと頷く。ソネットとカンタロウが目を見合わせる。

「どうしてわかるの？ ノゾミ？」

ダンテの質問にノゾミは答えられないのか首を振るだけだ。

「わかりません。でもダンテ、信じてください」

じばらべダンテはノゾミの瞳を眺めていた。濡れている瞳はすがるよう見つめ返してくる。「わかった」ダンテはノゾミを信じた。「そういえば旧世界の塔をエコーブが襲ってきた時、ノゾミは誰よりも敵の気配を察知できただよ」

補足するようにノゾミの力の一端を話すダンテ。

「本当? ノゾミ?」と聞き返すキクに、ノゾミは「クリと頷いた。

「女神……いや、『神の血脈』の影響か?」

女神といつも言葉を言い替え、カンタロウが腕を組んだ。

「カンタロウ君 私達ともまざい状況にいる」

唐突にキクが真剣な表情になつた。あまりにも普段と違う態度にソネットは息を飲んだ。

「どうしたことだ?」

「『』の森林に入った時からの状況を考えてみて」

カンタロウとキクの視線が一致する。田には見えない透明な線で、2人は会話しているようだつた。

「……そうか。しまつた。まんまとはめられたわな」

何かにカンタロウが気づいた。腕を組んだまま視線を下へ落とす。

「何よ？ どうこうこと？」

2人の間に入れないソネットがすぐに問いただす。

「俺達が森林に入つて多種類のマルスオフに襲われたろ？」

「うん」

「普通なら有り得ない。マルスオフにも縄張り意識があり、食物連鎖という序列がある。知能の高いエコーズならともかく、異種類のマルスオフ同士、共闘はしない」

確かに、種類が違うマルスオフが示し合わせたように突然襲つてきた。しかも連続的ではなく一定の間隔をあけて。考えてみれば違和感がある。ソネットは手を顎に当てた。

「……ということは？」

「一尾の仕業だ。この広大な森林で、敵の位置を探索するのは容易なことじゃない。そこで定期的にマルスオフを襲わせて、俺達の居場所をしぼりこんだ」

「そうか……コンタクト・リンクっていう能力を使えば簡単だ。僕達の居場所をつかみ、一尾つていうエコーズは偶然を装つて現れる

ダンテは理解できたようだ。

「それだけじゃないよ。南側から現れたのもきっとわざと。正体がバレれば私達が北に逃げることを予測されていた。あんな巨大な召還魔法陣を用意していた所からして正体がバレても問題はなかつたつてわけよ」

さらにキクが説明をつけ加えた。

「それじゃ、無理矢理アイツをハメなくともよかつたわな  
「まったくですな」

「？」。2人の言葉の意味がわからず、ソネットの頭に疑問符が  
ついた。

「きっと来た道を戻つて南に行つても無駄だね。すでに包囲されて  
いる？」

一応ノゾミに尋ねてみる。

「はい、ダンテ」

答えは予想通りだつた。

「つまり……『この森林すべて』が奴等の罠だ。俺達はまんまと獵  
師の罠にかかつた兎つてわけだな」

「そんな……それじゃ、どうするのよ？」

絶望的な状況。罠の檻に入つてしまつた動物のような心境だ。暴  
れたとしても檻は壊れない。静かに諦めるしかないのか。

「……西へ向かうしかないか  
「逆にね」

苦渋の選択。カンタロウは出口のない西へ向かうと選択した。キ  
クも薄々考えていたのか賛同する。

「確かに、この森林は山と湖で囲まれている。山は雨によつて削られ、急斜面があり危険だと思うが、俺とキクの四天の魔法を使って空を飛べば逃げられるかもしれない。ただ……」

「ただ……何よ？」

ソネットが不安そうにカントンタロウの言葉を聞き返す。

「敵もそんなことはお見通しだつてこと。私達2人の魔法は旧世界の塔で一尾つてエコーズに見られているはず。もしかするとダンテ君やノゾミちゃん、ソネットを運んでいる所を集中砲火される可能性がある」

キクがカントンタロウの代わりに答えた。2人は意外と相性がいいのかお互い考えていることがわかるようだ。

「湖を泳ぐつてのも危険だ。この森林だけで天然系のマルスオフがこれだけいるんだ。何が潜んでいてもおかしくない」「すごく危険な賭けだけど……それでも行く？」

個人ではなく帝軍としての忠告。キクはソネットに選択を促した。

「……仕方ないわ。可能性が少しでもある方に賭けましよう」「その意気だよソネット。よっしゃカントンタロウ君。行くか！」

いつものキクに戻つたようだ。拳を振り上げ西へと進む。

「そだな」

カントンタロウもその後ろをついて行つた。ソネットもその後ろに続

く。

「……ダンテ、どうかしましたか？」

前へ進もうとしたノゾミがふと立ち止まる。ダンテが不思議そうに空を見上げていたからだ。

「鳥の動きが……変だなって思つて……」

翼を羽ばたかせない鳥が、今度は北東へとグルリと旋回していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6623h/>

---

帝国物語～白百合のマリア～

2011年11月17日20時57分発行